伊刀古
（イトコノ（代）
イトフルキ（考）
イトコ（考・略・新・古）
愛し子の義、古くは親愛の語、後には従兄弟にいふ。

物爾伊行跡波
（モノニイユクトハ（考・略）
モノニイユク（古）
モノニイユクトヤ（新）
（　）の中十句は序である。

平群
大和國生駒郡生駒村の古名である。

乞食者詠（ノ メル）二首

この二首の歌は、乞食が門々に立つて食を乞ふ時に歌つた古歌である。乞食が作つたのではなく、或歌人の手に依つて作られたものであらうといはれる。

（いと古乃）
こな背のきみ
（名兄乃君）
をりをりて
（居居而）
物にい行くとや
（物爾伊行跡波）
から國の
（韓國乃）
虎とふかみを
（虎云神乎）
生捕に
（生取爾）
八つ取り持ち來
（八頭取持來）
その皮を
（其皮乎）
八重疊（うづ）
（八重疊）
四月と
（四月與）
五月のほどに
（五月門爾）
薬狩
（藥獵）
仕ふる時に
（仕流時爾）
あしびきの
（足引乃）
この片山に
（此片山爾）
疊にさし
（多多彌爾刺）
平群の山に
（平羣乃山爾）

いとしい夫の君が、これまで共々に一所に住んでゐたのに、物へ詣ると云つて、三韓に棲む虎と云ふ恐ろしい獣を、生捕にして八頭捕へて來た。その皮を疊に疹へ、それを八重に敷くと云ふ言葉に通ふ、平群の山で、四月・五月の頃行ひ給ふ藥獵にお仕へ申してゐる時分に、近くの片山里に二本立つてゐる櫟の下で、多くの梓弓を取持ち、獣を射る多くの鏑矢を手挟んで、鹿を待伏せして射てやらうと自分が待ち伏

二位
（フタタテル（略）
フタツタツ（考・略・古・新）

吾可死
（ワレマカルベシ（考）
ワハシヌベシ（略・考）
アレハシヌベシ（古）

み笠のはやし
はやし栄えあらしめる料で、ここでは飾りといふことになる。筆の場合には單に料といふことになる。

目ら・毛ら
らは單なる接尾語。

二つ立つ
（二位）
櫟（いちひ）が
（伊智比何本）
もとに
（爾）
梓弓
（梓弓）
八つ手挟み
（八多婆佐彌）
ひめかぶら
（比米加夫良）
八つ手挟み
（八多婆左彌）
猪待つと
（猪待跡）
我が居るときに
（我居時爾）
鹿の
（鹿乃）
さ來
（佐來）
をの男
（男）
にはかに
（頓爾）
大君に
（大王爾）
來立ち嘆げかく
（來立來嘆久）
吾は死ぬべし
（吾可死）
吾は仕へむ
（吾仕牟）
吾角は
（吾角者）
み笠のはやし
（御笠乃波夜詩）
み墨の壺
（御墨坩）
ま澄みの鏡
（眞墨乃鏡）
我が耳は
（我耳者）
み弓の弓筈
（御弓之弓波受）
我が目らは
（我目良波）
み筆のはやし
（御筆波夜斯）
我が爪は
（我爪者）
わが毛らは
（吾毛等者）

せしてゐる時に、一匹の牡鹿がそこへ來て歎いて申すに、「私もやがて射られて死ぬるで御座いませう。その時にはこの身を天子様の御用に捧げませう。先づ私の角は天子様の御笠の飾に、私の耳は御墨壺に、私の輝かしい目は澄みきつた御鏡に、又私の爪は御弓の弓筈に、毛は御筆の材料に、皮は御箱を張る皮に、さうして私の肉と肝とは切つて御膳に、胃袋も御鹽辛の材料に供へ奉りませう。かうして老い果てた身一つが捨てる所なく何まで御役に立ちますれば、七重にも八重にも花が咲くと云ふ風に、誠に光榮に存じますと申しましたと、ほめ囃して載きたいので

みぎ
みげともにげともいひ、胃袋のこと。新考には腦であらうといふ。

白賞尼
マウサネ（考）
マヲシハヤサネ（略・古・新）

なまる
隱れること。

吾乎召良米夜
ワヲメスラメヤ（舊）
ワレヲメスベキ（新）

わが皮は（吾皮者）　み箱の皮に（御箱皮爾）
わが肉は（吾宍者）　み膾はやし（御奈麻須波夜志）
わが肝も（吾伎毛母）　み膾はやし（御奈麻須波夜之）
わがみぎは（吾美義波）　み鹽のはやし（御鹽乃波夜之）
老いはてぬ（耆矣奴）　わが身一つに（吾身一爾）
七重花咲く（七重花佐久）　八重花咲くと（八重花生跡）
申しはやさね（白賞尼）　申しはやさね（白賞尼）

○

*おしてるや（忍照八）　難波の小江に（難波乃小江爾）
庵作り（盧作）　なまりて居る（難麻理弖居）
葦蟹を（葦河爾乎）　大君召すと（王召跡）
何爲むに（何爲牟爾）　吾を召すらめや（吾乎召良米夜）

ございます。」と云つたことである。

難波の入江に庵を結んで隱れ住んでゐるこの葦蟹を、天子樣がお召しになるといふが、何の爲に私をお召しなさるのだらうか。何の役にも立たない私であることは明かであるのだが、さても

吾知事乎
ワガシルコトニ（考）
ワガシルコトヲ（略・新）
アハシルコトヲ（古）

雖立
タチタレド（考・略）
オカネドモ（古）
タツレドモ（新）

雖不策
ツカネドモ（代・略・古・新）
メサネドモ（考）
ツユセネド（考）

おきそ・つくぬ
地名であらうが何れの地に在るか不明。

參納來弖
マウイリキテ（代）
マヰリキテ（考・略・古・新）

ふもだし
馬を繋ぐほだしのこと。

明らけく（明久）　我が知ることを（吾知事乎）
歌人と（歌人跡）　吾を召すらめや（和乎召良米夜）
笛吹きと（笛吹跡）　吾を召すらめや（和乎召良米夜）
琴彈きと（琴引跡）　吾を召すらめや（和乎召良米夜）
かもかくも（彼毛）　命受けむと（命受牟等）
*今日今日と（今日今日跡）　飛鳥に到り（飛鳥爾到）
*立ちたれど（雖立）　置勿に到り（置勿爾到）
*つかねども（雖不策）　つく野に到り（都久怒爾到）
ひんがしの（東）　中のみ門ゆ（中門由）
參り來て（參納來弖）　命受くれば（命受例婆）
馬にこそ（馬爾己曾）　ふもだしかくもの（布毛太志可久物）
牛にこそ（牛爾己曾）　鼻繩はくれ（鼻繩波久例）

私が泡を吐くから、歌ひ手としてお召しになるのだらうか。それとも笛吹としてお召しになるのだらうか。或は又私が爪を持つてゐるから琴彈にでもしようとて、お召しになるのだらうか。自分にそんなことの出來ないことは百も承知であるが、兎に角勅命を拜しようと思つて、帝都の飛鳥に行き、其處のつく野に行つて、それから御所の東の方の中の御門から參內して仰せ言を承ると、馬には絆をかけ、牛には鼻綱をつけて繋ぐが、馬でも牛でもない私を嚴重に縛つておいて、近くの山陰に生えてゐる樅楡の白い皮を幾重にも〳〵剝ぎ取つて來て、それを毎日〳〵

辛碓（カナウス（代）／カルウス（考）／カラウス（略・古・新））

始垂乎（ハツタリヲ（古・新）／ハツタレヲ（舊））

鹽塗給（シホヌリタベト（考）／シホヌリタマヒ（古）／シホヌリタブト（新））

時賞毛（マヲサモ（考）／モチハヤサモ（古）／マヲシハヤサモ（略・新））

*あしびきの（足引乃）　この片山の（此片山乃）
もむにれを（毛武爾禮乎）　いほえ剝ぎたれ（五百枝波伎垂）
*あまてるや（天光夜）　日の日に干し（日乃異爾干）
*さひづるや（佐比豆留夜）　辛碓につき（辛碓爾春）
庭に立つ（庭立）　碓子につき（碓子爾春）
*おしてるや（忍光八）　難波の小江の（難波乃小江乃）
初たれを（始垂乎）　辛くたれ來て（辛久垂來弖）
陶人の（陶人乃）　作れるかめを（所作瓶乎）
今日行きて（今日往）　明日取り持ち來（明日取持來）
わが目らに（吾目良爾）　鹽塗りたぶと（鹽漆給）
申しはやさも（時賞毛）　申しはやさも（時賞毛）

天日に御晒しになつて、碓に入れて搗き、その上にまた庭に据ゑてある臼にかけて粉にし、難波の入江の鹽の雫の初垂の辛くてよいのを垂らして持つて來て、陶工が造つた瓶を急いで取り寄せて、その瓶に縱楡粉と私の體を一緒に入れて、その私の體に辛い鹽をお塗りになつて、そしてうまい〳〵と御賞味下さい。〳〵。

泉川（山城國に在る今の木津川のことである。）

打橋（假りに木などを打ち渡してある橋。）

浮橋（水上に筏や舟を渡して橋の用に供したもの。）

あり通ひ（ありは繼續をあらはす語。）

萬葉集巻十七

讃三香原新都歌一首幷短歌

この歌は、天平十三年二月に右馬寮頭境部宿禰老麻呂の作つた歌である。三香原の新都については、一二六頁の久邇新京を讃する歌のところに委しく言つてある。老麻呂の傳記は詳かでない。

山城の（山背乃）　恭仁の都は（久爾能美夜古波）
春されば（春佐禮播）　花咲きををり（花吹乎乎理）
秋されば（秋佐禮婆）　黄葉ば匂ひ（黄葉爾保比）
帶ばせる（於婆勢流）　泉の川の（泉河乃）
上つ瀬に（可美都瀨爾）　打橋渡し（宇知橋和多之）
淀瀬には（余登瀨爾波）　浮橋渡し（宇枳橋和多之）
あり通ひ（安里我欲比）　仕へまつらむ（都可倍麻都良武）

山城の恭仁のこの新らしい都は、春になると花が枝もぶらん〳〵に咲き亂れ、秋になると黄葉が華やかに色づいてゐるし、恰もその都を帶のやうに回らしてゐる泉川の上流の方の淺瀨には打橋を渡し、その流の靜かに淀んでゐる瀨には舟橋を渡しておいて、この儘で何日〳〵までも通ひつめてお仕へ申し度いものだ、幾千萬年の後々まで

萬づ代までに
萬代麻底爾

反歌

*たたなめて
楯並而

泉の川の
伊豆美乃河波之

水尾絶えず
水緒多要受

仕へまつらむ
都可倍麻都良牟

大宮所
大宮所

まけ
任の意で、委任すること。任かすと同語根の語。

哀傷長逝之弟歌一首幷短歌

この歌は、天平十八年九月二十五日に、越中守大伴家持が、はる〴〵と弟の死を聞いて詠んだ歌である。

*天ざかる
安麻射加流

ひな治めにと
比奈乎佐米爾等

大君の
大王能

まけのまにまに
麻氣乃麻爾末爾

出でて來し
出而許之

われを送ると
和禮乎於久流登

*青丹よし
青丹余之

奈良山過ぎて
奈良夜麻須疑底

も。

この泉川の水流が絶えることがないやうに、何日〳〵までも引きつゞいて御仕へ申し度いこの御所である。

地方を治めにといつて、天子様の御命令の儘に都を出てやつて來た私を送らうと、奈良山を通り越して、山城の國の泉川の流れのさつぱりとした川原で、馬を止めて相別れた折りに、私も

好去而
ヨクユキテ（舊）
マサキクテ（古）
サキクユキテ（新）

た遠み
たは接頭語。

泉川
泉河

馬とどめ
馬駐

幸く行きて
好去而

平らけく
平久

語らひて
可多良比底

*玉桙の
多麻保許能

山川の
山河能

戀ひしけく
孤悲之家口

見まくほり
見麻久保里

*たまづさの
多麻豆左能

嬉しみと
宇禮之美登

およづれの
於餘豆禮能

清き河原に
伎欲吉可波良爾

別れし時に
和可禮之時爾

あれ歸り來む
安禮可弊里許牟

齋ひて待てと
伊波比底待登

來し日の極み
許之比伎波美

道をた遠み
道乎多騰保美

へなりてあれば
弊奈里底安禮婆

日長きものを
氣奈我枳物能乎

思ふ間に
念間爾

使の來れば
使乃家禮婆

あが待ち問ふに
安我麻知刀敷爾

たはごととかも
多婆許登等可毛

丈夫で歸つて來よう、家の方でも恙く歸るやうに神様に祈つて待つてて呉れと話合つて別れて來たその日きりで、道のりが遠くて、山や川が隔ててゐるために戀しくもあり、月日が長く經つたので、早く歸つて相見度いと思つてゐる時分に丁度都の家から使がやつて來たので、嬉しいことだと、自分が待ち受けて都の安否を尋ねたところが、咒の馬鹿な話とでも云はうか、あの可愛い私の弟に、死ぬべき時機はいくらもあらうものを、何故何時も好きだ〳〵と言つてゐた薄が穗を出す秋の、而も萩の花が美しく咲き亂れてゐる屋敷内の朝の庭をば、散歩して歩き廻りもせ

奈弟（ナオト（考・古・新）ナセ（略）なは親愛の辭。—兄・—妹・—姉。

爾保弊流屋戸乎の下に次の如き作者の自註がある。言斯人爲性。好二愛花草花樹一。而多植二於寢院之庭一。故謂二之花薫庭一也。

里乎往過の下に作者の次の如き自註がある。佐保山火葬。故謂二之佐保乃宇治乃佐刀乎由吉須疑一。

はしきよし　波之伎余思
なおとの命　奈弟乃許美等
なにしかも　奈爾之加母
時しはあらむを　時之波安良牟乎
はたすすき　波太須酒吉
穂にづる秋の　穂出秋乃
萩の花　芽子花
匂へる宿を　爾保弊流戸屋乎
朝庭に　安佐爾波爾
出で立ちならし　伊泥多知奈良之
夕庭に　暮庭爾
踏み平らげず　敷美多比良氣受
佐保のうちの　佐保能宇知乃
里を行き過ぎ　里乎往過
*足曳の　安之比紀乃
山のこぬれに　山能許奴禮爾
白雲に　白雲爾
立ちたなびくと　多知多奈妣久等
あれに告げつる　安禮爾都氣都流
幸きくと　麻佐吉久登
言ひてしものを　伊比底之物能乎

ず、夕暮の庭を散歩に踏み散らすこともせず、佐保の内の里を通り過ぎて行つて、山の木々の梢の方に、白雲のやうに立ちたなびいてゐると、その都の使が悲しくも私に告げたことだ。

私に丈夫にして居てくれと言つてゐた

白雲に　白雲爾
立ちたなびくと　多知多奈妣久登
聞けば悲しも　伎氣婆可奈思物
かからむと　可加良牟等
兼て知りせば　可禰底思理世婆
越の海の　古之能宇美能
荒磯の波も　安里蘇乃奈美母
見せましものを　見世麻之物能乎

ものを、その弟が、火葬されて白雲のやうに空にたなびいてゐると聞いたので悲しくてたまらない。

こんなに早く死なれる事とかねてで知つてゐたものなら、この越の海の岩濱にどう／＼と打ちつける荒い波の壯觀もこれまでに見せて置き居つたものを

忽沉ニ尫疾一殆臨ニ泉路一仍作ニ謌詞一以申ニ悲緒一

一首幷ニ短歌

この歌も、大伴家持の作である。越中守であつた時の天平十九年二月二十日に急病にかかつて、國守館に病み臥したので、その悲しみを述べたのである。契沖は「この歌の初は五卷山上憶良妻の身まかられける時よまれたる長歌の初を學びて、大かたおなじやうによまれたり」と言つてゐる。

大君の　大王能
まけのまにまに　麻氣能麻爾麻爾

天子様から御任命の通りに、立派な男

伊多家久之（イタケクノ（考・略・新）　イタケクシ（古））
日異益（ヒニケニマセバ（考）　ヒニケニマサル（略・古・新））母　實母は已に亡くなつてゐるから、ここでは實の叔母で、妻の坂上大孃の母に當る。坂上郎女を指すのである。

丈夫之（大夫）
*足曳之（安思比奇能山）
*天ざかる（安麻射加流比）
息だにも（伊伎太爾毛）
年月も（年月毛）
空蟬の（宇都世美能）
打ち靡き（宇知奈妣吉）
痛けくの（伊多家久之）
*たらちねの（多良知祢乃）
母
*大船の（大船乃）
ゆ
し
た
戀ひに
思ひ（多非）
待たす（麻多須）
ら
む
心
情
山坂越えて（山坂古延底）
ひなに下り來（比奈爾久太理伎）
未だ休めず（伊麻太夜須米受）
幾らもあらぬに（伊久良母阿良奴爾）
世の人なれば（代人奈禮婆）
床にこいふし（等許爾許伊布之）
日に日にまさる（日異益）
母の命の（波波能美等許乃）
ゆくらゆくらに（由久良由久良爾）
何時かも來むと（伊都可聞許武等）
心さぶしく（情左夫之久）
苦

の勇氣を奮ひ起して、はる〳〵と山坂を通り越えてこの北の方の田舍へ下つて來て、息さへも十分に休めず、歲月も幾らも經つてゐないのに、矢張り肉體をもつ人間界の事だから、病床に倒れ臥して、病苦が一日〳〵と加はつて行く。都の家では母君が何日も心をさわがせながら落ち着く間もなく、表面は平氣をよそつてゐても、心の中では焦れて、何日になつたら歸つて來るだらうかと言つて、待つてゐられる筈の心を思ひやると、自分も自然と悲しくなつて來るし、又いとしい妻も、夜が明けて來れば門に凭れて立つて着物の袖を折り返し〳〵し、日暮になると

夜流余之母奈之（ヤルヨシモナシ（舊）　ヤルヨシモナク（新））

はしきよし（波之吉與志）
明けくれば（安氣久禮婆）
衣手を（已呂母泥乎）
折りかへしつつ（遠理加弊之都追）
床打ちはらひ（登許宇知波良比）
黒髪しきて（黒髪之吉底）
嘆かすらむぞ（奈氣可須良牟曾）
若き子供は（和可伎兒等毛波）
騒ぎ泣くらむ（佐和吉奈久良牟）
道をた遠み（美知乎多騰保彌）
遣るよしもなし（夜流余之母奈之）
言づてやらず（許登都底夜良受）
心はもえぬ（情波母要奴）
妻の命も（都麻能美許登母）
門によりたち（門爾餘里多知）
夕されば（由布佐禮婆）
*ぬばたまの（奴波多麻能）
何時しかと（伊都之加登）
妹も兄も（伊母毛勢母）
*をちこちに（乎知許知爾）
*玉桙の（多麻桙能）
まづかひも（麻豆可比毛）
おもほしき（於母保之伎）
戀ふるにし（戀布流爾之）
狐流爾思

寢床をはらひ清めて黒い髪を下敷にして寢て、早く歸つて下されればいいがと歎いて居ることであらうよ。尚又幼い自分の子供たちは、男も女も家のあちらでもこちらでも泣き騒いでゐることであらう。都への道がはる〳〵と遠いから度々使を立てる譯にも行かず、話し度いと思ふ事を人に言傳てる事も出來ず、焦れてゐるために心は燃え立つばかりである。あれやこれやを思ふと命は惜しいけれども、何うすると言ふ目あても立たないから、猛々しい男でありながら、こんな風にして歎きつゝ臥してゐねばならんことだらうか。

あらしを
益荒男に同じ。

*たまきはる　命惜しけど
多麻伎波流　伊乃知乎之家騰

せむすべの　たどきを知らに
世牟須敝能　多騰伎乎之良爾

かくしてや　あらしをすらに
加苦思底也　安良志乎須良爾

歎きふせらむ
奈氣枳布勢良武

世の中は　かずなきものか
世間波　加受奈吉物能可

春花の　散りのまがひに
春花乃　知里能麻我比爾

死ぬべき思へば
思奴倍吉於母倍婆

そきへを遠み
曾伎敝乎遠美

妹を相見ず
伊母乎安比見受

歎かむ
奈氣加牟

かくや歎かむ
可久夜奈氣加牟

山河の　そきへを遠み
山河乃　曾伎敝乎遠美

はしきよし　妹を相見ず
波之吉余思　伊母乎安比見受

春に咲く花が、邊をかきくらして散る間に死にさうなのに想ひ到ると、この人間世界といふものは、生きてゐる歳月は短いものだ。

はる〴〵と山川を遠く隔てた所に來てゐるために、都にゐるいとしい妻に逢つて見ることも出來ないで、何時までもこんな風に歎いてゐなければならないだらうか。

三月三日守大伴宿禰家持更贈歌一首并二

短歌

天平二十年の三月三日である。二月二十九日に家持が、掾の大伴池主に對して病中の悲みを訴へた手紙に添へて二首の歌を送つたのに對して、池主からも亦手紙に添へて二首の返歌があつたので、それに對して更に手紙に添へてこの歌を送つたのである。この手紙の中にある「幼年未レ達二山柿之門一」といふ文句は人口に膾炙したものである。池主はこの外にも家持との贈答の歌があつて、二人はかなり親しかつたやうであるがその傳記は詳かでない。

大君の　まけのまにまに
於保吉民　麻氣乃麻爾麻爾

*しなざかる　越を治めに
之奈射加流　故之乎　遠佐米爾

出でて來し　ますら吾すら
伊泥底許之乎　麻須良和禮須良

世の中の　常しなければ
余能中乃　都禰之奈家礼婆

打ち靡き　床にこいふし
宇知奈妣伎　登許爾己伊布之

痛けくの　日に日にませば
伊多家久乃　日異麻世婆

天子樣からの御任命の儘に、遙かに隔つた地方の越の國を治めるために、出かけて來た丈夫の自分でさへも、この人間世界が無常であるから、なよ〳〵と病床に打臥して、病苦が一日〳〵と加はつて行くので、或時は悲しさがこみあがつて來たり、又或時は非常にいら〳〵して來たりして、歎いてゐる心

悲しけく　ここに思ひで
可奈之家口　許己爾思出

いらなけく　そこに思ひで
伊良奈家久　曾許爾念出

安けくなくに　夜須家　奈久爾
夜須家　奈久爾

苦しきものを　思ふそら　苦しき
久流之伎母能乎　於母布蘇良　久流

*足曳の　山來へなりて
安之比紀能　夜麻伎弊奈里底

*玉桙の　道の遠けば
多麻保許乃　美知能等保家婆

遣るよしもなみ　遣るよしもなみ
遣　絲毛奈美

言もかよはず　言もかよはず
許等毛可欲波受

命惜しけど　命惜しけど
伊能知乎之家登

たどきを知らに　*たまきはる
多騰吉乎之良爾　多麻伎波流

爲むすべの　思ひ嘆かひ
勢牟須辨能　思念奈氣加比

隱りゐて　心は無しに
隱居而　許己呂波奈之爾

慰むる　思ほしき　言もかよはず
奈具佐牟流　於母保之吉　許等毛可欲波受

命惜しけど　たどきを知らに
伊能知乎之家登　多騰吉乎之良爾

思ひ嘆かひ　隱りゐて　心は無しに
思念奈氣加比　隱居而　許己呂波奈之爾

慰むる　心もかよはず　命惜しけど
奈具佐牟流　許等毛可欲波受　伊能知乎之家登

たどきを知らに　思ひ嘆かひ
多騰吉乎之良爾　思念奈氣加比

隱りゐて　心は無しに
隱居而　許己呂波奈之爾

慰むる　心もかよはず
奈具佐牟流　許等毛可欲波受

夜須家奈久爾（ヤスカラナクニ（考）　ヤスケクナクニ（略・古・新））

の中が落ちつかなくつて、思ひ焦れる心の中が苦しいのを山を遠く隔つて來て、道のりが遠いから、都への時折の使をたてる手段もないので、云ひ度いと思ふことを傳へることも出來ない。何といつても命は惜しいけれども、何うしていいか手段も分らないで引籠つて思ひ惱んでゐると、それを慰めようとする心も起らないで、春の花の咲いてゐる眞盛りの頃に、仲のいい連中が折り取つて頭に挿すといふこともせず、春の野の草木の生ひ茂つてゐる間を飛び潜つて鳴く鶯の聲さへも聞きもしない。娘たちが春の若菜を摘むといつて、紅で染めた赤い裳の裾が、

春花　春花
春の花

思ふどち　思ふどち
於毛敷度知

春の野の　春の野の
波流乃野能

茂みとびくく　茂みとびくく
之氣美登毘久久

鶯の　鶯の
鶯

聲だに聞かず　聲だに聞かず
音太爾伎加受

春菜摘ますと　春菜摘ますと
春菜都麻須等

赤裳の裾の　赤裳の裾の
赤裳乃須蘇能

匂ひひづちて　匂ひひづちて
爾保比比豆知底

時の盛りを　時の盛りを
時盛乎

過ぐしやりつれ　過ぐしやりつれ
須具之夜里都禮

君が心を　君が心を
君之心乎

この夜すがらに　この夜すがらに
此夜須我良爾

今日もしめらに　今日もしめらに
今日毛之賣良爾

春雨に　春雨に
波流流

通ふらむ　通ふらむ
加欲敷浪牟

徒らに　徒らに
伊多豆良爾

偲ばせる　偲ばせる
思努波勢流

うるはしみ　うるはしみ
宇流波之美

いも寢ずに　いも寢ずに
伊母禰受爾

咲ける盛りに　咲ける盛りに
佐家流左加里爾

手折りかざさず　手折りかざさず
多乎里加射佐受

茂みとびくく　茂みとびくく
之氣美登毘久久

聲だに聞かず　聲だに聞かず
音太爾伎加受

春菜摘ますと　春菜摘ますと
春菜都麻須等

赤裳の裾の　赤裳の裾の
赤裳乃須蘇能

匂ひひづちて　匂ひひづちて
爾保比比豆知底

時の盛りを　時の盛りを
時盛乎

過ぐしやりつれ　過ぐしやりつれ
須具之夜里都禮

君が心を　君が心を
君之心乎

この夜すがらに　この夜すがらに
此夜須我良爾

今日もしめらに　今日もしめらに
今日毛之賣良爾

春雨にしよぼ〳〵濡れそぼつて、行つたり來たりしてゐる面白い眞盛りの頃を徒らに過して終つたので、私の事を御案じ下さつてゐる貴方の御心を有りがたく思ひ、夜は夜通し寢ることも出來ず、晝も亦一日貴方を思ひつゞけてゐることです。

春菜（ワカナ（舊）　ハルナ（古・新））

しめら（しみら・さながら・すがらも同語。）

戀ひつつぞ居る
孤悲　都　曾乎　流

*足曳の
安之　比奇　能

一目だに
比等　目　太　爾

あれ戀ひめやも
安禮　古非　米　夜毛

比奈毛
（ヒナヲ（略）
ヒナモ（舊・古・新））

大君の
悒保　枳美　能

*足曳の
安之　比奇　能

山櫻花
夜麻　佐久良　婆奈

君とし見てば
伎美等　之　見　底婆

かく面白く咲いてゐる山櫻花を、せめて一目だけでも貴方と一緒に眺めることが出來たら、私はこんなに思ひ焦れることはないでせうに。

掾大伴宿禰池主報贈歌二首并短歌

*天ざかる
安麻　射　可流　流

鄙
比奈

*に
毛乎佐牟流

も治むる
毛

何か物思ふ
奈爾可　母能　毛布

*奈良路來通ふ
奈良　治　伎可欲布

*丈夫や
麻須良　袁　夜

*青丹よし
安乎　爾　余　之

御言
彌許等　可之古美

畏み

山野さはらず
夜麻野　佐婆良　良受

天子樣の仰せ言を畏つて、山や野原の嶮しさも事ともしない地方を治める所の立派な男の貴方が、何うしてそんなにくよ〳〵と物思ひをなさることでせう。こちらから奈良へ行く道を始終通つて來る使が絶えるといふことがあ

奈氣可布
（ナゲカフ（舊）
ナゲカス（新））

可受奈枳毛能賀
（カズナキモノカ（考・略）
カズナキモノゾ（古・新））

*たまづさの
多麻豆佐　能

使
都可比

こもり戀ひ
己母理古非

息づきわたり
伊伎豆伎和多利

歎かすわが背
奈氣可須和賀勢

言ひつぎ來らく
伊比都藝久良久　之

歎なきものぞ
可受奈枳毛能賀

事もあらむと
己等母安良牟等

あれに告ぐらく
安禮爾都具良久

櫻花散り
佐久良婆奈知利

間無くしば鳴く
麻奈久之婆奈久

*白妙の
之路多倍　乃

袖折りかへし
蘇泥乎利可弊之

*紅の
久禮奈爲　能

赤裳裾びき
安可毛須蘇妣伎

*春の野に
春　野　爾

*山びには
夜麻備　波

*かほどりの
可保等利　能

*間には
麻　波

*韓をつむと
須美禮乎都牟等

使たえめや
都可比多要米也

りませうか。心の底に戀ひ焦れて歎息をつき通し、心の内で思ひ込んでお歎きになつてゐる貴方よ、昔から語りついで來てゐる事のやうでは、この世界といふものは永久には續かないものでありますぞ。せめて心を慰めることもあらうかと、近所の人が私に告げますには、山のあたりには櫻の花が散つて、かつこうどりが絶えず鳴いてゐます。又春の野原に出て菫を摘まうと着物の袖をまくり擧げて、紅で染めた赤い裳の裾をひきながら、處女たちは貴方戀しさに悶えて、お待ちしてお逢ひしようと思ひ焦れてゐるさうです。可哀さうですから、さあ見に行きませ

許等波多奈由比
（コトハタナユヒ（代・考・略）
（コトハタナシレ（古・新）

処女らは　思ひみだれて
乎登賣良波　於毛比美太・禮底

君待つと　うら戀ひすなり
伎美麻都等　宇良戀須奈里

心ぐし　いざ見に行かな
己許呂具志　伊謝美爾由加奈

ことはたな知れ
許等波多奈由比

山吹は　日に日に咲きぬ
夜麻夫枳波　比爾比爾佐伎奴

うるはしと　あがもふ君は
宇流波之等　安我毛布伎美波

しくしく思ほゆ
思久思久於毛保由

我が背子に　戀ひすべなかり
和賀勢故爾　古非須弊奈賀利

葦垣の　外に嘆かふ
安之可伎能　保可爾奈氣加布

吾し悲しも
安禮之可奈思母

山吹の花は一日〳〵と咲き盛つて來ました。何日も私が愛しく思つてゐる貴方のことが、山吹の咲くに從つて絶え間なく思はれます。

貴方に思ひ焦れて、遣瀬なう思つてゐます。お側近くにもゐられないでかうして離れてゐて、外で歎いてゐる私は悲しいことです。

おやじ
同じといふ意。

安我於久豆麻
（アガオクヅマ（舊）
（アガオクツマヲ（新）

述（ブル）戀緒（ヲ）歌一首幷（ニ）短歌

この歌は、大伴家持が同じく三月二十日の夜に、都にゐる妻を戀うて詠じた歌である。

妹もあれも　心は同（おや）じ
妹毛安禮毛　許己呂波於夜自

たぐへれど　いや懐かしく
多具敝禮騰　伊夜奈都可之久

相見れば　常初花に
相見禮婆　登許波都波奈爾

心ぐし　めぐしもなしに
情具之　眼具之毛奈之爾

はしけやし　あがお妻
波思家夜之　安我於久豆麻

大君の　御言かしこみ
大王能　美許等加之古美

足曳の　山越え野行き
阿之比奇能　夜麻古要奴由伎

天ざかる　ひな治めにと
安麻射可流　比奈乎左米爾等

別れ來し　その日のきはみ
別禮伎之　曾乃日乃伎波美

愛しい妻も、われも相思ふ心は一つである。縦例一つ所に相並んでゐても、無上に懐しく思はれ、又相見て居ると常に初花を見るやうに珍らしく思はれて、心も痛い位に可愛ゆく、非常に愛らしい。それ程までに深く愛しんでゐる自分の妻と、――天子様の仰せを畏つて、山を越え野を通つて、地方を治めると言つて相別れて來た、その日つきりに年が立ち變つて來て、咲いてゐる春の花の色が、褪せて終ふ程になつても相逢ふことが出來ないので、酷く

多太爾安良彌婆
（タダニアラネバ（舊）
タダニアハネバ（新））

近在者
（チカカラバ（考・略・新）
チカクアラバ（古））

道はし
しは助辭。

新玉の
荒璞能

春花の
春花乃

相見ねば
相見禰婆

敷妙の
之伎多倍之

ぬる夜落ちず
宿夜於知受

うつつにし
字都追爾之

戀ひしけく
孤悲之家口

近からば
近在者

うち行きて
字知由吉底

さしかへて
佐之加倍底

玉桙の
多麻保己乃

關さへに
關左閉爾

年ゆきかへり
登之由吉我弊利

移ろふまでに
字都呂布麻泥爾

いたもすべなみ
伊多母須弊奈美

袖かへしつつ
蘇泥可弊之都追

いめには見れど
伊米爾波見禮登

ただに逢はねば
多太爾安良禰婆

千重につもりぬ
知弊爾都母里奴

かへりにだにも
加弊利爾太仁母

妹がたまくら
妹我多麻久良

寢ても來ましを
禰天蒙許萬思乎

道はし遠く
路波之騰保久

へなりてあれこそ
弊奈里底安禮許曾

遣瀨ないために、着物の袖を折り返して寢る夜一晩もかかすことなく夢の中では逢うてゐるけれども、正氣の時として直き〳〵に逢うてゐるのではないから、戀しさが高じて幾重にも積つて終つた。若し家が近かつたら、一寸行つてすぐ歸つて來るといふやうにでも、一寸行つて愛しい妻の手枕を差し交して相寢て來ようものを、道は遠いし、それに關所さへが間を隔ててゐるので、儘よ何とかして歸るべき方便がつくであらうと思ひつゝ、いつしか不如歸が來て鳴く四月にも早くなればいい、さうしたら都へ歸る旅に上つて、卯の花が咲き盛つてゐる彼方此方の山

能里多知
（ノリタチ（舊）
イリタチ（新））

宇良奈氣之都追
（ウラナケシツツ（舊）
ウラナゲキシツツ（新））

安比底早見牟
（アヒテハヤミム（舊・古）
ユキテハヤミム（略・新））

よしゑやし
與思惠夜之

子規
霍公鳥

いつしかも
伊都之加母

卯の花の
宇乃花乃

餘所のみも
余曾能未母

近江路に
淡海路爾

青丹よし
青丹吉

ぬえどりの
奴要鳥能

した戀ひに
思多戀爾

門に立ち
可度爾多知

あを待つと
吾乎麻都等

逢ひて早見む
安比底早見牟

よしはあらむぞ
餘志播安良武曾

來鳴かむつきに
來鳴牟都奇爾

早くなりなむ
波夜久奈里那牟

匂へる山を
爾保弊流山乎

振りさけ見つつ
布里佐氣見都追

い行きのりたち
伊由伎能里多知

奈良のわぎへに
奈良乃吾家爾

うらなげしつつ
宇良奈氣之都追

思ひうらぶれ
於毛比宇良夫禮

ゆふけ問ひつつ
由布氣刀比都追

なすらむ妹を
奈須良牟妹乎

から見やりつゝ過ぎて、近江の琵琶湖の上を舟に乘つて行つて、奈良の自分の家で歎息をつき〳〵、心の底で深く思ひ焦れ、しよんぼりと門に出て立つて、夕暮の辻占を尋ねながら、私の來るのを待つて、獨寢をしてゐる筈の愛しい妻をば、早く行つて逢つて見たいものだ。

*新玉の年かへるまで
安良 多麻 乃 登之可 弊 流 麻 泥

相見ねば心もしぬに
安比 見 禰 婆 許己呂母 之 努 爾

思ほゆるかも
於母保由 流 香 聞

年が立ち變つて來るまで、長いこと相逢はないので、自分の心は萎えてへと〳〵になつて思ひ焦がれてゐることだ。

*ぬばたまの夢にはもとな
奴 婆 多 麻 乃 伊米爾 波 母 等 奈

相見れど
安比 見 禮 騰

ただにあはねば
多太爾 安良 禰 婆

戀ひやまずけり
孤 悲 夜 麻 受 家 里

夢の中では度〻相逢うてゐても、直き〳〵に逢ふといふことがないから、たよりなくて思ひ焦れる心が止まないことだ。

二上山賦一首

この歌は、大伴家持が同じく三月三十日に興に乘じて作つた長歌である。賦とは長歌を漢詩風に言つたのである。二上山は越中國射水郡に在つて、今の伏木町の西南一里、高岡市の北郊に聳えてゐる三百米位の、姿の美しい山で、集中での名山である。

もとな
心もとなしと通ずる。たよりない心細いの意。

多太爾安良彌婆
（タダニアラネバ（舊）
（タダニアハネバ（新）

射水川
一名庄川、古くは雄神川ともいふ。

そこば
若干許多の意。

裾みの山
裾廻りの山、麓の山。

射水川
伊 美都 河泊

いい行きめぐれる
伊 由 伎 米 具 禮 流

*玉くしげ二上山は
多麻 久 之 氣 布多 我美 山 者

春花の咲けるさかりに
波流 波奈 乃 佐 氣 流 左 加 利 爾

秋の葉の匂へる時に
安吉 乃 葉 乃 爾保 弊 流 等 伎 爾

出立ちてふりさけ見れば
出 立 底 布 里 佐 氣 見 禮 婆

かむがらや そこばたふとき
可 牟 加 良 夜 曾 許 婆 多 敷 刀 伎

山がらや見がほしからむ
夜麻 可 良 夜 見 我 保 之 加 良 武

すめがみの裾みの山の
須 賣 加 未 能 須蘇 未 乃 夜麻 能

澁谷の崎のありそに
之夫 多爾 能 佐吉乃 安 里 蘇 爾

朝凪に寄する白波
阿佐 奈藝 爾 餘 須 流 之良奈美

夕凪に滿ち來るしほの
由敷 奈藝 爾 美知 久 流 之 保 能

いやましに絕ゆることなく
伊 夜 麻 之 爾 多由 流 許 等 奈 久

射水川が流れ廻つてゐる二上山は、春の花が咲き盛る頃に、又秋の木々の葉が色づく頃に、外に出て仰いで見ると、神がらのよいせいであるか大層貴く、山の神様の神がらのよいせいであるか、いつまで見てゐても飽くことを知らない姿の麗はしい山である。この神の山である、二上山の麓にある澁谷の岬の礎の邊には、朝凪に寄せて來る白波、夕凪に滿つて來る夕汐のやうにいつまでも絕えるといふことなしに、大昔から只今の世まで、かうして眺める人々は、誰も〳〵心にかけて忘れることの出來ない山である。

をつつ
うつつ、現在のこと。

之努婆米
（シヌバメ（舊）
シヌバヘ（新）

古へゆ
伊爾之弊 由

今のをつつに
伊麻乃 乎 都 豆 爾

斯くしこそ
可 久 之 許 曾

見る人毎に
見 流 比 登 其 等 爾

かけて偲ばめ
加 氣 底 之 努 波 米

澁谷の崎のありそに
之夫 多爾 能 佐 伎 能 安 里 蘇 爾

寄する波いやしくしくに
與 須 流 奈 美 伊 夜 思 久 思 久 爾

古へ思ほゆ
伊爾弊之於毛 保 由

澁谷の崎の荒い岩濱に打ち寄せて來る波ではないが、彌々間斷なく、昔この山にあつたことなどが思はれることだ。

*たまくしげ
多 麻 久 之 氣

二上山に
敷 多 我 美 也 麻 爾

鳴く鳥の聲の戀ひしき
鳴 鳥 能 許 惠 乃 孤 悲 思 吉

時は來にけり
登 岐 波 伎 爾 家 里

二上山に鳴いて居る鳥の聲が戀しく懷かしく思はれる時分がやつて來たことだ。

宇納川（うなびがは）
これも射水郡に在る。
（　）の中
か行きの序。

遊覽布勢水海賦一首幷短歌

これは、大伴家持が同じく四月二十四日に布勢湖に遊んだ時の詠である。自註に「此海者有射水郡舊江村也」とあつて、一名十二町瀉とも云ひ、今の越中氷水郡布勢の里に在つて、長さが四十町、富山灣に通じてゐる。

もののふの
物 能 乃 敷 能

八十伴の男の
夜 蘇 等 母 乃 乎 能

思ふどち
於 毛 布 度 知

心やらむと
許 己 呂 也 良 武 等

馬並めて
宇 麻 奈 米 底

彼處此處ぶりの
宇 知 久 知 夫 利 乃

白波の
之 良 奈 美 能

荒磯に寄する
安 里 蘇 爾 與 須 流

澁谷の
之 夫 多 爾 能

崎たもとほり
佐 吉 多 母 登 保 理

松田江の
麻 都 太 里 能

長濱過ぎて
奈 我 波 麻 須 義 底

（宇納川
宇 奈 比 河 波

清き瀨毎に
伎 欲 吉 勢 其 等 爾

鵜川たち）
宇 加 波 多 知

か行きかく行き
可 由 吉 加 久 遊 岐

見つれども
見 都 禮 騰 母

其處も飽かにと
曾 許 母 安 加 爾 等

武士の澤山の役人達の、氣の合つた連中が、氣晴らしをしようといつて、馬を並べて、彼方此方の方で立つてゐる白波が、荒い岩濱に寄せて居る澁谷の崎をさまよひながら、松田江と云ふ入江の長い濱を通り過ぎて、宇納川のさつぱりとした、川の瀨毎は鵜を使ふ川を設けて、彼方へ行き此方へ行きするやうに、彼方へ行き此方へ行きして見てはゐるけれども、それだけでは滿足は出來ないと云つて、布勢の湖に舟を

志麻末（シママ（略）・シママミ（古・新））

（　）の中行きの序。

布勢の海に　布勢能宇彌爾
沖邊漕ぎ　於伎弊許藝
渚には　奈藝左爾波
島みには　之麻未爾波
ここばくも　許己婆久毛
*たまくしげ　麻久之氣
*冨ふつたの　波布都多能
あり通ひ　安里我欲比
思ふどち　於母布度知
今も見るごと　異麻母見流其等

布勢の海の　布勢能宇美能
沖つ白波　意枳都之良奈美

船浮けすゑて　布彌宇氣須惠底
邊に漕ぎ見れば　邊爾己伎見禮婆
あぢむら騒ぎ　安遲牟良佐和伎
こぬれ花咲き　許奴禮波奈左吉
見のさやけきか　見乃佐夜氣吉加
二上山に　布多我彌夜麻爾
行きは別れず　由伎波和可禮受
いや年のはに　伊夜登之能波爾
かくし遊ばむ　可久思安蘇婆牟

ぢつと浮べて、沖の方を漕いで見たり岸の方を漕いで見たりして眺めてゐると、浪打ち際には澤山のあぢ群が喧ましく鳴き騒いで居るし、島の入込には多くの木木の梢に花が咲いて居て非常に眺がさつぱりして居ることだ。それ故この二上山に匐うて生えて居る蔓のやうに、何時まで〳〵もこの地を別れて去ることなく、始終茲へやつて來てこれから先毎年〳〵、氣の合うた同志がかうして遊ばうよ、只今かうして眺めやつて居るやうに。

あり通ひ　安利我欲比
見つつ偲ばむ　見都追思努播牟

いや年のはに　伊夜登偲能波爾

敬和遊覽布勢水海賦二首并一絶

これは、前の大伴家持の詠に對して、大伴池主が唱和した歌である。同じく二十六日の作。

藤波は　布治奈美波
卯の花は　宇能花波
*足引の　安之比奇能
子規　保登等藝須
打ち靡き　宇知奈婢久（ウチナビク（舊）・ウチナビキ（新））
其處をしも　曾己乎之母

咲きて散りにき　佐岐底知里爾伎
今ぞ盛りと　伊麻曾佐可理等
山にも野にも　夜麻爾毛野爾毛
鳴きしとよめば　奈伎之等與米婆
心もしぬに　許己呂毛之努爾
うら戀ひしみと　宇良胡非之美等

がいつも〳〵寄せて來るやうに、自分達もいつ〳〵までもここへ來てこの景色を眺めてこれから先幾年も見て慕うて居よう。

藤の花はも早散つて終つた。併し卯の花は今が眞盛りだと云つて、山でも野でも子規が邊をとゞろかして鳴くので、自分の心もその爲にへと〳〵になつて靡くことだ。そんな時候の、野山の景色が戀しいことだと云つて、氣の合つた人々が馬を鞭打つて、澤山一緒に手をつながない許りにして出かけて

ともしきに
羨ましきにといふこと。

麻可治加伊奴吉
（マカヂカイヌキ（舊・略）
マカヂカキヌキ（新））

思ふどち 於毛布度知
たづさはり 多豆佐波理
射水川 伊美豆河泊
朝凪に 安佐奈藝爾
潮満てば 思保美底婆
ともしきに 等母之伎爾
澁谷の 之夫多爾能
沖つ波 於枳追奈美
片寄りに 可多與理爾
妹がため 伊毛我多米
うらぐはし 宇良具波之
海人船に 阿麻夫彌爾
馬うち群れて 宇麻宇知牟禮底
出で立ち見れば 伊泥多知美禮婆
港の洲鳥 美奈刀能須登利
潟にあさりし 可多爾安佐里之
妻呼び交はす 都麻欲比可波須
見つつ過ぎゆき 美都追須疑由伎
荒磯の崎に 安里蘇乃佐伎爾
寄せ來る珠藻 余勢久流多麻母
蘰に作り 可都良爾都久理
手に卷き持ちて 底爾麻吉母知底
布勢の湖に 布勢之美豆宇彌爾
ま梶ぬ檝き 麻可治加伊奴吉

見ると、射水川の川口の水門の洲に居る鳥が、朝の波の凪いだ時に潟で餌を探してをり、潮が滿つて來ると互に配偶（つれあひ）を呼び合つて居る。妻を遠い都に置いて來た自分には、その鳥どもの有樣も羨ましいので、外目に通り過ぎて澁谷の荒い岩濱の崎にひた寄せに沖の波が打ち寄せて來る美しい藻をば蘰に拵へて、愛しい人にやらうと思つて手に纏き附けて持ちながら、立派な布勢の湖で海人の乘る舟に櫓を澤山にさし、白妙の着物の袖をまくり返して漕ぎながら大勢一緒になつて自分が漕いで行くと、麻生の崎では卯の花が邊の景色も分らぬ程に散つて居り、波打際には

あともひて
相率ゐての意。

麻爾麻等
（マニマト（舊）
マニマニ（元暦本・新））
あきらむ
見て心をはらすこと。

白妙の 之路多倍能
あともひて 阿登毛比底
麻生（をふ）の崎 乎布能佐伎
渚は 奈伎佐爾波
*さざれなみ 佐射禮奈美
漕ぎめぐり 己藝米具利
秋さらば 安伎佐良波
春さらば 波流佐良波
かもかくも 可毛可久母
斯くしこそ 可久之許曾
絶ゆる日有らめや 多由流比安良米也
袖ふりかへし 蘇泥布理可邊之
我が漕ぎ行けば 和賀己藝由氣婆
花散りまがひ 波奈知利麻我比
葦鴨騒ぎ 阿之賀毛佐和伎
立ちても居ても 多知底毛爲底母
見れども飽かず 美禮登母安可受
黄葉の時に 毛美知能等伎爾
花の盛りに 波奈能佐可利爾
君がまにまに 伎美我末爾麻等
見もあきらめめ 美母安吉良米米

鴨が騒ぎ立つて見たり、坐つて見たり、その邊の景色をば遭ぎ廻つて見ても飽くことを知らない。秋の季節が來ると紅葉する頃に、春の季節が來ると花の咲いて居る眞盛の頃に、何時でも貴方のお伴をして、貴方の御心通り何處へでもついて行つて、只今見たやうに好く〳〵見て心をはらすやうにならう。決して此處へ來ることが、絶えるといふやうなことはありますまい。

白波之良 の 能 寄せくる珠藻 與世久流多麻毛
世の間も 余能安比太母 繼ぎて見に來む 都藝底民仁許武
清き濱びを 吉欲伎波麻備乎

立山賦一首并二短歌

大伴家持が、同じく四月二十七日に立山を詠じたものである。立山は、自註に「此山者在新川郡一也」とあつて、歌の中では「たちやま」といつてゐるが、今の「たてやま」である。

*天ざかる 安麻射可流 越の 古思能 中 奈可 國内 久奴知 ことごと しじに有れども 之自爾安禮登母 山はしも 夜麻波之母 川はしも 加波波之母 さはに行けども 佐波爾由氣等母 うしはきいます 宇之波伎伊麻須 須賣加未能 その 曾能 立山に 多知夜麻爾 ひなに名かがす 比奈爾名可加須 かむ 賀微 ろの 呂乃 はに 波爾 いや 伊夜 年の 登之能 ごと 古等 に 爾 朝よひごと 安佐欲比其等 に 爾 思ひ過ぎめや 於毛比須疑米夜 萬づ世の 余呂豆餘能 未だ見ぬ 伊末太見奴 音のみも 於登能未母 聞きて 伎底

地方の田舎に評判を輝かして居るところの、この越中の國内一帯には、山はみつしりとあるけれども、また川は澤山流れて居るけれども、その中で尊いこの神様が領していらつしやる新川郡のあの立山に、幾ら夏の眞盛にも雪が降積つておいて、それから立山が腰に

常等許 夏 奈都 に 爾
（おばせる 於婆勢流）
清き瀬に 伎欲吉瀨爾
立つ霧の（都奇利能）
あり通ひ 安里通比
餘所のみも 余增能未母
萬づ世の 余呂豆餘能
未だ見ぬ 伊末太見奴
音のみも 於登能未母
ともしぶるがね 登母之夫流我禰

立山 多知夜麻 に 爾

降りおける雪を 布里於家流由伎乎

雪降りおきて 由伎布理之伎底
片貝川 可多加比河波 の 能
朝よひごと 安佐欲比其等 に 爾
思ひ過ぎめや 於毛比須疑米夜
いや年のはに 伊夜登之能 振りさけ見つつ 布利佐氣見都都
語らひぐさと 可多良比具佐等
人にも告げむ 比等爾母都氣牟
名のみも聞きて 多能未母伎底

帶びてゐるやうな片貝川のさつぱりした淺瀨に、朝晩毎に立つて居る霧のやうに、思ひすごすと云ふことが出來ようか。かうして始終通うて、毎年〳〵外からでも遠く見遣つて居て、幾萬年の後までの語り種として、まだ見ない人たちにも話して聞かせよう。評判許り名前許り聞いて美ましがる程に。

立山に降り積つて居る雪をば、夏の眞

由伎布理之伎底（ユキフリシキテ（舊）ユキフリオキテ（新））の中序である。

ともしぶる 美ましがる意。

かゞす 輝かすこと。

すめがみ 雄山の神をいふ。

加武賀良奈良之
（カムガラナラシ（考・略・新）
（カムナガラナラシ（古）

常夏に見れども飽かず
登己 奈都 爾 見禮等母安可受

神柄ならし
加武賀良奈良之

盛りに幾ら見ても見飽かないことだ、あんな不思議なことは一體山柄がいいからであらう。

片貝の川の瀬清く
可多 加比 能 可波能瀬伎欲久

行く水の絶ゆることなく
由 久 美豆 能 多由流許登奈久

あり通ひ見む
安里 我欲比見牟

片貝川の流れがさつぱりとして居て、流れて逝く水のやうに、何時までも何時までも絶えることなく、立山の景色をかうして通つて來て眺めよう。

敬和（シテスル）ニ立山賦（ノ）ニ一首幷ニ二絶

これも、前の歌に對する大伴池主の唱和である。

朝日さし
阿佐 比 左 之

そがひに見ゆる
曾 我 比 爾 見 由 流

かむながら
可 無 奈 我 良

み名に負ばせる
彌 奈 爾 於 婆 勢 流

白雲の
之良 久母 能

千重をおし分け
知 邊 乎 於 之 和 氣

この越中の國府から後に、朝日がさして見える所の、神樣の思召しの儘に立山と云ふ名の通りに白雲が幾重にも重つてゐるのを押分けて、空高くそそり

久毛爲多奈毗吉
（クモヰタナビキ（舊）
（クモヰタナビク（新）
雲ゐのゐは單なる接尾語で、雲といふほどの意。

天そそり
安麻 曾 曾 理

高き立山
多可 吉 多知 夜麻

冬夏と分くことも無く
布由 奈都 登 和久許等母奈久

白妙に雪は降りおきて
之路 多倍 爾 遊吉波布里於吉底

古へゆあり來にければ
伊 爾 之 邊 遊 阿理吉仁家禮婆

こごしかも岩のかむさび
許 其 志 可 毛 伊波能可牟佐備

*たまきはる幾代經にけむ
多 末 伎 波 流 伊久代經爾家牟

立ちて居て見れどもあやし
多 知 底 爲 底 見禮登毛安夜之

峯高み谷を深みと
彌禰 太可 美 多爾乎布可美等

落ちたぎつ清き河内に
於 知 多 藝 都 吉欲伎可敷知爾

朝さらず霧立ち渡り
安佐 左 良 受 綺利多知和多利

夕されば雲ゐた靡き
由布 佐 禮 婆 久毛爲多奈毗吉

雲ゐなす心もしぬに
久毛爲奈須 己許呂毛之努爾

立つて居る、高い立山よ。冬だ夏だと區別することもなしに、眞白に雪が降つて居て、昔からその儘で續いて來て居るので岩が峨々として神々しく古びて、凡そ幾代經たかも、らない位である。立つて居たり坐つて見たりして見ても、どうも不思議だ。峯は高い上に、谷が深いといふ譯で、水が激して落ちるさつぱりとした川の流域に、毎朝缺けることなく一面に霧が立ち、日暮になると雲がかかつてゐる。その雲のやうになよ〳〵と心も萎えて立つて居る霧ではないが、忘れて終ふことなく流れて居る川水の音のやうに、爽かな景色だ。その景色を何時〳〵までも

於等母佐夜氣久
（オトモサヤケク（舊）
オトモサヤケシ（新）
上の一句と併せて無くもがなの句である。（新）

立つ霧の　多都奇理能
行く水の　由久美豆乃
萬づ代に　與呂豆余爾
川し絶えずば　加波之多要受波
立山に　多知夜麻爾
常夏に　等許奈都爾
神ながらとぞ　可無奈我良等曾
落ちたぎつ　於知多藝都
絶えぬごと　多延奴期等
己まず通はむ　夜麻受可欲波牟

思ひすぐさず　於毛比須具佐受
音もさやけし　於等母佐夜氣久
言ひ繼ぎ行かむ　伊比都藝由可牟
降りおける雪の　布里於家流由伎能
消ずて渡るは　氣受底和多流波
片貝川の　可多加比我波能
今見る人も　伊麻見流比等母

語り傳へて行かう、この川の絶えず流れてゐる限りは。

立山に降り積つて居る雪が、夏の眞盛りにも消えないで續いて居るのは、神の御召し通りであると思はれる。

落ちて激するこの片貝川の流れが絶えないやうに、只今その景色を眺めて居る人々皆も、何時までも〳〵生きて居て止むことなく通つて立山の景色を眺めよう。

背の君
池主をさす。
安比底許登騰比
（アヒテコトドヒ（舊）
アヒミコトドヒ（新）
和我多知彌禮婆
（ワガタチミレバ（舊）
ワガウチミレバ（新）
あゆの風
東風をいふ越の國の方言（自註）。今でも北國ではさういつて

入京漸近悲情難撥述懷歌一首幷一絶

大伴家持が、京に歸る日が近づいた同じく四月三十日に、その心を述べて大伴池主に送つたのがこの歌である。

*かき數ふ　可伎加蘇布
神さびて　可牟佐備底
本も枝も　毛等母延母
はしきよし　波之伎與之
朝さらず　安佐左良受
夕されば　由布佐禮婆
射水川　伊美豆河波
出で立ちて　伊泥多知底
あゆの風　安由能加是

二上山に　敷多我美夜麻爾
立てる樛の木　多底流都我能奇
同じ常磐に　於夜自得伎波爾
我が背の君を　和我世乃伎美乎
逢ひて言問ひ　安比底許登騰比
手携はりて　手多豆佐波利底
清き河内に　吉欲伎可布知爾
我が立ち見れば　和我多知彌禮婆
いたくし吹けば　伊多久之布氣婆

二上山に神々しく物だりて生えて居る樛の木の、幹も分れの枝も、同じく何時〳〵までも葉の落ちないものと思うて、何時迄も貴方をば朝毎に相見てお話をし、日暮が來ると手を取り合つて射水川の爽かな流域に出かけて、吾々が立つて見ると、東風が、酷く吹く爲めに、川口の邊では白波が高く立つので、互に配偶を呼ぶと言つて、洲に棲んで居る鳥が騷ぐことだ。それから又葦を苅らうとして、入江を漕いで行く

須騰理波佐和久
〔スドリハワグ(舊)〕
〔スドリゾサワク(新)〕

ともし
珍らしいといふこと。

水戸には　白波高み
美奈刀爾波　之良奈美多可彌

妻呼ぶと　洲鳥は騷ぐ
都麻欲夫等　須騰理波佐和久

葦刈ると　海人の小舟は
安之可流等　安麻乃乎夫禰波

入江漕ぐ　梶のおと高かし
伊里延許具　加遲能於等多可之

そこをしも　あやにともしみ
曾己乎之毛　安夜爾登母志美

偲びつつ　遊ぶ盛りを
之怒比都追　安蘇夫佐香理乎

すめろぎの　をす國なれば
須賣呂伎能　乎須久爾奈禮婆

みこともち　立ち別れなば
美許登母知　多知和可禮奈婆

後れたる　君はあれども
於久禮多流　吉民波安禮騰母

*玉桙の　道行くわれは
多麻保許乃　美知由久和禮播

白雲の　た靡く山を
之良久母能　多奈妣久夜麻乎

岩根踏み　越えへなりなば
伊波禰布美　古要弊奈利奈婆

海人の舟は櫓の音を高く立てゝ居る。それをば無上に珍らしがつて、景色を慕うて遊んで居る眞盛りだのに、天子様のお治めになる國であるから、天子様の仰せを承り、此處を引上げて貴方に別れて行つたら、貴方はさ程でもないでせうが、道中を行く私は白雲の懸つて居る山を岩を踏み越えて行つてだん〳〵間が離れて行つたら戀しくて日數が長く感ぜられることであらう、それを思ふと心が痛みます。せめて子規の鳴く聲と一緒に挿す藥玉でゞも貴方があれば、手に纏きつけて持つて行つて朝晩に眺めながら行きませうが、このまゝ後に貴方を殘して行つたらさぞ

背子
池主をさす。

戀ひしけく　日の長けむぞ
孤悲之家久　氣乃奈我氣牟曾

そこ思へば　心し痛し
則許母倍婆　許己呂志伊多思

子規　聲にあへぬく
保等登藝須　許惠爾安倍奴久

珠にもが　手にまきもちて
多麻爾母我　手爾麻吉毛知底

朝よひに　見つつ行かむを
安佐欲比爾　見都追由可牟乎

おきて行かば惜し
於伎底伊加婆乎思

我背子は　珠にもがもな
和我勢故婆　多麻爾母我毛奈

子規　聲にあへぬき
保等登伎須　詐惠爾安倍奴伎

手に卷きて行かむ
手爾麻伎底由加牟

心殘りのすることでありませう。

貴方が珠ででもあればよい、さうすればこの四五月頃に鳴く子規の聲と一緒に藥玉に挿し合はせて、手に纏きつけて旅に參りませう。

忽見ニ入京述レ懐之作ヲ一生別悲兮斷腸萬回

怨緒難レ禁聊奉ニ所心ヲ一一首幷ニ一絶

前の歌に對して、五月二日に大伴池主の答へた歌である。

奈良の都を離れて來て地方の田舍にはをるものの、常に貴方と顏を合せ〳〵して居るので思を晴らすこともあつたのに、貴方は天子樣の仰を畏つて天子樣のお治めになされる國の政を取り行ふ爲に、脚胖を造り整へて朝旅立ちしてお出かけなされたならば、ここらに取り殘される私が悲しむことでせうか。それとも旅に上られる貴方がお焦れになることでせうか。こんな風に思

*青丹よし　安遠爾與之
奈良を來離れ　奈良爾伎波奈禮
ひなには有れど　比奈爾波安禮登
見つつし居れば　見都追志乎禮婆
事も有りしを　許等母安利之乎
み言　畏み　美許等可之古美
事とりもちて　許等登里毛知底
足結手造り　安由比多豆久利
朝立ち去なば　安佐太知伊奈婆

*天ざかる　阿麻射可流
*若草の　和可久佐能
*大君の　於保伎美乃
*國の　須久爾能
*鳥の　等理

背子　家持をさす。
思ひやる　物思ひをはらすこと。
足結　昔、足に纏ひつけたもので、鈴などをつけたこともある。今の脚胖の類。

見和多勢婆　（ミワタセバ（舊）ミワタシノ（新））
礪波山　越中と越前の境にあつて、京へ上る官道に當つてゐる。所謂倶利伽羅峠である。
たゞか　前出。
のたま。　のむの延言。のむは祈る意。

後れたる　於久禮多流
旅に行く　多妣爾由久
君かも　伎美可母
思ふそら　於毛布蘇良
安く　夜須久
勢久かく　奈氣可久
久を　久乎
等止も　等母
兼ねて　可禰底
見渡せば　見和多勢婆
*規子　保等登藝須
*朝霧の　安佐疑理能
言に出で　許登爾伊泥底
礪波山　刀奈美夜麻
*幣まつり　奴佐麻都里
はしけやし　波之家夜之
まさきくも　麻佐吉久毛

あれや悲しき　阿禮也悲之伎
君かも戀ひむ　伎美可母孤悲無
安く有らねば　夜須久有良禰婆
止めも兼ねて　等賣米毛可禰底
卯の花山の　宇能花夜麻乃
音のみし泣かゆ　祢能未之奈可由
*亂る心　美太流許己呂
言はばゆゆしみ　伊波婆由遊思美
峠の神に　多牟氣能可味爾
あが戀ひのまく　安我許比能麻久
君がただかを　吉美賀多太可乎
ありた廻ほり　安里多母等保理

つて居る心持が落ち着きませんので、嘆くことを抑へかねて外をぢつと眺めてゐると、丁度卯の花の盛りで、その咲いた山に鳴く子規のやうに、只泣かずには居られません。煩悶する心持を申し上げると、緣起の惡いことだと思つて申さずに、礪波山の峠にいらつしやる神にお供へ物を捧げて私が祈りますには、どうぞ愛しい貴方の御樣子をば、無事にさうして年月がまはり移つて、この月が過ぎて來月が來たら、時も移さずに直ちに撫子の花の咲き盛る時分に逢はせて下さいとお願ひすることであります。

月立たば　時もかはさず
都奇多多婆　等伎毛可波佐受

撫子が　花の盛りに
奈泥之故我　波奈乃佐可里爾

逢ひ見しめとぞ
阿比見之米等曾

*玉桙の　道の神達
多麻保許能　美知能可美多知

まひはせむ　あが思ふ君を
麻比波勢牟　安賀於毛布伎美乎

懐かしみせよ
奈都可之美勢余

うら戀ひし　我が背の君は
宇良故非之　和賀勢能伎美波

撫子が　花にもがもな
奈泥之故我　波奈爾毛我母奈

朝なさな見む
安佐奈佐奈見牟

道中の神様たちよ、お禮は屹度申しませうから、どうかこの私の思つて居るお方を大事にしてやつて下さい。

戀しいことだ、せめて貴方が撫子の花ででもあればいい、さうすれば別れて後も朝々毎に見てゐようものを。

美可度曾
〔ミカドゾ（舊）
〔ミカドト（古・新）

越登名爾於弊流
〔コシトナニオヘル（舊）
〔コントフナニオヘル（新）

奈都能左加利等
〔ナツノサカリト（舊）
〔ナツノサカリニ（新）

思ヒ放逸鷹ニ夢見テ感悦作歌シテレル一首幷ニ短歌

これは、大伴家持の九月二十六日の作で、次の意味の自註がついてゐる。「射水郡の古江村で蒼鷹を獲た。形が美しい上に雉をとることに秀れてゐた。鷹飼の山田君麿がこれを手ならしに出て、過つて逸し、空高く雲に隱れて終つて、方法を盡したが駄目であつた。それでも鳥綱を張り、神に祈つて斷念はしなかつた。時に夢に現はれた娘子に、その中に歸つて來るから心配するなと告げられて夢から覺め、悅の餘りこの作をなす」と。

大君の　遠のみかどと
大王乃　等保能美可度曾

み雪降る　越と名に負へる
美雪落　越登名爾於弊流

*天ざかる　ひなにし有れば
安麻射可流　比奈爾之安禮婆

山高み　川遠しろし
山高美　河登保之呂思

野を廣み　草こそ茂き
野乎比呂美　久佐許曾之既吉

鮎はしる　夏の盛りに
安由波之流　奈都能左加利等

*島つ鳥　鵜飼がともは
之麻都等里　鵜養我登母波

天子様の遠い御料地であるとして、雪の降る越の國と云ふ評判通りのこの邊鄙な地方であるから、山が高くて、川が遠目に見てもはつきり見える程大きなのが流れて居る。其處は野が廣々としてゐるので草が澤山茂つて居る。鮎が泳ぎまはつてゐる夏の眞盛りに、鵜飼の漁夫連中は、流れる川の爽かな淺瀨淺瀨に篝を立てながら水につかつて川

逝く川の　由久加波乃
清き瀬毎に　伎欲吉　瀬其登爾
篶さし　可賀里左之
なづさひ上る　奈豆佐比能保流
秋に至れば　安伎爾伊多禮婆
露霜の　露霜乃
野べさはに　野毛佐波爾
鳥すだけりと　等里須太家里等
丈夫の　麻須良乎
伴誘ひて　登母伊射奈比底
數多有れども　安麻多安禮等母
あが大黒に　安我大黒爾
鈴とりつけて　鈴登里都氣底
五百津鳥立て　伊保都登里多底
千鳥踏み立て　知登理布美多底
ゆるすことなく　由流須許等奈久
をちもかやすき　乎知母可夜須伎
手もたばなれも　手母多婆奈礼母
白塗の　白之良奴里能
鈴を　鈴乎
朝獵に　朝獵爾
夕獲に　暮獵爾
追ふ毎に　追敷其等爾
やかたを　矢形尾乃
鷹はしも　多加波之母
あやに　安夜爾
貴し　貴之
大黒者　大黒者
蒼鷹之名也

野毛佐波爾
（ノモサハニ（舊）　ノベサハニ（新））

大黒
自註に「大黒者蒼鷹之名也」とある。

平知母可夜須伎
（ヲチモカヤスキ（舊）　ヲチモゾヤスキ（新））

これをおきて　許禮乎於伎底
又はあり難し　麻多波安里我多之
さ並べる　左奈良弊流
鷹はなけむと　多可波奈氣牟等
心には　情爾波
思ひほこりて　於毛比保許里底
笑まひつつ　惠麻比都追
渡る間に　多流安比太爾
たぶれたる　夫禮多流
醜つ翁の　之許都都於吉奈乃
言だにも　許等太爾母
われには告げず　吾爾波都氣受
との曇り　等乃具母利
雨の降る日を　安米能布流日乎
鳥狩すと　鳥狩須等
名のみを告りて　名乃未乎能里底
三島野を　三島野乎
そがひに見つつ　曾我比爾見都追
二上の　二上乃
山飛び越えて　山登妣古要底
雲がくり　雲久母我久理
翔けり去にきと　可氣理伊爾伎等
歸り來て　歸理可弊理伎底
しはぶれ告ぐれ　之波夫禮告久礼
之波夫禮都具禮

たぶれ
たはけたるといふに同じ。

翁
山田麿をいふ。

鳥狩（とがり）
鷹を使つて鳥を狩ること。

とのぐもり＝たなぐもり
空が一面に曇ること。

三島野
射水郡ノ三島で、今の二口村附近。

之波夫禮都具禮
（シハブレツグレ（舊）　シハブキツグレ（新））

言はないで、空が一面に曇つて雨の降つて居る日に鷹狩に行きますとのみ門番に斷つて狩に出かけて行つて、後になあの大黒は三島野をば後に見ながら二上山をば飛び越えて雲の影に飛んで行つて終つてひましたと、歸つて來て咳きこみながら咽せ返つて申し出たので、呼び歸す手段がもうここにないから、何と悲しい心持を表して好いか分らない程心はいら〳〵焦れて思ひ、嘆息をやたらにして、若しひよつとしたら出くはすこともあらうかと二上山の彼方側此方側に鳥の網をかけて番人ををらせておいて、又一方神様の社に澄みきつた鏡をば、倭文の幣に添へて奉

をくよしの　呼久餘思乃
言ふすべの　伊敷須弊能
心には　心爾波
火火
そこになければ　曾許爾奈家禮婆
たどきを知らに　多騰伎乎之良爾
火さへ燃えつつ　火佐倍毛要都追
息づきあまり　伊伎豆伎安麻利
逢ふ事有りやと　安布許等安里也等
をてもこのもに　乎底母許乃毛爾
守りべを据ゑて　母利弊乎須恵底
神の社に　神社爾
倭文にとりそへ　之都爾等里蘇倍
あが待つ時に　安我麻都等吉爾
夢に告ぐらく　伊米爾都具良久
そのほつ鷹は　曾能保追多加波
納してお祈り申して、歸つて來るのを
自分が待つて居た最中に、神の處女が
夢の中に現はれて告げたことには、お
前が焦れて居るその秀れた鷹は、逸れ
てから後松田江の海岸をば行く中に、
日が暮れてつなしを取つて居る氷見の
入江を通つて、多胡の島の邊を飛び
廻つて、葦鴨の寄りたかつて居る古江
に、一昨日も昨日も居たことだ、まあ
近くば二日ばかり、長ければ七日の間
は過ぎることはなく、追つつけ歸つて
來るであらう、そんなに一所懸命に戀
ひ焦れるなと、つい一寸うと〳〵とま
どろんでゐる間の夢に、神の處女が告
げたことだ。

となみ
鳥網をいふ。

乞ひのみて
乞ひ祈りての意。

處女ら
らは接尾語で意味はない。

ほつ鷹
すぐれた鷹といふ意。

松田江の　松田江の
麻都太要乃
濱ゆきくらし　濱ゆきくらし
波麻由伎具良之
氷見の江過ぎて　氷見の江過ぎて
比美乃江過底
飛びたもとほり　飛びたもとほり
等比多毛登保里
すだく古江に　すだく古江に
須太久舊江爾
昨日もありつ　昨日もありつ
伎能敷母安里追
今二日だみ　今二日だみ
伊麻布都可太未
七日のうちは　七日のうちは
奈奴可乃宇知波
來なむ我が背子　來なむ我が背子
伎奈牟和我勢故
な戀ひそよとぞ　な戀ひそよとぞ
奈孤悲曾余等曾
鷹を手にすゑ　鷹を手にすゑ
多加乎手爾須恵
屋形尾の鷹をば手の上にすわらせて、

二日だみ
二日ばかりといふ北國の方言(考)

背子
作者をさす。

伊麻爾都氣都流
(イマニツゲツル(舊)
(イメニツゲツル(考・略・古・新)

やかたをの　やかたをの
矢形尾能

三島野に狩らぬ日まねく
美之麻野爾可良奴日麻禰久

月ぞ經にける
都奇曾倍爾家流

あの三島野で狩をしない日が多く重つて、もう月日がたつて終つたことだ。

二上の
二上能

をてもこのもに
乎底母許能母爾

網さして
安美佐之底

あが待つ鷹を
安我麻都多可乎

二上山の彼方側此方側に鳥網を設けて自分が待ち焦れて居た鷹の在處をば、

夢に告げつも
伊米爾都都氣追母

夢で神のお知らせがあつたことだ。

萬葉集卷十八

幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌

天平二十一年三月十日に、越中守大伴家持の作である。

高御座
高御座能

天の日嗣と
安麻能日繼登

高御座にお昇り遊ばす、尊い御血筋として天子様が治めていらつしやる國の廣い場所に、山が澤山にあると云ふので、色々の鳥がやつて來て囀る聲も春になると聞耳が如何にも可愛いことである。どの鳥をば取分けて慕はうか、ところが卯の花が咲く四月がやつて來ると、子規が珍らしくも鳴いて、菖蒲の花をば藥玉に通すまでも、晝は日の暮れるまで、夜は明けるまで續いて聞いて居ても、聞く度毎に心が感動されて、嘆息をついて、趣きの深い鳥だと賞めない時はないことだ。

幄裏
屋内の意である。

聞こしをす
伎己之乎須

國のまほらに
久爾能麻保良爾

山をしも
山乎之母

さはに多みと
佐波爾於保美等

百鳥の
百鳥能

來居て鳴く聲
來居て奈久許恵

春されば
春佐禮婆

聞きのかなしも
伎吉能可奈之母

何れをか
伊豆禮乎可

分きて偲ばむ
和枳弖之怒波無

卯の花の
宇能花乃

咲く月立てば
佐久月多豆婆

珍らしく
米都良之久

鳴く子規
鳴久保等登藝須

あやめぐさ
安夜女具佐

珠ぬくまでに
珠奴久麻泥爾

暮し
比流久良之

夜わたし聞けど
欲和多之伎氣騰

晝
比流

心動きて
許己呂豆枳弖

聞く毎に
伎久其等爾

あはれの鳥と
安波禮能鳥

打ち歎き
宇知奈氣伎

言はぬ時なし
伊波奴登伎奈思

可久夜思努波牟
（カクヤシヌバム（舊）
カクゾシヌバム（新））

開爾之奈氣婆
（サクニシナケバ（舊）
トモニシナケバ（元・原・本・新））

反歌

行方無く　あり渡るとも
由具敝奈久　安里和多流登毛

子規　鳴きし渡らば
保等登藝須　奈枳之和多良婆

かくぞ偲ばむ
可久夜思努波牟

行くべき方はなく始終此處にあり續けて居ても、それでも子規が始終鳴いてさへくれゝば、こんなにして何時までも愛（め）でてゐよう。

卯の花の　ともにし鳴けば
宇能花能　開爾之奈氣婆

子規　いや珍らしも
保等得藝須　伊夜米豆良之毛

名告り鳴くなべ
名能里奈久奈倍

卯の花が咲くとともに鳴くので、子規が非常に珍らしく感ぜられることだ。それに搗てゝ加へて大聲で鳴くのだもの。

子規　いとねたけくは
保登等藝須　伊登禰多家口波

橘の　花散る時に
橘能　播奈治流等吉爾

子規はよい鳥ではあるが、非常に氣に食はないことが一つある。それは橘の花の咲く時分にやつて來て邊をとどろ

來鳴きとよむる
伎奈吉登余牟流

かして鳴くことだ。

美豆保國乎
（ミヅホグニヲ（舊）
ミヅホノクニヲ（略・古・新））

神乃美許登能
（カミノミコトノ（舊）
カミノミコトヨ（新））

賀陸奥國出金詔書歌一首幷短歌

聖武天皇が東大寺の大佛を鑄造せしめられて、塗料の黄金が足らずに御軫念遊ばされてゐた天平二十一年二月に、陸奥國小田郡から黄金を献上した。天皇は全く如來の感應に依るものと大いに御悦びになつて、年號を天平感寶と改め、諸社に報告せしめられ、東大寺に行幸になり、關係者一同並に群臣に位を賜はつた。家持も從五位上に進められたのでこの歌を作つて遙かに賀し奉つたのである。

あしはらの　瑞穗の國を
葦原能　美豆保國乎

あまくだり　しらしめしける
安麻久太利　之良志賣之家流

すめろぎの　神のみことよ
須賣呂伎能　神乃美許等能

御代かさね　天の日嗣と
御代可佐禰　天乃日嗣等

しらしくる　君の御代御代
之良志久流　伎美能御代御代

しきませる　四方の國には
之伎麻世流　四方國爾波

豐葦原の瑞穗國を高天原から天降つてお治め遊ばした皇孫瓊々杵尊以來、天つ日繼を次々にお讓り承けなされる代々の天子樣が、お治めになる四方の國には、山は深く河は廣いので、自然献る貢物はとても數へ盡すことが出來ない。さうだのにわが天子樣が、群臣百官どもをお率ゐ遊ばし、大業をお始め

よき事　大佛の鑄造をさす。

久我禰可毛の下（スクナクアラムソヨエテバタノシクアラムトの誤脫あるか。（新））多能之等毛之の誤か（古）

小田　今の陸前遠田郡（元通谷村大字涌谷にあつた。

麻宇之多麻敞禮（マウシタマヘレ（舊）マウシテマツレ（新））この下には助詞ばが省かれてゐる。

山河を　廣みあつみと　たてまつる　多豆麻豆流　みつぎだからは　盡しもかねつ　わが大君の　いざなひ給ひ　始め給ひて　樂しけくあらむと　した惱ますに　あづまの國の　小田なる山に　まうし給へれ　金かも　我禰可毛　黃金ありと　奏し給へれば　天地の　神あひうづなひ　みたまたすけて　無かりしことを　顯はしてあれば　榮えむものと　思ほしてすめろぎの　遠つ代に　わが御代に　遠つ代に　神ながら　思ほしめして　八十伴の男を　撫で給ひ　治め給へば　あやにたふとみ　女童兒毛之我願　老人も　しが願ふ　心だらひに　こころをし　こころを　みこころを　安吉良米多麻比　諸人を　比登　よきこと　善事　黃金　鶏が鳴く　東の　奥の　陸奥の　美知能久　鶏　鶏　於母保之豆　思ほして　御調寶　都美等　御調寶　都久之毛可禰都　吾大王能　伊射奈比多麻比　波自米多麻比豆　多能之樂之　都久之毛可禰都　多奈夜麻須爾　東國能　小田在山爾　麻宇之多麻敞禮　有等　麻宇之多麻敞禮　御心乎　安吉良米多麻比　安夜爾多敷刀美　神安比宇豆奈比　御靈多須氣豆　可可里之許登乎　御食國波　御食國波　於毛保之賣之豆　左可延牟物能等　安良波之豆安禮婆　牟氣乃麻爾麻爾　女童兒毛　許己乎之母

なさつて、この上に黃金が出たらどんなに滿足なことであらうと思召して、ひそかに大御心を惱ましていらつしやる時に、幸なことには東の國の陸奥の小田郡の山に、黃金があるといふことを上聞に達したので、天子樣は、大御心をお晴しになつて、これは畢竟天地の神々が朕の望をお容れなされ、又皇祖皇宗の御靈も朕の大業をお助け遊ばして、それで前代に例のなかつた事を、わが御代にお顯はしになつたのであるから、わが天下はこれからますます繁榮に赴くのだと、神ながら思召しになつて、文武百官を歸服せしめようとのお仕向けの通りに、老人も婦女子も、

皇御祖乃（スメミオヤノ（代・新）スメラギノ（略・古・新））可可里之（カカリシ（代・考）ナカリシ（略・古・新））御食國波（ミヲスグニハ（考・略）ヲスグニハ（古・新））女童兒毛之我願（ヲミナワラハモ（代・新）メノワラハコモ（略・古）シガネガヒ（考）シガネカフ（略・古・新））

天地の　神あひうづなひ　みたまたすけて　無かりしことを　顯はしてあれば　榮えむものと　思ほしめして　八十伴の男を　撫で給ひ　治め給へば　あやにたふとみ　老人も　しが願ふ　心だらひに　こころをし　こころを　みこころを　許己乎之母

大伴氏の遠祖
天孫降臨の時大來目部を率ゐた天忍日命のこと。

海行かば……
大伴氏の家憲とも見るべき信條。

をつつ
＝うつつ。

佐伯氏
雄略の朝の大伴家の人で一支流である。

うれしけく
宇禮之家久
大伴の
大伴能
その名をば
其名乎婆
負ひもちて
於比母知弖
海行かば
海行者
山行かば
山行者
大君の
大皇乃
かへりみは
可弊里見波
ますらをの
丈夫乃
いにしへよ
伊爾之敝欲
流さへる
奈我佐敝流
大伴と
大伴等

いよよ思ひて
伊余與於母比弖
遠つかむおやの
遠都神祖乃
おほくめぬしと
大來目主登
仕へしつかさ
都加倍之官
みづく屍
美都久屍
草むす屍
草牟須屍
へにこそ死なめ
敝爾許曾死米
せじとことだて
勢自等許等太弖
清きその名を
伎欲吉彼名乎
今のをつつに
伊麻乃乎追通爾
おやの子どもぞ
於夜能子等毛曾
佐伯のうぢは
佐伯氏者

志を繼ぎ、その子孫は先祖の名を斷たないやうにうけついで、大君にお仕へ申す者と、言ひ繼いでゐる特殊の職にあるのであるぞ。それ故われ〳〵は、梓弓を手に執り持ち、劍太刀を腰に佩いて、朝な夕なの朝廷の守護にお仕へする者としては、吾々を措いては外に人はあるまいと、ます〳〵志を猛くして、いよ〳〵覺悟を極めることである。この度賜うた天子樣の詔勅の慈愛に滿ちた御趣旨を拜察するに及んで、辱く思ふにつけて。

且比等波安良自等
〔マタヒトハアラジト（舊）
〔ヒトハアラジト（新）
伊夜多弖
〔イヤタキ（代・考・略）
〔トイヤタテ（古）
〔イヤタケク（新）
御言能左吉乃
〔ミコトノサキノ（舊）
〔ミコトノサマヲ（新）

人のおやの
人祖乃
人の子は
人子者
大君に
大君爾
いひつげる
伊比都雅流
梓弓
梓弓
つるぎたち
劍大刀
朝まもり
安佐麻毛利
大君の
大王能
吾をおきて
和禮乎於吉弖
いやたけく
伊夜多弖
大君の
大皇乃
聞けば貴み
聞者貴美

立ることだて
立流辭立
おやの名絶たず
祖名不絶
まつろふものと
麻都呂布物能等
ことのつかさぞ
許等能都可佐曾
手にとりもちて
手爾等里母知弖
腰にとり佩き
許之爾等里波安
夕のまもりに
由布能麻毛利爾
御門のまもり
三門乃麻毛利
人はあらじと
且比等波安良自等
思ひしまさる
於毛比之麻左流
御言のさまを
御言能左吉乃

反歌

ますらをの　心おもほゆ　丈夫能　許己呂於毛保由
おほ君の　みことのさきを　於保伎美能　美許登能佐伎乎
聞けば貴み　聞婆多布刀美

大伴の　大伴
奥津城は　於久都奇波
人の知るべく　比等能之流倍久
遠つ神おやの　等保追可牟於夜能
しるく標め立て　之流久之米多底
御代栄えむと　御代佐可延牟等
陸奥山に　美知能久夜麻爾
黄金花咲く　金花佐久

大丈夫としての覺悟を一層強く抱きしめるべきである。この度深いお恵をお與へになる辱い天子様の詔を承る貴さに。

われ〳〵大伴氏の遠い祖先の墓は、それとあまねく世の人々がよく知るやうに、著しく築き上げて置けよ。

わが天子様がお治め遊ばしてゐるこの大御代が、いよ〳〵繁榮に赴くしるしとして東國の陸奥の山に黄金の花が咲き出たことである。

すめろぎの　須賣呂伎能
東なる　阿頭麻奈流
陸奥山に　美知能久夜麻爾
黄金花咲く　金花佐久

爲幸行芳野離宮之時儲作歌一首并短歌

高御座　高多可
天の　天
日嗣と　日嗣等
天の下　下
しらしめしける　志良之賣師家類
神のみことの　可未能美許等
はじめたまひて　波自米多麻比弖
定めたまへる　定多麻敝流
この大宮に　許乃於保美夜爾
三吉野の　美與之努
あり通ひ　阿里我欲比
目し給ふらし　賣之多麻布良之
八十伴のをも　夜蘇等母能乎毛
親の名名負ひ　於夜能名名負比
己が負へる　於能我名負敝流
もののふの　毛能乃敷能
八十伴の緒を　夜蘇等母乃乎
率へて　比伎比弖
朝には　阿佐尓波
召上げ賜ひ　賣之阿氣多麻比
夕には　由布尓波
召入れ賜ひ　賣之伊里多麻比
天の下　阿麻能之多
しらしめしつつ　志良之賣之都々
すめろぎの　須賣呂伎能
はじめたまひし　波自米多麻比之
この大宮を　許乃於保美夜乎

高御座に御昇り遊ばす尊い御血筋として、この日本國中を御統治になつた天子様が、畏れ多くも初めて尊くも御定めになつた、吉野川にあるこの大宮に、つぎ〳〵の天子様はずつと御通ひ遊ばして、この佳い景色を御眺め遊ばすらしい。我が多くの大伴家の男らも、自分の名に負うてゐる、先祖代々傳へて來た名に恥ぢずに、天子様の御任命のままに、この吉野川の流が絶えることがなく、この吉野山がいよ〳〵榮えて

許乃於保美夜爾（コノオホミヤニ（舊）コノオホミヤヲ（新））

於能我名負名負（オノガナオヒナオヒ（代）オノガナニナニ（考）オノガナオヒテ（略）オノガナナオヒテ（古）オヤノナナオヒ（新））

麻氣能麻久麻久
（マケノマクマク（舊）
マケノマニマニ（考・古・新））

大君の任けのまにまに
大王乃 麻氣能麻久麻久

この川の絶ゆることなく
此河能 多由流許等奈久

この山の いやつぎつぎに
此山能 伊夜都藝都藝爾

かくしこそ仕へまつらめ
可久之許曾 都可倍麻都良米

いや遠ながに
伊夜等保奈我爾

行くやうに、このやうにして御仕へ申して行かう、これから後永遠に。

反歌

古へを思ほすらしも
伊爾之敝乎 於母保須良之母

わが大君吉野の宮を
和期於保伎美 余思努乃美夜乎

あり通ひ目す
安里我欲比賣須

我が天子様は、古の有様を御偲びになるらしい、このやうにしてこの吉野の宮を、ずつと御通ひ遊ばしつゝご覽になることだ。

*もののふの八十氏人も
物能乃布能 夜蘇氏人毛

多くの大伴家の人人も、吉野川の流れ

吉野川絶ゆることなく
與之努河波多由流許等奈久

仕へつつ見む
都可倍追通見牟

が絶えることがないやうに、絶えずこの宮に御仕へ申しつつ、この美しい景色を眺めて行かう。

爲贈京家願歌珠愼一首幷短歌

同じく五月十四日に、大伴家持が興に乘じて作つた歌である。

鈴の浦の海人が、沖にいます海神のいらつしやる邊へ渡つて行つて、潜りこんで取り出すと云ふところの鰒の眞珠を、五百も千も欲しいものだ、可愛いいとしい妻が別れた時から、二人並んで居た床の片方が空いて、其處に小さくなつて寢た朝の寢亂れ髮を梳きもしないで、私がかうして出發してやつて來た月日を、あれからもう幾月經つ

鈴の浦
能登國珠洲郡にある。

鈴の海人の沖つ御神に
珠洲乃安麻能 於伎都美可未爾

い渡りてかづきとるといふ
伊和多利弖可都伎等流登伊布

あはび珠五百千もがも
安波妣多麻 伊保知毛我母

はしきよし妻のみことの
波之吉餘之 都麻乃美許登能

衣手の別れし時よ
許呂毛泥乃 和可禮之等吉欲

*ぬばたまの夜床かたさり
奴婆玉乃 夜床加多左里

朝寢髮かきもけづらず
安佐禰我美 可伎母氣頭良受

都都美氐夜良波
（ツツミテヤラナ（代・略・古・新）
ツツミナヤラハ（考））

出でて來し　伊泥氐許之
月日よみつつ　月日余美都追
歎くらむ　奈氣久良牟
心なぐさに　心奈具佐余
子・規　保登等藝須
來鳴く五月の　伎奈久五月能
あやめぐさ　安夜女具佐
花橘に　波奈多知波奈爾
貫きまじへ　奴吉麻自倍
かづらにせよと　可頭良爾世餘等
包みてやらむ　都追美氐夜良牟

白玉を　白玉乎
包みてやらな　都都美氐夜良波
あやめぐさ　安夜女具佐
花橘に　波奈多知婆奈爾
あへもぬくがね　安倍母奴久我禰
沖つ島　於伎都之麻
い行きわたりて　伊由伎和田里弖

ただらうかと指折り數へながら、嘆息をついて居る筈のその心ばらしに、子規が鳴いて來る五月の菖蒲を、橘にさし雜ぜて頭飾にせよといつて、何かに包んで贈つてやりたいものだ。

眞珠の白玉を何か物に入れて贈つてやり度いものだ、菖蒲や橘の花に合せて挿すやうに。

遙かの沖の方の島へ渡つて行つて、潜

伊比都藝家良之
（イヒツギケラシ（考）
イヒツギケラク（古・新））

かなし　可愛いこと。

佐家流沙加利爾　この下若干の脱句あるか（新）

かづくちふ　可豆具知布
あはび珠もが　安波妣多麻母我
包みてやらむ　都都美弖夜良牟

教ニ喩史生尾張少ノ昨ヲ歌一首幷ニ短歌

この歌は五月十五日に越中守大伴家持の作である。尾張少咋が如何なる人であるかは不明。

おほなむち　於保奈牟知
少彦名の　須久奈比古奈野
神代より　神代欲里
言ひつぎけらく　伊比都藝家良之
父母を　父母乎
見れば尊く　見波多布刀久
妻子見れば　妻子見波
かなしくめぐし　可奈之久米具之
空蟬の　宇都世美能
世のことわりと　余乃許等和利止
かくざまに　可久佐末爾
言ひけるものを　伊比家流物能乎
世の人の　世人能
立つることだて　多都流許等太弖
ちさの花　知左能花
咲ける盛りに　佐家流沙加利爾

大己貴命や、少彦名神がいらつした神代の大昔から、ずつと今まで云ひ續けて來たやうには、父親や母親を見ると尊いし、妻や子供を見ると可愛ゆくていとしい。これが人間世界の道理だとかう云ふ風に云うて來たのだよ。世間の凡ての人の主張する教訓は、山ちさの花が咲いて居るやうに、仲の好い盛りに可愛いゝその女房であると、朝晩笑つて居る時も、さうでない時も、

惠末須毛（エマズモ（舊）／エマスミ（新））

古加里裳安良……（サカリモアテムト／マタシケム（代・略・古・新）／サキノサカリモ／アタラシケム（考））

沙加利曾（トキノサカリゾ（考）／トキノサカリヲ（古・新））

はしきよし　波之吉余之
その妻の子と　曾能都末能古等
朝よひに　安沙余比爾
笑みみ笑まずみ　惠美美惠末須毛
うちなげき　宇知奈氣伎
語りけまくは　可多里家末久波
とこしへに　等己之部爾
かくしもあらめや　可久之母安良米也
天地の　天地能
神ことよせて　可未許等余勢天
春花の　春花能
盛りも有らむと　佐可里裳安良牟等
待たしけむ　末多之家牟
時のさかりぞ　等吉能沙加利曾
さかり居て　波居弖
嘆かす妹が　奈介可須移母我
何時しかも　何時可毛
使の來むと　都可比能許牟等
待たすらむ　末多須良無
心寂しく　心左夫之苦
南吹き　南吹
雪解は溢りて　雪消益而
射水川　射水河
流るゝ水泡の　流水沫能

話し合うたことには、人間と云ふものは何時何時までもかうして居られようか、天地間に有らゆる神様がかうした妻を自分に與へて下され、そんなに嘆く必要がない旅に行くからと云うて何時もそんなに離れて居ようか。其中には天地間を御支配になる神様が、惠をお垂れ下さつて春の花が咲き盛るやうな慶たい時もあるだらうと云つて、家を出發せられた其嘆の最中で今はある筈だ、それに別れて居る爲に、嘆いてをられる奥さんが早く貴方からの使が來れば好いと待つて居るだらう、心も氣の毒に思はれるのに、此方では春の南の風が吹いて、雪解の水が溢れ出

左夫流　自註に遊女の名とある。
その子　遊女をさす。
いつがり　いは接頭語。つるがはつながるといふ意。
さどはせる　まどはせるに同じ。

寄るべなみ　余留弊奈美
さぶるその子に　左夫流其兒爾
*紐の緒の　比毛能緒能
いつがり合ひて　移都我利安比弖
*にほ鳥の　爾保騰里能
二人並び居　布多理雙坐
奈胡の海の　那呉能宇美能
おきを深めて　於伎乎布可米天
さどはせる　左度波世流
君が心の　伎美我許己呂能
術も術なさ　須敝母須弊奈佐

反歌

*青丹よし　安乎爾與之
奈良にある妹が　奈良爾安流伊毛我
高々に　多可多可爾
待つらむ心　麻都良牟許己呂
しかにはあらじか　之可爾波安良司可

奈良にをるいとしい人が鶴の首して待つて居る心は、お前さんのやうなさうしたものではありますまいよ。

しりぶり
うしろぶり、後姿の意。

紅
遊女に譬ふ。

橡
本妻に譬ふ。

田道間守
新羅の歸化人天日槍の後裔である。

常世
ここでは外國をさす。

里人の見る目恥かし
左刀 妣等 能 見流 目波豆 可之

さぶる子に迷はす君が
左夫流 兒爾 左度波 須 伎美我

寢屋出しりぶり
美夜泥之理夫利

紅は移ろふものぞ
久禮奈爲波 宇都呂布 母能曾

つるばみの馴れにし衣に
都流波美能 奈禮爾之 伎奴爾

なほ及かめやも
奈保之可米夜母

橘歌一首幷短歌

閏五月二十三日大伴家持が橘を詠じたのが、この歌である。

かけまくも あやにかしこし
可氣麻久母 安夜爾加之古思

すめろぎの神の大御世に
皇神祖能 可見能大御世爾

田道間守常世にわたり
田道間守 常世爾和多利

近所の人人の見る目も恥かしい。さぶる子に迷うていらつしやる貴方が、寢屋を出て行きなさる後姿が。

紅といふ色は美しいが、併し兎角さめ易い色である。やはり橡染の馴れた衣にしくものはないのだ。

言葉にかけて申し上げることも、非常に畏れ多いことではあるが、皇祖の神樣の御代に、田道間守と云ふ人が、常世の國へ渡つて行つて澤山の枝を持つ

麼爲泥許之登吉時支能
マヰデコシトキ トキジクノ(代・略)
マヰデコシトフ トキジクノ(古)
マヰデコシカバ トキジクノ(新)

蘇泥爾毛古伎禮
ソデニモコキレ(舊)
ソデニコキレミ(新)

安由流
この語があつては意味が通じない。生る等の誤か假りに文字通りに解いておく。

入矛もち まゐで來しとふ
夜 保許 毛 知 麻爲泥許之登吉

時じくの かぐの果實を
時 支 能 香久乃菓子乎

かしこくも遺したまへれ
可之古久母 能許之多麻敝禮

國も狹に生ひ立ち榮え
國 毛勢爾 於非多知左加延

春されば ひこえ萠いつつ
波流左禮婆 孫枝毛伊都追

ほととぎす 鳴く五月には
保登等藝須 奈久五月爾波

初花を 枝に手折りて
波都婆奈 乎 延太爾多乎理弖

をとめらに つとにも遺りみ
乎登女良爾 都刀爾母夜里美

白妙の 袖にこきれみ
之路 多倍 能 蘇泥爾毛古伎禮

かぐはしみ おきて枯らしみ
香具播之美 於枳弖可良之美

あゆる實は 玉にぬきつつ
安由流實波 多麻爾奴伎都追

手にまきて 見れども飽かず
手爾麻吉弖 見禮騰毛安加受

て參つたといふ、四季に絶えることのない香しい樹の實をば、畏れ多くもその種を後世にお殘しになつたので、後には國中一杯に生ひ立ち榮えて、春が來ると孫枝が生え出して來るし、子規が鳴く五月にはその初花をば枝ぐるみに折りとつて娘たちにお土產にやつて見たり、或はその花を袖の中へ扱き入れたり、香を懷かしがつて樹の儘に打ちやつておいて枯れるに任せたり、又そのうれた實は玉のやうに緒に貫き乍ら手に卷き着けて、幾ら見ても飽くといふことがない。秋が近づくと時雨の雨が降つて、山の樹の梢は一樣に紅色に映えて散つて終ふが、その樹になつ

霜於氣騰母（シモオケドモ（舊）／シモオケド（新））

伊夜佐加波延爾（イヤサカハエニ（舊）／イヤサカハエ婆（新））

秋づけば（秋豆氣婆）
*あしびきの（阿之比奇能）
くれなゐに（久禮奈爲爾）
たちばなの（多知波奈能）
ひた照りに（比太照爾）
み雪ふる（美由伎布流）
霜おけど（霜於氣騰母）
常磐なす（常磐奈須）
しかれこそ（之可禮許曾）
よろしなへ（與呂之奈倍）
ときじくの（等伎自久能）
名づけけらしも（名附家良之母）

時雨の雨降り（之具禮能雨零）
山の木ぬれは（夜麻能許許禮波）
にほひ散れども（仁保比知禮止毛）
なれるその實は（成流其實者）
いや見がほしく（伊夜見我保之久）
冬に至れば（冬爾伊多禮波）
その葉も枯れず（其葉毛可禮受）
いやさかはえに（伊夜佐加波延爾）
神の御世より（神乃御代欲理）
この橘を（此橘乎）
かぐの果實と（可久能木實等）

た橘の實は非常に輝いて、幾ら見てもいよ〳〵見て居たくあるし、雪の降る冬になると霜は降りても、その葉も枯れないでしつかりとした岩の様に、愈々繁榮になつて行きさうだからして、ずつと神代の古い時代から、この橘をば時じくの香具の樹の實と、甘い名を附けたに違ひないことだ。

まき給ふ（任け給ふに同じ。）

反歌一首

橘は（橘波）
見つれども（美都禮騰母）
猶し見がほし（奈保之見我保之）
花にも實にも（花爾毛實爾母）
いや時じくに（移夜時自久爾）

橘は花として見、實としても見て居たことであるが、それでも未だ足りないで尚幾らでも眺めて居たいことだ。

詠ニ庭中花ヲ作歌レル一首幷ニ短歌

これは同じ二十六日に大伴家持の詠んだ歌である。

大君の（於保伎見能）
まき給ふ（末伎太末不）
み雪降る（美由伎布流）
*あら玉の（安良多末能）
*敷妙の（之吉多倍乃）
遠の御門と（等保能美可等等）
司のまにま（官乃末爾末）
越に下り來（古之爾久太利來）
年の五年を（等之能五年）
手枕枕かず（手枕末可受）

天子様の遠い御領地を治める役人として、任命せられたその役目通りに雪の降る越の國へ下つて來て、五年と云ふ年の間、いとしい妻の手枕を枕ともせず、下裳の紐も解かず、一人轉寢をして居るので退屈だと云つて、氣晴しに

ゆり　暫くの後。將來。

紐解かず　假寢をすれば
比毛等可須　末呂宿乎須禮波
いぶせみと　心なぐさに
移夫勢美等　情奈具左爾
撫子を　宿に蒔きおふし
奈泥之故乎　屋戸爾末枳於保之
夏の野の　さ百合引き植ゑて
夏能能之　佐由利比伎宇惠天
咲く花を　出で見る毎に
開花乎　移低見流其等爾
撫子が　其の花妻に
那泥之古我　曾乃波奈豆末爾
*さ百合花　ゆりも逢はむと
佐由理花　由利母安波無等
なぐさむる　心しなくば
奈具佐無流　許己呂之奈久波
*天ざかる　鄙に一日も
安麻射可流　比奈爾一日毛
あるべくもあれや
安流部久母安禮也

反歌二首

撫子を屋敷内に蒔いて育て、又夏の野に生えて居る百合の花を引いて來て植ゑて、それらの咲いた花を室から出て見る度毎に、その撫子の懷かしい妻とも思はれる花ではないが、あの家にをる妻に、百合の花の名の通り、後々も逢はうとなだめる心持がなかつたら、地方の田舎に一日だつてをられる筈があらうか。

匂ひ　艶色。あだつぽいさま。

したばふる　心の中に思ひつゞけること。

撫子が　花見る毎に
奈泥之故我　花見流其等爾
處女等が　笑まひの匂ひ
乎登女良我　惠末比能爾保比
思ほゆるかも
於母保由流可母
*さ百合花　ゆりも逢はむと
佐由利花　由利母相等
したばふる　心しなくば
之多波布流　許己呂之奈久波
今日も經めやも
今日母倍米夜母

撫子の花を見る度毎に、娘たちのにつこりしたあだつぽいさまが思はれることだ。

百合の花といふ言葉のやうに、後々は御互に逢はうと心の中で思ひ續けて居ることがなければ、安心して暮されようか、その自信があるからこそ、今日もこんなにして居られるのだ。

國掾久米朝臣廣繩、以天平二十年附朝集使入京。其事畢而天平感寶元年閏五月二十七日還到本任仍長官之舘設詩酒宴樂飲。於時主人守大伴宿禰家持作歌一首幷短歌

大君の　於保伎見能
取り持ちて　等里毛知底
年の中の　年内能
*玉桙の　多末保許能
岩根踏み　伊波祢布美
都邊に　彌夜故麻
*あらたまの　安良多末乃
月重ね　月可佐祢
*戀ふるそら　故敷流曾良
霍公鳥　保止支須
*あやめ草　夜女具佐
さかみづき　左加美都伎
まきのまにまに　末伎能麻尓麻尓
仕ふる國の　都可布流久尓能
事かたね持ち　許登可多祢母知
道に出で立ち　美知尓伊天多知
山越え野行き　也麻古衣野由伎
まゐし我が背を　末爲之和我世乎
年行きかへり　等之由吉我敝理
見ぬ日さまねみ　美奴日佐麻祢美
安くしあらねば　夜須久之安良祢婆
來鳴く五月の　支奈久五月能
よもぎかづらき　余母疑可豆良伎
遊びなぐれど　安蘇比奈具礼杼

天子様の御命令の通りに、政を引き受けてなし奉つて居る國の、一年中の仕事を引き纏めて持つて、都への道に上つて、岩を踏み通つて、山を越えたり、野を通つたりして、いよ〳〵都の方へ參上した貴方をば、年が立ち返つて月を重ねて待つて居ても、逢はない日が多いので、焦れて居る心持が安らかでないので、子規の鳴いて來る五月の頃の菖蒲や蓬を頭に蘰として、酒に醉ひ潰れて、心を晴々として遊んで居るけれども、この射水河の雪解の水が漲り溢れて、どん〳〵と烈しうなつて許り行くやうにだん〳〵思ひ沈むのみであり、あの鶴の鳴いて居る奈胡の入

背
久米廣繩をさす。

さまねみ
まねみといふに同じ。さは接頭語。

さかみづき
酒水漬くの意で、酒びたりになること。
なぐれど
和ごむれどの意。

（　）の三句
いやましの序。

（　）の中二句
ねもごろの序。

にふぶに
にこやかに、にこ〳〵と。

（いみづがは　射水河）
行く水の（水能）
逝
（鶴が鳴く　多豆我奈久）
ねもごろに　根毛己呂尓
嘆きつゝ　奈介伎都都
我が待つ君が　安我末川君我
事終り　許登乎波里
歸り退りて　可敞利末可利天
夏の野の　夏野能
花笑みに　花咲爾
逢はしたる　河波之多流
*鏡なす　鏡奈須
面變りせず　於毛我波利世須
雪消（ゆ）溢りて　雪消（ゆき）溢而
彌益しにのみ　伊夜末思爾乃未
奈胡江の菅の（奈呉江能須氣）
思ひ結ぼれ　於母比牟須保禮
我が待つ君が　安我末川君我
歸り退りて　可敞利末可利天
さ百合の花の　佐由利能波奈
にふぶに笑みて　爾布夫爾惠美天
今日を始めて　今日乎波自米天
かくし常見む　可久之都禰見牟

菅の根のやうに、ねむごろに泌々と鬱結して思ひ込み、溜息をつき〳〵私の待ち焦れて居た貴方は、公務を果して、退出して、宮を下つて歸られて、夏の野の百合の花が、笑み出したやうに、晴々とした笑顔で莞爾と笑を含んで、自分に逢つて下さつた今日を始めとして、これからは何時もかうして鏡を見るやうに互に相見て居ませう、何時〳〵までも姿も變らないで。

面
單に顏の意でなく、ここでは容姿のこと。

反歌二首

昨年の秋（こぞ）
許序能秋
相見し儘に
安比見之末末爾
今日見れば
今日見波
面や珍らし
於毛夜目都良之
都方人
美夜古可多比等
かくしても
可久之天母
相見るものを
安比見流毛能乎
少くも
須久奈久母
年月經れば
年月經禮婆
戀しけれやも
古非之家禮夜母

去年の秋に逢うたつきりで、今日かうして相見ると、容姿がすつかりと目立つて變つて、全く都人のやうだ。

こんなに焦れ〳〵て末には逢ふことの出來るものを、もつと年月が長く經てば、たんに焦れるといふ丈でをられたことだらうか、

天平感寶元年閏五月六日以來、起小旱百姓、田畝稍有凋色也。至于六月朔日。忽見雨雲之氣、仍作雲歌一首

これも大伴家持の作である。

すめろぎの
須賣呂伎能
しきます國の
之伎麻須久爾能
天の下
安米能之多
四方の道には
四方能美知爾波
馬のつめ
宇麻乃都米
い盡す極み
伊都久須伎波美
舟のへの
布奈乃倍能
い果つるまでに
伊波都流麻泥爾
古ゆ
伊爾之敝欲
今の現に
伊麻乃乎都頭爾
よろづつき
萬調
まつるつかさと
麻都流都可佐等
作りたる
都久里多流
その生業を
曾能奈里波比乎

天子樣が治めていらつしやる國なる、天下中の地方の國々では、馬の蹄で行き盡す範圍内、又は船の舳先が止まるまでの間、昔から現在の今まで澤山の奉物を奉る仕事と云ふので、拵へたその農作の仕事を、雨が降らないことが幾日も〳〵つゞいたので、苗を植ゑた田も、外の種を蒔いて育てた畑も、毎朝見る度毎に凋んで枯れて行く、それ

畑 單に畑の意にとつてもいい。又畑の作物の意にもとれる。

山のたふり 山の端の撓んで低くなつたところ。

雨降らず・日の重なれば
安米布良受 日能可左奈禮波

植ゑし田も蒔きし畑も
宇惠之田毛 麻吉之波多氣毛

朝毎に凋み枯れ行く
安佐其登爾 之保美可禮由苦

そを見れば心を痛み
曾乎見禮婆 許己呂乎伊多美

みどりごの乳乞ふが如く
彌騰里兒能 知許布我其登久

天つ水あふぎてぞ待つ
安麻都美豆 安布藝弖曾麻都

足引の山のたふりに
安之比奇能 夜麻能多乎理爾

この見ゆる天の白雲
許能見由流 安麻能之良久母

わたつみの沖つ宮邊に
和多都美能 於枳都美夜敝爾

立ち渡りとの曇り合ひて
多知和多里 等能具毛利安比弖

雨も賜はね
安米母多麻波彌

反歌一首

を見ると心が辛いので、赤ん坊が乳を欲しがるやうに、天から降つて來る水を焦れて待つて居ることだ。山の峠の邊に今見えて居る空の白雲が、どうか海の沖の神の方の宮のある邊までずつと一杯に立つて、空一面にすつかりかき曇つて雨をば下されよ。

ほびこる はびこること。

とのぐもる たなぐもること。空一面にかき曇ること。

安の川 高天原にある川。

息の緒に 命をかけての意。

この見ゆる雲ほびこりて
許能美由流 久毛保妣許里弖

との曇り雨も降らぬか
等能具毛理 安米毛布良奴可

心だらひに
許己呂太良比爾

今見えて居るあの雨雲がはびこりはびこつて、空一面をかき曇らして、滿足する位に雨が降つてくれれば好いがなあ。

七夕一首幷ニ短歌

大伴家持が七月七日に天の川を仰いで作つた歌である。

天照らす神の御世より
安麻泥良須 可未能御代欲里

安の川中に隔てゝ
夜洲能河波 奈加爾敝太弖弖

向ひ立ち袖振り交はし
牟可比太知 蘇泥布利可波之

息の緒に嘆かす子ら
伊吉能乎爾 奈氣加須古良

渡り守る舟も設けず
和多理母理 布彌毛麻宇氣受

橋だにも渡してあらば
波之太爾母 和多之氐安良波

天照太神のいらつしやつた神代の頃から、天の安川を中に隔てゝ互に向ひ合つて立つて、互に袖を振り合ひ、命掛けで嘆いて居る子であるかな。渡し守が舟も準備してくれないのでせめて橋だけでも渡してあつたら、その上をば通つてお渡りなされ、手をとりあひ首

その上ゆも　曾能倍由母
携はり　多豆佐波利
思ほしき　於母保之吉
慰さむる　那具左牟流
何しかも　奈爾之可母
言問ひの　許等等比能
うつそみの　宇都世美能
こことをしも　許己乎之母
行き更る　往更
天の原　安麻能波良
云ひ續ぎにすれ　伊比都藝爾須礼
反歌二首

いい行き渡らし　伊由伎和多良之
頸がけり居て　宇奈我氣利乎
ことも語らひ　許登母加多良比
心はあらむを　許己呂波安良牟乎
秋にしあらねば　安吉爾之安良祢波
乏しき子ら　等毛之伎古良
世の人我も　代人和礼母
あやに奇しみ　安夜尓久須之美
年のは毎に　年能波其登爾
振り離け見つゝ　布里左氣見都追

に手をかけて居て云ひたいと思ふことも語り合ひ、心を宥めることもあらうのに、秋でないからといふので、何故か話をし合ふことも少い子等であらう、人間世界の人である私も、それが無性に不思議さに、立ちかはる年の度毎に、こんなに大空を振り仰いで見ながら、七夕の夜の儚ない戀を語り傳へにすることだ。

うつそみ
ここでは人間世界の意。

往更
（ユキカヘル（考）
（ユキカハル（略・古・新）

許牟可比
（コムカヒ（考・略）
（イムカヒ（古・新）

年の戀
一年中の戀といふ意。

天の　安麻能
川　我波
橋渡らせば　波志和多良世波
其上ゆも　曾能倍由母
秋にあらずとも　安吉爾安良受得物

安の　夜須能
川　河波
い向ひ立ちて　許牟可比太知豆
年の　等之能
戀　古非
け長き子らが　氣奈我伎古良河
妻どひの夜ぞ　都麻度比能欲曾

若し天の川に橋を渡しておいたら、逢ふ爲めに其の上をば假令秋でなくつても渡つていらつしやらうのに。

あの天の安の川原で互に對ひ合つて立つて居ながら、一年中焦れて居て長く逢はない人たちが、妻を訪ねて行くといふ今宵であるぞ。

萬葉集卷十九

八日詠二白大鷹一歌一首并二短歌

この歌は、天平勝寶二年三月八日に、越中守大伴家持が白斑の大鷹を得て詠じた歌である。

（　）の中　越にかゝる序。

去更　（ユキカヘル（考・略）　ユキカハル（古・新））

京師乎母　乎を衍とす（新）

おやじ　同じに等しい。

語りさけ見さくる　さけは心を遣る、心をはらすの意。

石瀬野　越中國新川郡にある。神通川の河口に東岩瀬といふ町がある。

馬たぎゆきて　馬の手綱をたぐつての意。

あはせやり　鷹を放つて鳥に合せてやること。

妻屋　寢室のこと。

鳥ぐら　鳥屋をいふ。

飼はく　飼ふの延言。

*あしびきの　安志比奇能　山坂越えて　山坂超而

行きかはる　去更　年の緒長く　年緒奈我久

*しなざかる　科坂在　越に住めば　故志爾須米婆

大君の　大王之　敷きます國は　敷座國者

都を　京師乎母　此處もおやじと　此間毛於夜自等

心には　心爾波　思ふものから　念毛能可良

語りのさけ　語左氣　見さくる人目　見左久流人眼

ともしみと　乏等　思ひし繁し　於毛比志繁

そこ故に　曾己由惠爾　心和ぐやと　情奈具也等

秋づけば　秋附婆　萩咲き匂ふ　芽子開爾保布

石瀬野に　石瀬野爾　馬たぎゆきて　馬太伎由吉氐

遠近に　乎知許知爾　鳥踏み立て　鳥布美立

山や坂を越えてやつて來て、幾度も來復する年月長く、遠い田舍の越の國に住んで居ると、心の中では天子樣の御治め遊ばす國は何處でも同じことであると都のことも此處のことも同じやうに思つて居るのであるが、自分の心の中を打ちとけて話して心を晴らし、逢つて氣を晴らす人が少いことだと、思ひ患ふことが胸一杯である。そこで氣が慰まるかと思つて、秋が近よると萩が華やかに咲く岩瀬野へ、馬の手綱を操りながら出かけて行つて、走り廻つて彼方此方から鳥を追ひ立て銀鍍金の鈴の音もゆら〳〵と、好い頃を見計らつて鳥を追ひ出し、遙に空を振り仰いて見ながら都のことを思ふと、どきどきとして胸苦しい心の裡をば悠りとさせ、寢間の中に鳥屋をば結ひ据ゑて嬉しく思ひつゝ、自分で餌をやつて育てゝ居る眞白な斑の鷹よ。

白塗の　白塗乃　小鈴もゆらに　小鈴毛由良爾

あはせやり　安波勢矢里　振りさけ見つつ　布里左氣見都追

憤る　伊伎騰保流　心の中を　許己呂能宇知乎

思ひのべ　思延　嬉しびながら　宇禮之備奈我良

*枕づく　枕附　妻屋の内に　都麻屋之内爾

鳥ぐら結ひ　鳥座由比　据ゑてぞ我が飼ふ　須惠氐曾我飼

眞白斑の鷹　眞白部乃多可

反歌

屋形尾の　矢形尾乃　眞白の鷹を　麻之路能鷹乎

屋戸に据ゑ　屋戸爾須惠　かき撫で見つゝ　可伎奈泥見都追

飼はくしよしも　飼久之余志毛

やかたをの眞白な斑の鷹を、自分の屋敷内に据ゑておいて、撫でゝやりながら飼つて居るのは、何んといふ面白いことだ。

年去更
〔トシユキカヘリ（舊）
〔トシユキカハリ（古・新）

さきだ川
澁谷の附近を流れるもみぢ川といふのがそれであらうといふ。

篝さし
篝火をともすこと。或は照らすこと。

わぎも兒
家持の妻の坂上郎女で、當時奈良の留守宅にゐたのであらう。

潛鸕歌一首幷短歌

この歌も、大伴家持の詠である。

*新玉の年行きかはり
荒玉能年往更
春されば花咲き匂ふ
春去者花開爾保布
*あしびきの山下とよみ
安之比奇能山下響
落ちたぎち流るさきだの
墮多藝知流辟田乃
河の瀨に鮎子さ走り
河瀨爾年魚兒狹走
*島つ鳥鵜飼ともなへ
島津鳥鸕養等母奈倍
篝さし なづさひ行けば
可我理佐之奈頭左比由氣波
わぎも兒が形見がてらと
吾妹子我可多見我豆良等
紅の や鹽に染めて
紅之八鹽爾染而
おこせたる衣の裾も
於己勢多流服之襴毛

年が立ちかはつて春がやつて來ると、花が美しく咲き匂つて居る山の下をとどろかして、落ちて激しく流れる辟田川の淺瀨に、鮎が走つて居るので、自分が人々をして鵜に餌をやつてそれと引き率れさせて、篝をともして水流に漬つてやつて行つたところが、いとしい妻が記念かた〳〵、始終着て居て下さいと、紅の色を深く染めて送つてよこした着物の裾までも、水が裏まで透つて濡れたことだ。

匂はし
ここでは衣を濡らすこと。水に濡れると色濃く見えるからかくといふ。

初めよ
よはよりと言ふに同じく出發點を現はす助辭。ゆともいふ。

來たれ
來たるにの意。

とほりて濡れぬ
等寶利弖濃禮奴

反歌

紅の衣匂はし
紅衣爾保波之
辟田川絶える事なく
辟田河絶己等奈久
われ顧みむ
吾等眷牟

紅色の着物をこの川水に濡して、この辟田川へ何時までも止むることなく始終見にやつて來よう。

悲世間無常歌一首幷短歌

この歌は、大伴家持が世の中の無常を歎き悲しんで作つた歌である。

天地の遠き初めよ
天地之遠始欲
世の中は常無きものと
俗中波常無毛能等
語りつぎ長らへ來たれ
語續奈我良倍伎多禮
天の原ふりさけ見れば
天原振左氣見婆

天と地の開け初めたずつと大昔から、この世界は無常極りないものであると語り傳へられて來てゐるが、大空をはるかに振り仰いで見ると、そこにきら〳〵と輝いてゐる月も盈つたり虧けた

かはらひ
かはりのは行延言。變りの意。

照る月も　盈ち虧けしけり
照　月　毛　盈　吳之家里

*あしびきの　山の木ぬれも
安之比奇能　山之木末毛

春されば　花咲き匂ひ
春　去　婆　花　開爾保比

秋づけば　露霜おひて
秋　都　氣　婆　露　霜　負而

風交り　黄葉散りけり
風　交　毛美知落家利

現身も　斯くのみならし
宇都　勢美　母　如是能未奈良之

紅の　色もうつろひ
紅　能　伊呂母宇都呂比

*ぬばたまの　黒髪變り
奴婆多麻能　黒髪　變

朝の笑み　夕べかはらひ
朝之　咲　暮　加波良比

ふく風の　見えぬが如く
吹　風　能　見要奴我其登久

逝く水の　止らぬ如く
逝　水　能　登麻良奴其等久

常も無く　移ろふ見れば
常　毛　奈　久　宇都呂布　見者

りすることである。山の木の梢も、春になると花が華かに咲きかゞやき、秋が近づいて來ると冷たい露や霜を受けて風と共に黄葉がちら〳〵と亂れ飛ぶことです。われ〳〵人間のこの肉體も丁度かうしたものに違ない、眞赤な肌の色もだん〳〵に褪せ、つや〳〵とした黒髪も何日しか白髪と變つて行つて、朝の笑顔は夕方には變つて終ひ、丁度吹く風が目に見えないやうに、或は流れて逝く水がぢつと一つ處に止つてゐないやうに、永久性がなく衰へて行くのを見ると、水溜りの水が流れるやうに、はら〳〵と落ちる涙を止めることが出來ないことだ。

ちらく
ちるのか行延言。散るの意。

常を無みこそ
世の常無きにこそさうだとの意。

心つけずて
物事に執着せずしての意。

思ふ
世の中のことに觀念すること。

潦　流るる涙
爾波多豆美　流　涕

止めかねつも
等騰米可禰都母

反歌

言問はぬ　木すら春咲き
言　等　波　奴　木　尙　春　開

秋づけば　紅葉ちらくは
秋　都　氣　波　毛美知•遲•良久波

常を無みこそ
常　乎　奈　美　許　曾

現身の　常無き見れば
宇都　世美　能　常　無　見　者

世の中に　心つけずて
世　間　爾　情　都　氣　受　氐

思ふ日ぞ多き
念　日　曾　於保伎

物も言はない木でさへも、春は花が咲き、秋が近づくと紅葉が散つて終ふのは、矢張りこの世の中が無常であるからだ。

われ〳〵のこの肉體が無常であるのを見ると、この世の中といふものに執着するやうなことがないで、深くふさぎこんで終ふ日が多いことだ。

慕振勇士之名歌一首并短歌

この歌は左註に「右二首追和山上憶良臣作歌」とあつて、巻の六なる山上憶良の歌の「をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして」の勇士の名を振ひ起したのを慕つて、それに唱和した歌である。雄渾な思想と壮重な形式とに依つて、當代の武将の面目を遺憾なく髣髴たらしめたものである。

*ちちの実・乃　父の命　父　能　美許登
*はそばの・乃　母の命　母　能　美己等
おほろかに　心盡して　於保呂可爾　情　盡　而
思ふらむ　其の子なれやも　念　良　牟　其　子奈禮夜母
ますらをや　空しくあるべき　丈夫　夜　無奈之久可　在
梓弓　末振りおこし　梓　弓　須惠布理於許之
投げ矢持ち　千尋射渡し　投　矢　持　千　尋　射　和多之
投矢毛知　千　尋
腰にとり佩き　腰　許思爾等理波伎
劍太刀　劍　太　刀
*ちの実・乃　父の命　知　乃　實　父　能　美許登
*はそばの・乃　母の命　波　播　蘇　葉　乃　母　能　美己等

一體自分のこの身は、父や母が並々に思つてゐる子であらうか、一通りならず眞心を盡して、育て上げた立派な男であるに依つて一生を無駄に過ごしてはいけないことだ。武士の家に生れた子として恥づかしからぬ様に、弓をふりたて、矢を取り持つて、非常に遠い處をも射通し、劍や太刀を腰に佩いて、幾つも重つた峰々を打ち越えて、御上の任じ給うた御精神に背かないやうに、後の御代〳〵まで永く語り傳へられる程の名を擧げなくてはならないことだ。

立派な男は、宜しく自分の名を擧ぐべきである、後の子孫の聞き繼ぐべき人も語り傳へて行つて、長くその名が傳はつて行くやうに。

おほろかに　おろそかにといふこと。

ますらをや…　憶良の歌の「をのこやも空しかるべき」を取つたのである。

投矢毛知　（ナグヤモチ（舊）　ナゲヤモチ（新）　投矢は遠くへ投げる矢のこと。

さし任くる　さしは接頭語で、さし遣はすといふに同じ。

情不障　（ココロヤハラズ（考）　ココロサヤラズ（古・略・新）　この句の上に脱句あるか（新）

後代乃　（ノチノヨノ（舊）　ノチノヨニ（新）

*あしびきの　八峰踏み越え　安之比奇能　八峰　布　美　越
さし任くる　心さやらず　左之（注）麻久流　情　不　障
後の代に・乃　後の代に　後　代　爾
語りつぐべく　語りつぐがね　可多利都具倍久　可多里都具我禰
名を立つべしも　名をし立つべし　名乎多都倍志母　名乎之　立　倍之

反歌

丈夫は　丈夫の　丈　夫　能
名を後の代に　後の代に　名　後　代　爾
聞きつぐ人も　聞きつぐ人も　聞　繼　人　毛

立派な男は、宜しく自分の名を擧ぐべきである、後の子孫の聞き繼ぐべき人も語り傳へて行つて、長くその名が傳はつて行くやうに。

詠霍公鳥時花謌一首并短歌

左註に「右二十日雖レ未レ及レ時依レ興豫作也」とある。二十日とは天平勝寶二年三月の二十日で、矢張り大伴家持の作である。

萎えうらぶれ　弱り衰へること。
有爭波之爾　（アラソフハシニ（舊・略））（アリクルハシニ（宣・古・新））　有り來るほどにの意。
許能久禮罷　（コノクレノ（代・古・新））（コノクレヤミ（考・略））
よごもりに　夜籠りにで、曉深くの意。
從古昔　（ムカシヨリ（考・新））（イニシヘユ（略・古））（イニシヘヨ（新））
うつし眞子かも　うつしは現（ウツシ）で、本當のとの意。眞は接頭語で單に子といふことをほめていつたのである。この句の上に二句脫か（新）

畫はしめらに　畫はしみらにと同じく、終日の意。
何如　（イカガ（考・略））（イカデ（古））（ナドカ（新））
見らくし　しは强辭。見らくは見るの加行延言。

時毎に　（時）毎
八千種に　（八千種）爾
鳴く鳥の　（喧）鳥乃
聲も　音毛
耳に聞き　耳爾聞
目に見るごとに　眼爾視其等爾
萎えうらぶれ　之奈要宇良夫禮
有り來るはしに　有（爭波之爾）
四月し立てば　四月之立者
鳴く時鳥　鳴霍公鳥
語り繼ぎつる　可多理都藝都流
うつし眞子かも　宇都之眞子可母
花橘を　花橘乎
珠貫くまでに　珠貫（流泥爾）
古へゆ　古者
從　可
欲　其母理爾
許能久禮罷
木のくれの　四
四　有
偲びつつ　之努比都追
うち歎き　宇知歎
鶯の　鶯之
蒲　蒲
菖蒲花　菖蒲花
少女等が　嬬良我
嬬　良
赤根刺　赤根
安之比奇之　安
夜干玉の　夜干玉
曉の　曉
往き還り　往　還
いかで飽きたらむ　何如將飽　足

畫はしめらに　畫波之賣良爾
八峰飛び越え　八丘飛超
夜はすがらに　夜者須我良爾
月に向ひて　月爾向而
鳴きとよむれど　喧等余牟禮杼

反歌二首

時毎に　（時）毎
咲く花を　咲花乎
見らくし善しも　見良久之余志母

いやめづらしく　彌米頭良之久
折りも折らずも　折毛不折毛

春夏秋冬の四季折々につけて、いよ〳〵目立つて面白く草や木の花がいろ〳〵に咲き、鳴く鳥の鳴き聲もさま〴〵に變ることだ。その鳥や花の音色を耳に聞いたり、目で見たりする度毎に、非常に感じて嘆息を吐いたり、或は弱りきつてしよんぼりとして、時鳥の事を思ひながらやつて來るほどに、だん〳〵若葉が繁つて木蔭が暗くなる四月がやつて來ると、また明けきらない夜の中から鳴く時鳥だ。あれは昔から語り傳へてゐる鶯の本當の子であるか知らん。さうして菖蒲や橘の花をば、少女たちが藥玉に挿すころまで、晝は一日中幾重にも重り合つた峰々を飛び越えて歩き、夜は夜通し明け方の月に向つて往つたり戻つたりして、あたりをゆり動かして鳴くことではあるが、何うしてこれで飽くことであらうか。

四季折々毎に目立つて面白く咲く花をば、折つて手に取るにしても、折らずに梢にある儘にしても、眺めるといふことは氣持よいものだ。

年のはに
毎年々々の意。來鳴くものゆゑ、のゆゑ來て鳴くものであるのにの意。
之努波久
（シヌバク（舊）シヌバユ（新））
あはぬ
聞かぬの意

（　）の中
かぐはしきにかかる序である。

香細吉
（カヲヨシミ（舊）カグハシキ（略・古・新））
於夜能御言乎
（オヤノミコトヲ（代・新）オヤノミコト（考・略・古））
おやは母親のみをさすこともある。まねく多くの意。

たをり
峠をさしていふ。

安けく
安くの加行延言。

奈呉
越中國射水郡に在る浦の名。

（　）の中
見がほしにかかる序である。見かほしは見度いの意。

松柏の
漢語から來た語で、松柏が幾久しく青々と榮えてゐるやうにの意。

いまさね
ねは希望を表はす助辭。

君
矢張り母君をいふ。

年のはに　來鳴くものゆゑ　聞けば偲ばゆ
毎年　來鳴　毛能由惠　聞　婆之努波久

時鳥　あはぬ日を多み
霍公鳥　不相日乎於保美

爲家婦贈在京尊母所誂作歌一首并短歌

この歌は、大伴家持がその妻坂上大孃に代つて、奈良の京に留つてゐる尊母（坂上郎女のことで、家持の叔母に當り、又姑に當る）に贈るために作つた歌である。家持の妻は、上の潜鸕歌を作つた頃は未だ京に在つたやうだが、この歌を作つた頃は、家持卿の任國越前に下つてゐたものらしい。

年のはに　來鳴くものゆゑ　聞けば偲ばゆ
毎年　來喧　毛能由惠　聞　婆之努波久

時鳥　あはぬ日を多み
霍公鳥　不相日乎於保美

毎年々々やつて來て鳴くものではあるが、時鳥の聲を聞くと戀しくなることだ、自分がその鳴く聲を聞かない日が多いために。

時鳥　來鳴く五月に　咲き匂ふ　橘の
霍公鳥　來喧　五月爾　咲匂布　橘乃

花　かぐはしき　朝よひに　聞かぬ日まねく
花　香細吉　朝暮爾　不聞日麻祢久

天ざかる　鄙に　し居れば
安麻射可流　夷爾之居者

時鳥がやつて來て鳴く五月に、咲き匂ふ橘の花ではないが、お懷しいお母樣であるものを、朝晩毎にお噂も聞かない日が多く、遠く離れた地方のこの田舍にゐますので、山の峠に立つてゐる雲を遠くから見て、それよりもずつと彼方に居られることだと、嘆いて居る心持が安らかではなく、又お慕ひ申す心中が苦しいので、この奈呉の浦の海人が水に潜つて採るといふ玉のやうに、何時でも見てゐたいお顏を、ぢかに向ひ合つてお目にかかる時までは、松や柏が幾久しく青々としてゐるやうに榮えていらつしやい、尊いお母樣よ。

あしびきの　山のたをりに　立つ雲を　余所のみ見つつ
安之比奇乃　山乃多乎里爾　立雲乎　余曾能未見都追

嘆くそら　安けく無くに　思ふそら　苦しきものを
嘆苑良　安家久奈久爾　思苑良　苦伎毛能乎

（奈呉の海女の　白珠の）　たゞ向ひ　見がほし君を
奈呉乃海部之　白珠乃　直向　見我保之君乎

松柏の　いまさねが下の　天雲の　遠き我が君
松柏　伊麻左祢我下乃　天雲乃　遠伎我君

尊き我が君
安我吉君

反歌一首

白珠の　見がほし君を
白玉乃　見我保之君乎

白珠のやうに何時も見てゐたい貴方と

伊家流等毛奈之（イケルトモナシ（舊）イケリトモナシ（新））

背子　池主をさす。

思暢（オモヘカモ（代）オモヒヌベ（考）オモヒノベ（略・古・新））

見奈疑之山爾（ミナギノヤマニ（代）ミナギシヤマニ（略・古・新））

春之過者（ハルノスグレバ（考・古）ハルシスグレバ（略・新））

礪波山　越中國礪波郡に在る白山の一支峰である。

安寢不令宿（ヤスイネサセデ（代・考）ヤスイネシメデ（代）ヤスイシナサヌ（略）ヤスイネシメズ（新））

見ず久に（不見久爾）　夷にし居れば（夷爾之乎禮婆）
生けりともなし（伊家流等毛奈之）

久しくお逢ひしないでこの田舎にゐると、まるで生きてゐるやうな元氣もありません。

四月三日贈越前判官大伴宿禰池主霍公鳥歌（不勝感舊之意述懷一首并短歌）

大伴池主は卷十八に度々出てゐた、地方落ちをしてゐる家持には心の友でもある人であらう。この歌は、大伴家持が昔懐しさに堪へられず、池主に作つて贈つた歌である。

我が背子と（我背子等）　手携はりて（携而）
和我勢故等　手

明け來れば（明來者）　出で立ち向ひ（出立向）
曉來者　出立向

夕されば（夕去者）　振りさけ見つつ（振放見都追）
暮去者　振放見都追

思の（思念）　見和ぎし山に（見和奈疑之山爾）
念　見奈疑之山爾

八つ峰には（八峰者）　霞たなびき（霞多奈婢伎）
八峰者　霞多奈婢伎

谷邊には（谷邊者）　椿花咲き（椿花咲伎）
谿邊者　海石榴花咲伎

貴方と手を取り合つて、夜が明けると表へ出てそちらを向いて見、日の暮れになると遙かに仰ぎ見ながら、見て心を宥めてゐたあの山の方の、幾重にも重りあつた峰々には霞がたなびき、谷のあたりには椿が咲いて、何となく物悲しい。かうして春が去つて終つたので、時鳥が甚くつゞけざまに鳴いてゐる。それをたつた一人で聞いてゐると寂しいことだ。貴方と私が中に隔ててゐるあの礪波山をば、時鳥よ飛び越えて行つて、朝になつたらお宅の松の枝に止り、日暮れになつたら月に向つて菖蒲を藥珠に貫く五月の端午の節句まで、あたりを搖り動かして鳴いて、安々と寢させないで、貴方をば私と同じやうに煩悶させてくれ。

うら悲し（宇良悲）　春し過ぐれば（春之過者）
時鳥（時鳥）　いやしき鳴きぬ（伊夜之伎鳴奴）
獨りのみ（獨耳）　聞けばさぶしも（聞婆佐夫之毛）
君と吾（君與吾）　隔てて戀ふる（隔而戀流）
礪波山（礪波山）　飛び越え行きて（飛越去而）
明け立たば（明立者）　松の枝に（松之枝爾）
夕されば（夕去者）　あやめぐさ（菖蒲）
あやめぐさ　珠貫くまでに（珠貫麻泥爾）
鳴きとよめ（鳴等余米）　安しねしめず（安寢不令）
君を惱ませ（君乎奈夜麻勢）

反歌

吾耳
（ワレノミ（考・略）
ワレノミシ（古・新）
丹生の山
越前國丹生郡にあつて、今は鬼が嶽といふ。
伊去鳴爾毛
（イユキナクニモ（考）
イユキナケヤモ（古）
イユキナケナモ（略・新）

吾のみし　聞けばさぶしも
吾　耳　聞　婆不怜毛
時鳥　丹生の山邊に
霍公鳥　丹生之山邊爾
い行き鳴けなも
伊去鳴爾毛
時鳥　夜鳴きをしつつ
霍公鳥　夜喧乎爲管
我が背子を　安寢しなすな
我　世兒乎　安宿勿令寢
ゆめ心あれ
由米情在

たつた一人で聞いてゐるのは面白くもないことだ。時鳥よ、あの方がいらつしやる丹生山のあたりに飛んで行つて鳴いて呉れ。

時鳥よ、夜鳴きをしながら、あの方をばやす〳〵と寢させないでくれ、何うか氣をつけてゐておくれ。

不飽感霍公鳥之情述懷作歌一首幷短歌

この歌は、大伴家持が時鳥の聲に、心を動かされて思を述べた歌である。

春過ぎて　夏來向へば
春　過　而　夏來向者
*あしびきの　山をとよめ
足　檜木乃　山呼等余米

春が通り過ぎて夏がやつて來ると、山を搖り動かして夜中に鳴く時鳥よ、その初聲を開くと懷かしく思はれる。菖

夏來向者
（ナツコムカヘバ（代）
ナツキマケレバ（考）
ナツキムカヘバ（略・古・新）
可頭良沼久麻而爾
（カヅラ沼クマデニ（代）
カヅラクマデニ（略・古・新）

さ夜中に　鳴く時鳥
在夜中爾　鳴　霍公鳥
初聲を　聞けば懷かし
始　音　乎　聞　婆奈都可之
あやめぐさ　花橘を
菖　蒲　花　橘　乎
貫き交へ　蘰くまでに
貫　交　可頭良沼久麻而爾
里とよめ　鳴き渡れども
里　響　喧　渡禮騰母
尚し偲ばゆ
尚之奴波由

蒲や橘の花を挿し雜ぜて頭に卷きつける節句まで、里をゆすつて鳴きつゞけて居るが、それでもまだ〳〵滿足しないで戀しく思はれることだ。

反歌

さ夜更けて　曉月に
左夜深而　曉　月　爾
影見えて　鳴く時鳥
影所見而　喧　霍公鳥
聞けば懷かし
聞　者夏　借

夜が更けて夜明け方の月に影をあらはして鳴く時鳥の聲を聞くと懷かしいことだ。

空蟬 人生といふ意。

春まけて まけは待つと同じ意の動詞で、ただ語尾だけが轉換したのである。春かたまけて、夕かたまけても同じ例である。

思繁波 〔オモヒシゲケバ(考・略・新)〕〔オモヒシゲクバ(古)〕

詠山振花歌一首幷短歌

空蟬は 宇都 世美 波
戀を繁みと 戀乎 繁美登
春まけて 春 麻 氣 氏
思繁けば 念 繁 波
引攀ぢて 引 攀 而
折りも折らずも 折 毛 不 折 毛
見る毎に 毎 見
心和ぎむと 情 奈 疑 牟 等
繁山の 繁 山 之
谷邊に生ふる 谿 敝 爾 生 流
山吹を 山 振 乎
宿に引植ゑて 屋戸爾 引 植 而
朝露に 朝 露 爾
匂へる花を 仁保 敝 流 花 乎
見る毎に 毎 見
思は止まず 念 者 不 止
戀し繁しも 戀 志 繁 母

この人生は、戀ひ焦れることが甚しいものだといふ通り、待つてゐる春が來ていよ〳〵思ふことが酷かつたならば、引攀ぢて折るにしても折らないにしても、見さへしたらその度毎に心が安まるだらうと思つて、木の繁つた谷のあたりに生えてゐる山吹をば、引いて來て屋敷内に植ゑて、咲き出して朝露にほのめいてゐるのを見ると、その度毎に人のことが止まる所がいよ〳〵思ひ出されて甚く焦れることだ。

植ゑては はは清音で、意味のない助詞。

木のくれ 木の繁みが下の暗いところ。

布勢の湖 越中國氷見郡にあつて、今は細い水路で富山灣と續いてゐる。當時の乎布の浦・垂姫崎などは今は平地となつてゐる。

反詠

山吹を 山 吹 乎
宿に植ゑては 屋戸爾 植 氐 波
見る毎に 見 其等 爾
思は止まず 念 者 不 止
戀こそまされ 戀 許 曾 益 禮

山吹を屋敷に植ゑてからはそれを見てゐると、思ふことは止まないで、戀の方が募つて來たことだ。

六日遊覽布勢水海作歌一首幷短歌

この歌の作者は大伴家持である。六日は天平勝寶三年四月の六日である。

思ふどち 念 度 知
ますら男の 丈 夫 能
木のくれの 許 能 久 禮
繁き思を 繁 思 乎
見あきらめ 見 明 良 米
心やらむと 情 也 良 牟 等
布勢の湖に 布 勢 乃 海 爾
小舟連なめ 小 船 都 良 奈 米
まかいかき 偵 可 伊 可 氣
い漕ぎ廻れば 伊 許 藝 米 異 禮 婆

氣の合つた同志の立派な男が、木の下暗の茂り合つたやうなふさぎ込んだ氣分を、その景色を十分に眺めて晴らさうとして、布勢の湖上に小舟を並べて、それに梶をつけて漕ぎ廻つて行くと、乎布の浦の方には霞がかかつて居り、

黄色時爾（モミヅルトキニ（考・新）／モミヂノトキニ（略）／ニホヘルトキニ（古））

あり通ふ　ありは繼續をあらはす語で、始終通ひつめるといふ意。

乎布の浦に　乎布乃浦爾
霞た靡き　霞多奈比伎
垂姫に　垂姫爾
藤浪咲きて　藤浪咲而
濱清く　濱淨久
白浪さわぎ　白浪左和伎
しく〳〵に　及及爾
戀はまされど　戀波末佐禮杼
今日のみに　今日耳
飽き足らめやも　飽足米夜母
斯くしこそ　如是己曾
いや年のはに　彌年能波爾
春花の　春花之
繁き盛りに　繁盛爾
秋の葉の　秋葉能
もみづる時に　黄色時爾
あり通ひ　安里通比
見つつ偲ばめ　見都追思努波米
この布勢の湖を　此布勢能海乎

反歌

垂姫の崎には藤浪が咲いてゐて、濱邊はさつぱりとして白い浪が音を立てて居り、その浪が寄せては返すやうに、いや繁く思はまさるけれども、今日ばかりで滿足し得ようか。かういふ風にして、だん〳〵毎年々々春の花が一杯咲いてゐる花時に、秋の黄葉が色づいてゐる頃に、始終通ひつめてこの景色を眺めて焦れてゐよう、この布勢の湖の景色をば。

年に　毎年〳〵の意。毎日を日にといふに同じ。

夷としあれば　夷にあればに同じ。しは強辭。

藤浪の　藤奈美能
花の盛りに　花盛爾
斯くしこそ　如此許曾
浦漕ぎ廻みつつ　浦己藝廻都追
年に偲ばめ　年爾之努波米

藤の花が咲いてゐる眞盛りに、かうして何日も岸邊を漕ぎ廻つて、これから毎年〳〵この景色に焦れることであらう。

贈水烏越前判官大伴宿禰池主歌一首幷

短歌

作者は大伴家持である。左註に「右九日附レ使贈レ之」とあつて、天平勝寶二年四月の九日に越中の國府から使を立てて越前の國府なる池主の許に鵜に添へてこの歌を贈つたのである。

天ざかる　天離
夷としあれば　夷等之在者
そこもここも　彼所此間毛
同じ心ぞ　同許己呂曾
家離り　離家
年の經ぬれば　等之乃經去者
現身は　宇都勢美波
物思ひ繁し　物念之氣思
そこ故に　曾許由惠爾
心なぐさに　情奈具左爾

地方の田舍のことであるから、其處も此處も同じやうな心持ちである。家を離れて來てから最早幾年にもなつたので、生きてゐるこの身は、物思ひがだん〳〵募つて來る。それだから心を慰めるために、私は時鳥の鳴く初聲を聞

あへ貫き　交へ貫くこと。
立而　（タテテ（舊・新）／タチテ（古））
遊波之母　（タハルルハシモ（代）／アソベレバシモ（考）／アソバハシモ（略）／アソバタヨシモ（古・新））
叔羅川　越前國府武生の傍を流れる、今の日野川のことであらう。
小網　小魚を掬ふ網で、後は狹く前は廣く箕のやうになつてゐる。
月爾日爾　（ツキニヒニ（略・古）／アサニヒニ（新））
背子　池主をさす。
はしき　愛しいこと。懷しいこと。

時鳥　霍公鳥
橘の　橘
蘰き　可頭良伎
丈夫　麻須良乎
叔羅川　叔羅河
平瀬に　平瀨爾
早瀬に　早湍爾
朝に日に　朝爾日爾
はしき我が背子　波之伎和我勢故

反歌

叔羅川　叔羅河
瀬を尋ねつつ　湍乎尋都追

鳴く初聲を　喧始音乎
珠にあへ貫き　珠爾安倍貫
遊ばくよしも　遊波久之母
伴へ立てて　等毛奈倍立而
なづさひ上り　奈頭左比泝
小網さし渡し　左泥刺渡
鵜をかづきつつ　水鳥乎潛都追
しかし遊ばね　之可志安蘇婆禰

貴方は、叔羅川の瀬を慕うて上りながら、きながら、橘の青い珠に挿し雜ぜて頭にくる〳〵巻きつけて遊んで歩くことは如何にもよい氣持ちである。貴方も立派な男たちを引伴れて御出かけになつて、叔羅川を川につかりながら遡つて、水の緩かな瀬では手網をさし渡し、流れの早い瀬ではこの鵜を潛らせながら毎日〳〵さうして遊んでいらつしやい、わが懷しい男よ。

我が背子は　和我勢故波
心なぐさに　情奈具左爾

鵜川立たさね　宇河波多多佐禰

ら鵜の漁りを催していらつしやい、心を慰めるために。

詠霍公鳥并藤花歌一首并短歌

この歌も家持の作で、左註に「同九日作之」とあつて、同じく四月九日の作である。

（桃）の花　桃花
紅に　紅色爾
匂ひたる　保比多流
面わの内に　面輪能宇知爾
青柳の　青柳乃
細き眉ねを　細眉根乎
笑みまがり　笑麻我理
朝影見つつ　朝影見都追
少女らが　嬬良我
手に取り持たる　手爾取持有
鏡（鏡）に　鏡爾
まそ　眞十
二上山に　二上山爾
木のくれの　木乃久禮乃
繁き谷邊を　繁溪邊乎

桃の花のやうな紅色にほんのりと色づいた顏の上に、青柳の葉のやうな美しい細い眉毛を、ほれぼれとほくそ笑みして朝の姿を見入りながら、少女たちが手に持つてゐる鏡の蓋といふ言葉を持つてゐる二上山で、木の下闇の茂つた谷の邊をば鳴き搖がせて朝飛んで廻り、夕暮の月が微かにさしてゐる野邊にずつと遠く鳴く時鳥が、つつと潛ら

鵜川立つ　鵜を使つて漁獵をすること。

（　）の中　二上山にかかる序。

細眉根乎　（ホソキマユネヲ（考・略）／クハシマヨネヲ（古）／ホソキマヨネヲ（新））
眉ねのねには意味はない。
笑みまがり　首を傾け、ほくそ笑みして感じ入つて居る姿態。
朝影　朝の容姿。古くは容姿のことをかげといつてゐたであらう。
二上山　越中國氷見郡に在つて高岡市の北方に當る。

呼等米尒
{ヨブラメニ(代)
{ヨビトヨメ(考・略・古・新)

立ちくくと
立ち潜らうとしてとの意。

染婆染等母
{ソマバソムトモ(舊)
{シマバシムトモ(古・新)

鳴羽觸爾毛
{ナクハブレニモ(考)
{ナクハブリニモ(略・古・新)

呼びとよめ　朝飛び渡り
呼等米尒　旦飛渡

夕月夜　かそけき野邊に
暮月夜　可蘇氣伎野邊

はろ〴〵に　鳴く時鳥
遙々爾　喧霍公鳥

立ちくくと　羽觸に散らす
立久久等　羽觸爾知良須

藤浪の　花懷かしみ
藤浪乃　花奈都可之美

引攀ぢて　袖に扱きれつ
引攀而　袖爾古伎禮都

沁まば沁むとも
染婆染等母

反歌

時鳥　鳴く羽觸にも
霍公鳥　鳴羽觸爾母

散りにけり　盛り過ぐらし
落爾家利　盛過良志

藤浪の花
藤奈美能花

うして羽に觸れて散らす藤の花の懷かしさに、枝を引寄せて折つて、衣の袖にしごき入れたことだ、色が沁みこむなら沁みこんでも構はないことだ。

藤の花は、時鳥の鳴く羽が觸れたばかりでも散つて終つたことだ、もう藤の花の盛りも過ぎてゐるらしい。

背子
廣繩をさす。

垣つの谷
邸内に在る谷である。

榛
今のハンノキをいふ。

花に散る
あだ(無駄に)に散ることをいふ。

二十二日贈判官久米朝臣廣繩霍公鳥歌

怨恨歌一首幷短歌

この歌は、四月二十二日に大伴家持が久米廣繩に贈つた、時鳥を怨んだ歌である。廣繩は武内宿禰五世の孫稻目宿禰の後であつて、當時家持の部下として掾官を務めた人であるが、委しい傳記は不明である。

此處にして　そがひに見ゆる
此間爾之氐　曾我比爾所見

我が背子が　垣つの谷に
和我勢故我　垣都能谿爾

明けされば　榛のさ枝に
安氣左禮婆　榛之挾枝爾

夕されば　藤の繁みに
暮左禮婆　藤之繁美爾

はろ〴〵に　鳴く時鳥
遙遙爾　鳴霍公鳥

我が宿の　植ゑ木橘
吾屋戸能　殖木橘

花に散る　時をまだしみ
花爾知流　時乎麻多之美

此處から見ると反對に向う側になつて見える貴方のお屋敷の中の谷間に、朝になるとはんの木の枝で鳴き、夕方になると藤の花の茂つたところで鳴いてゐる聲がずつと遠く聞える時鳥が、私の屋敷内の植ゑた橘が徒らに散る時分を、まだ早がつて鳴かないことだが、それは怨みには思はない。けれども谷に片寄つて住まつていらつしやる貴方

來鳴かなく
來鳴かぬの延言。
谷かたづきて
谷に寄りついての意。
家居有
〔イヘヰセル（考）
イヘヲレル（略・古・新）〕

來鳴かなく　伎奈加奈久
そこは怨みず　曾許波不怨
然れども　之可禮杼毛
谷かたづきて　谷可多頭伎氏
家居れる　家居有
君が聞きつつ　君之聞都都
告げなくも憂し　追氣奈久毛宇之

反歌一首

わがここだ　吾幾許
待てど來鳴かず　麻氏騰來不鳴
時鳥　霍公鳥
獨聞きつつ　比等里聞都追
告げぬ君かも　不告君可母

が、その時鳥の鳴き聲を聞き知りながら知らせて下さらないのは辛いことです。

私がこんなに甚く待つてゐても來て鳴かない時鳥を、自分獨りで聞いて居りながら知らせて下さらない貴方よ。

詠霍公鳥歌一首幷短歌

この歌は、家持から贈られた右の歌に對して、久米廣繩が答へた歌である。左註に「右二十三日掾久米朝臣廣繩和」とある。

谷近く　多爾知可久
家は居れども　伊敝波乎禮騰母
木高くて　許太可久氐
里はあれども　佐刀波安禮騰母
時鳥　保登等藝須
未だ來鳴かず　伊麻太伎鳴加受
鳴く聲を　奈久許惠乎
聞かまく欲りと　伎可麻久保里登
朝には　安志太爾波
門に出で立ち　可度爾伊氐多知
夕べには　由布敝爾波
谷を見渡し　多爾乎美和多之
戀ふれども　古布禮騰毛
一聲だにも　比等己惠太爾母
未だ聞えず　伊麻太伎己要受

谷に近く住つてはゐるけれども、又私の住んでゐる里は木高くはあるけれども、時鳥は未だやつて來ては鳴かない。その鳴く聲を聞き度いと思つて、朝には表に出て立ち、夕方には谷を見渡して、今にも來て鳴くかと焦れてはゐるけれども、たつた一聲でも未だ聞かないことだ。

反歌

藤浪の　敷治奈美乃
茂りは過ぎて　志氣里波須疑奴
*あしびきの　安志比紀乃
山時鳥　夜麻保登等藝須

藤の花盛りはもう過ぎて終つたが、山の時鳥は何うしてやつて來て鳴かないでせうか。

何か來鳴かぬ　奈騰可伎奈賀奴

追和處女墓歌一首并短歌

左註に「右五月六日依レ興大伴宿禰家持作レ之」とあつて、處女の墓の歌とは、巻九なる過二芦屋處女墓一時作歌と見二菟原處女墓一歌とであつて、家持がそれに追和して作つたのがこの歌である。

古へに　有りけるわざの　奇はしき　事と言ひつぐ　宇奈比壯夫の　名を爭ふと　命も捨てて　妻問しける　聞けば悲しさ

古爾　有家流和射乃　奇久須婆之伎　事跡言繼　宇奈比壯夫乃　名乎競爭登　命毛須底氐　妻問爲家留　聞者悲左

うつせみの　*宇都勢美能　たまきはる　玉乃壽毛須底氐　相きほひ　相爭爾　少女らが　嬬等之

ずつと遠い昔にあつた不思議な出來事であると言ひ傳へてゐる、茅沼壯夫と菟奈比壯夫とが、現世に於ける名譽にかけて妻を爭ふとて、命さへも捨てて競爭して求婚して居つたことを聞くと悲しいことである。その娘が春の花のやうににこやかに笑み榮え、秋の黃葉のやうに華かに艷々としてゐた大事の體でさへも惜しまず、その二人の立派

ありけるわざ　わざは事をいふ。

奇はしき　くすしきで、不思議な奇態なの意。

相爭爾　アラソヒニ（代・考）／アヒトモニ（略・古）／アヒキホヒ（新）

少女らが　らには意味はない。

春花の　爾保え榮えて　秋の葉の　匂ひに照れる　身の盛すら　惜しらしき　言いたはしみ　申し別れて　海邊に出で立ち　滿ち來る潮の　靡く珠藻の　惜しき命を　過ぎましにけれ　此處と定めて　聞き繼ぐ人も

春花乃　爾保え榮而　秋葉乃　匂爾照有　身之盛尚　惜良思吉　言痛之　語勞美　申別而　海邊爾出立　滿來潮之　靡珠藻乃　惜命乎　過麻之爾家禮　此間定而　聞繼人毛

丈夫の　大夫之　言ひつぐ　言繼　名を立てて　名乎立而　父母に　父母爾　知らえぬ　所知　家さかり　家離　朝宵に　朝暮爾　八重浪に　八隔浪爾　節の間も　節間毛　露霜の　露霜之　消ぬがに　消乎　奥墓を　奥墓乎　後の代の　後代之

丈夫之　言繼名乎立而　父母爾　所知不得　家離　朝暮爾　八隔浪爾　節間毛　露霜之　消乎　奥墓乎　後代之

爾太要盛而　シタエサカエテ（考）／シナエサカエテ（略）／ニホエサカエテ（古・新）

惜身乃壯尚　ヲシキミノ　サカラフスラニ（考）／アタラミノ　サカリヲスラニ（略・古）／アタラシキ　ミノサカリスラ（新）

語勞美　コトイタハシミ（考・新）／コトイトホシミ（略・古）

海邊爾出立　ヘタニイデタチ（考）／ウナヒニイデタチ（略・新）／ウミベニデタチ（古）

節の間　束の間といふ意。

奥墓乎　オクツキヲ（代・略・古・新）／オキツキヲ（考）

此間　ココニ（代・考）／ココト（略・古・新）

乎等女等之（ヲトメラガ（舊）／ヲトメラノ（新））

靡家良思母（ナビキケラシモ（舊）／ナビケルラシモ（新））

いや遠に（伊也遠爾）偲びにせよと（思努比爾勢餘等）
黄楊（つげ）小櫛（黄楊小櫛）しか挿しけらし（之賀左志家良之）
生ひて靡けり（生而靡有）

少女（乎等女等之）らが後の標（しるし）と（後能表跡）
黄楊（黄楊小櫛）小櫛生ひ代り生ひて（生更生而）
靡けるらしも（靡家良思母）

挽歌一首幷ニ短歌

この歌は、五月二十七日に、大伴家持が右大臣藤原豐成の二郎君が母の喪にあつてゐるのを弔つた歌である。

天地の初めの時ゆ（天地之初時從）
うつそみの八十伴の男は（宇都曾美能八十伴男者）

少女が死んだ後、何時〳〵までもの記念となつて、黄楊の櫛が枯れてもまた生え代り〳〵して、枝があんなに風に靡くやうになつたに相違ない。

天と地が開けてこのかた、現世にゐる澤山の家來たちは、天子様に服從するものと定まつた役人であるから、天子

まつろふ（服從すること。）

定有（サダメアル（考）／サダメタル（略・古）／サダマレル（新））

山川阻（ヤマカハヘナリ（考・略）／ヤマカハヘダテ（新））

正不遇（タダニアハズ（舊）／タダニアハヌ（古ニ新））

嘆息伊麻須（ナゲキゾイマス（考）／ナゲカヒイマス（略・古）／ナゲキイマスト（新））

大君に（大王爾）まつろふものと（麻都呂布物跡）
定まれる（定有）司にしあれば（つかさ官爾之在者）
大君の（天皇之）御言かしこみ（みこと命恐）
夷離（ざかる）（夷放）國を治むと（國乎治等）
*あしびきの（足日木）山川隔て（山河阻）
風雲に（風雲爾）言は通へど（言者雖通）
たゞに遇はぬ（正不遇）日の重なれば（日之累者）
思ひ戀ひ（思戀）息づき居るに（氣衝居爾）
*玉桙の（玉桙之）道來る人の（道來人之）
傳言に（傳言爾）吾に語らく（吾爾語良久）
はしきよし（波之伎餘之）君はこの頃（君者比來）
うら寂し（宇良佐備氏）嘆げかひいます（嘆息伊麻須）

様の仰せを畏まつて、遠い地方の田舍を治めようとして、故郷とは山川を間に隔てて、風や雲に托して便りは通してゐるけれども、ぢかに逢はない日が重つて來たので、思ひ焦れて溜息をついてゐると、道をやつて來る人が世の噂さ話として、私に話したことには、いとしいあの方は、この頃しよんぼりと嘆いておいでになる。ああこの世界が嫌で辛いことだ。咲く花さへも時が來るとその色が褪せて終ふ。この人生も無常であることだ。けれどもお母様が時もあらうのに、何故かいくら見ても見飽かない。壽命のまだ惜しい盛りに、立つてゐた霧が消えて終つたやう

世の中の　憂けく辛けく　時に移ろふ　常無くありけり　御母の命

（世の間之　厭家口都良家苦　時爾宇都呂布　無常阿里家利　御母之命）

咲く花も　時しは有らむを　見れども飽かぬ　御母の命

（開花毛　時之波将有乎　見禮杼母不飽　御母之命）

うつせみも　惜しき盛りに　失せぬる如く　立つ霧の　消え行くがごと

（宇都勢美毛　惜盛爾　失如久　立霧之　消去如）

何しかも　玉の緒の　絶えて逝く　水の泡の　逝きて来ぬれば

（何如可毛　玉緒之　絶而逝　水泡之　逝而来礼婆）

＊垂乳根の　母が形見と　朝夕に　撫でつつ居れど　我が欲りし

（＊足千根之　母我形見跡　朝夕　撫乍居雖　我欲）

＊まそ鏡　見れども飽かず　何しかも　もとな逝きし　母の命

（＊眞鏡　見雖不飽　何如可毛　本名逝之　母命）

玉の緒の　絶えにしかば　為むすべの　たどきを知らに　白栲の

（珠緒之　絶西可婆　為牟為便　田時乎不知　白栲）

袖指し交へて　雲隠り　去にし妹には　逢はむよしもが

（袖指易而　雲隠　去之妹庭　相依母我）

玉藻なす　靡き寝し妹　浦細み　妹が待つらむ　夜の更けゆけば

（玉藻成　靡寐之妹　浦細　妹待良武　夜乃深去者）

おきつ藻の　名張の山に　妹を置きて　山道を我が来れば

（奥津藻之　名張乃山爾　妹乎置而　山道乎我来者）

笹が根の　その山道だに　一人行けば　淋しくあるを

（笹葉之　其山道谷　一人行者　喪悲有乎）

ましてやも　妹と二人　越えしその　山を今日だに　我が越えゆけば

（益而哉　妹与二人　越之其　山乎今日谷　我越行者）

形見こそ　今は手にすれ　我妹子と　二人我が寝し　枕付く

（形見社　今者手尓為礼）

妻屋さへ　荒れて住まねば　我妹子が　入りし床には　蜘蛛の巣

（妻屋左倍　荒而住者）

我妹子が　脱ぎし衣を　取り装ひ　我が着て見れば　ぬばたまの

（我妹子之　脱衣乎　取装　我着見者）

夜床も　汝は　なほ　寒しもよ　我妹子が　肌触れし　衣ぞ

（夜床毛　汝者　猶　寒霜　我妹子之　肌触之　衣叙）

我妹子が　入りし床とは　思へども　入りて寝ねば　いや　増す

（我妹子之　入床跡者　雖思　入而寝者　弥　益）

嘆きを　何せむ　我妹子が　入りし床に　我が寝ねば　嘆きは

（嘆乎　何為　我妹子之　入床尓　我寝者　嘆者）

益さる　我妹子が　入りし床に　我が寝ねば　嘆きは

（益　我妹子之　入床尓　我寝者　嘆者）

益さる　我妹子が　入りし床に　我が寝ねば　嘆きは

（益　我妹子之　入床尓　我寝者　嘆者）

益さる　我妹子が　入りし床に　我が寝ねば　嘆きは

（益　我妹子之　入床尓　我寝者　嘆者）

益さる

（益）

時爾宇都呂布（トキニウツロフ（舊）　ツヒニウツロフ（新））

御母之命（ミオモノミコト（代・略・新）　ミハハノミコト（考・古・新））

おも　母の古語。ひろく乳を與へて養育の任に當る。

見禮杼母不飽（ミレドモアカズ（舊）　ミレドモアカヌ（新））

牛去如久（ウセユクゴトク（舊）　ウセヌルゴトク（新））

消去之如（ケヌルガゴトク（舊）　キエユクガゴト（新））

留不得常（トドメモエズト（舊）　トドメカネキト（古・新））

枉言哉（マガゴトヤ（考）　タハゴトヤ（略・古・新））

（）の中　遠音にかかる序。

相念吾者（アヒオモフワレハ（舊）　アヒモフワレハ（古・新））

おほづれを　弓弭の山の　梓弓　音にも聞きて　遠音にも　聞きつれば

（逆言乎　人之告都流　弓弭乃山乃　梓弓　音耳聞而　遠音耳　聞礼婆）

相念ふ吾は　遠音にも　聞きつれば　相念ふ吾は

（相念吾者　遠音耳　聞礼婆　相念吾者）

反歌二首

世の中の　常無き事は　人の告げつる　君が嘆くと　爪引くよとの

（世間之　無常事者　人之告都流　君之嘆跡　爪引夜音之）

聞けば悲しみ　音のみし泣かゆ　流るる涙

（聞者悲彌　音耳所泣　流涙）

遠い風の便りに貴方が嘆いて居られると聞いたので、貴方を思つてゐる私はまだ嘆いてばかり居ることだ。

この人間世界の無常なことはお知りだ

知るらむを　心盡すな
知良牟乎　情盡莫

丈夫にして
丈夫爾之氐

らうから、そんなに甚く心を痛めるな立派な男の身として。

從京師來贈歌一首幷短歌

左註に「右二首大伴氏坂上郎女賜女子大孃也」とあつて、京なる大伴郎女から、越中なる郎女の娘即ち家持の妻なる大孃に贈つて來た歌である。

わたづみの　神の命の
和多都民能　可味能　美許等乃

み櫛笥に　貯ひおきて
美久之宜爾　多久波比於伎氐

いつくとふ　珠に優りて
伊都久等布　多麻爾末佐里氐

思へりし　我が子にはあれど
於毛敝里之　安我故爾波安禮騰

うつせみの　世の理と
宇都世美之　與能　許等和利等

丈夫の　引きのまにまに
麻須良乎能　比伎能麻爾麻爾

*しなざかる　越路をさして
之奈謝可流　古之地乎左之氐

海のお神樣が、櫛笥に收めておいて大事にして居るといふ珠以上に、大事に思つてゐた私の子ではあるが、人間世界のこれも道理といふもので、立派な男の夫君が引伴れて行くに任せて、遠い田舍の越の國地方を指して別れて行かしてから、沖に立つ浪ではないが、美しい曲線の眉の樣子を、大きな船ではないが、ゆら〳〵と心を搖がせて、

貯ひおく
貯へおくこと。貯ふは古く四段活用の動詞であつた。

*はふつたの　別れにしより
波布都多能　和我禮爾之欲理

*沖つ波　撓を眉びき
於吉都奈美　等乎牟麻欲比伎

*大船の　ゆくら〳〵に
於保夫禰能　由久良由久良耳

面影に　もとな見えつつ
於毛可宜爾　毛得奈民延都都

斯く戀ひば　老いづく我が身
可久古非婆　意伊豆久安我未

蓋し逢へむかも
氣太志安倍牟可母

氣太志安倍牟可母
〔ケダシアヘムカモ（舊）
〔ケダシアヘジカモ（新）

古非之久志安良婆
〔コヒシクアラバ（舊）
〔コヒシトシラバ（新）

反歌一首

斯くばかり　戀ひしと知らば
可久婆可里　古非之久志安良婆

*まそ鏡　見ぬ日とも無く
末蘇可我彌　美奴比等吉奈久

有らましものを
安良麻之母能乎

幻に心許なく顯はれ見えながら、こんなに焦れてゐたなら、もう老年に近づいて來た私の身が、御身に逢ふまで或は辛抱して居られまいだらうと思ふことだ。

これほどに戀ひ焦れるものであると知つてゐたら、何日も〳〵見て、見ない時とてもなくあり度いものだ。

⑵

この歌は、藤原房前が三形沙彌に命じて作らしめた歌が傳唱されてゐたものをここに集錄したものである。

大殿の　この廻の　雪な踏みそね　雪な踏みそね
大殿之　此廻之　雪莫踏　雪莫踏曾禰

しばしばも　降らざる雪ぞ　降りし雪ぞ
數數毛　不零雪曾　零之雪曾

山のみに　不在
山耳爾

ゆめ寄るな　人や
由米緣勿　人哉

な踏みそね雪は　この廻の　雪な踏みそね
莫履禰雪者　此廻之　雪莫踏曾禰

反歌

ありつつも　この大殿の周りに、面白く降つた雪を踏んではいけないぞ。こんな雪は度々降るものではないぞ。これまで山にだけは何日も降つたが、こゝには珍らしく降つたのだ。人々よ、決して立寄つて踏み穢してはならないぞ。この清らかな雪を。

有都々毛　御見多麻波牟曾　母等保里能

目し給はむぞ　この廻の　雪な踏みそね
目　この廻の　雪な踏みそね

この儘に置いて、樂しくご覽遊ばす雪であるぞ、大殿の周りのこの雪を踏み穢してはならないぞ。

雪奈布美曾禰

ありつつも　その儘にしておいてもの意。

數毛（シバシシバモ（舊）／シマシマモ（新））

愛（ウルハシキ（舊）／ウツクシキ（舊・古・新））

妻離る　妻の死をいふ。

携手（タヅサヒテ（考）／テタヅサヒ（略・古）／タヅサハリ（新））

雖禱（ノメドモ（代）／イノレド（考・略・新）／ノメレド（古））

悲傷死妻歌一首并短歌

この歌は、作者不明で、左註に「右二首傳誦遊行女婦蒲生是也」とあつて、浮かれ女の傳誦してゐたのを、編者が輯錄したのである。

天地の　神は無かれや　うつくしき　我が妻離る
天地之　神者無可禮也　愛*妻　吾妻離流

光る神　鳴り　少女
光神　鳴

携はり　共に有らむと　思ひし心　違ひぬ
携手　共將有等　念之情　違奴

言はむ術　爲む術知らに　木綿だすき　肩に取りかけ
將言便　將作爲便不知爾　木綿手次　肩爾取掛

倭文幣を　手に取り持ちて　吾は祈れど　な離けそと　勿令離等
倭文幣乎　手爾取持而　和禮波雖禱

天地間を主宰し給ふ神様が無いからであらうか、可愛い自分の妻を亡くして終はれた。あの機織る娘と、何日までも手をつないで居ようと思つたら、豫想が外れて終つた。言ひやうも、する術も分らず、木綿の襷をかけ、倭文でこしらへた幣を手に持つて、何うか亡くして下されるなと神様に祈つたけれども、自分が手枕をして寢たあの娘の袖は、もう火葬の火に燒かれてあんなに空に雲となつてた靡いて終つたことだ。

卷きて寢し妹が袂は
卷而寢之妹之手本者
雲にたなびく
雲爾多奈妣久

寢爾等念氐之可毛
ウツツニト
オモヒテシカモ（舊）
ウツツニモ
イマモミテシカ（新）

大和
大和一國をさしていふ。

反歌一首

現（うつつ）に寢爾と思ひてしかも
思念氐之可毛
夢のみに夢耳爾たもと卷さ寢（ぬ）と
手本卷寢等
見るは術無し
見者須便奈之

これを實際正氣でしてゐるのだと思つてゐたいものだ。夢にばかり袖を枕として寢てゐると見てゐるのでは、遣瀬ないことだ。

天平五年贈ル入唐使ニ歌一首幷ニ短歌

この歌の作者は未詳であるが、同じ折りの歌に、好去好來之歌（卷五——山上憶良）・天平五年癸酉遣唐使舶發二難波一閏三月贈二入唐使一歌（卷八——笠金村）・天平五年癸酉遣唐使發二難波一入レ海時親母贈レ子歌（卷九——作者未詳）などがある。參照せよ。

空（*）み
虛見
つ大和の國
都山跡乃國

大和の國の奈良の都から、難波へ下つて住吉の三津の港で、船に乘つて、直航に日の沒する唐の國へ遣はされた貴方をば、申すも勿體なく畏れ多い住吉の懷かしい大神樣が、船の舳に陣取つて船の艫でお立ちなつて、船が寄る岩濱の埼々やら、漕いで泊る泊り場所泊り場所で、風に逢はせないで、無事につれて歸つて來て下さい、この元の朝廷の方へ。

直渡
タダワタリ（舊）
タダワタル（新）
日の入る國
唐の國をいふ。
所遣
ツカハサユ（代）
ツカハサル（略・古）
マケラユル（所）
恐伎
カシコキ（舊）
カシコシ（新）

うしはく
主となつて治めること。支配すること。
御立座而
ミタチシ（代）
ミタタシマシテ（考・略・古）
タタシイマシテ（新）

青（*）によし
青丹與之
奈良の都ゆ
平城京師由
おし（*）照る
忍照
難波に下り
難波爾久太里
住吉の
住吉乃
三津に船乘り
三津爾舶能利
たゞ渡り
直渡
日の入る國に
日入國爾
遣はさる
所遣
我が背の君を
和我勢能君乎
掛けまくの
縣麻久乃
ゆゆしかしこき
由由志恐伎
住吉の
墨吉乃
我が大御神
吾大御神
船の舳に
船乃倍爾
うしはき座（いま）し
宇之波伎座
船艫に
船騰毛爾
み立たまして
御立座而
さし寄らむ
佐之與良牟
磯の崎々
礒乃崎崎
漕ぎはてむ
許藝波底牟
泊泊に
泊泊爾
荒き風
荒風
浪に遭はせず
浪爾安波世受

平らけく（平久）率て歸りませ（率而可敝理座世）
元の朝廷に（毛等能國家爾）

毛等能國家爾
（モトノミカドニ（考・古・新）
（モトノクニベニ（略）

反歌一首

沖つ浪（奥浪）邊波な立ちそ（邊波莫越）
君の船（君之船）漕ぎ歸り來て（許藝可敝里來而）
津に泊るまで（津爾泊麻泥）

沖の方の娘よ、海岸の浪も立つことがないやうにして下さい。あの方の船が歸つて來て元の船泊りに泊るまで。

邊波莫越
（ヘナミナコシソ（舊）
（ヘナミナタチソ（考・略・古・新）

初十句
此は日子番能邇々藝命の降臨の御事をいへり。（中略）さて邇々藝命の天降りましに磐船に乘らししといふとは古事記書紀には擧げざれどかくいふ一の古傳說のありしによりてよまれしものなり。（古義）

向京路上依興預作侍宴應詔歌一首幷短歌

この歌は、大伴家持が都へ上る途中興に乘じて豫め作つておいて、賜宴に侍して、詔に應じて奉つた歌である。

*あきつ島（蜻島）大和の國を（山跡國乎）
天雲に（天雲爾）磐船浮かべ（磐船浮）

大空の雲の上に磐船を浮べ、艫や舳に梶を一杯に挿して漕ぎながら、この大和の國を國見遊ばして、天降りなされ、

國見しせして
せしてはし給ひての意。しは助辭である。

安天左波受
（アケサハズ（代）
（安末古波受（考）
（アブサハズ（宣・略・古・新）
あふさふはあぶすの延言。あぶすははふらすに同じ。落し殘さずの意。

從古昔
（ムカシヨリ（考・新）
（イニシヘヨ（古・略）

無利之端
（ナカリシミツモ（考）
（ナカリシシルシ（略・古・新）

艫に舳に（等母爾倍爾）まかいしじぬき（眞可伊繁貫）
い漕ぎつつ（伊許藝都追）國見しせして（國看之勢志氐）
天降りまし（安母里麻之）拂ひ平げ（掃平）
千代重ね（千代累）いや繼ぎ〳〵に（彌嗣繼爾）
知らし來る（所知來流）天の日嗣ぎと（天之日繼等）
神ながら（神奈我良）我が大君の（君皇乃）
天の下（天下）治め給へば（治賜者）
*もののふの（物乃布能）八十伴の男を（八十友之雄乎）
撫で給ひ（撫賜）調へ給ひ（等登能倍賜）
食す國の（食國之）四方の人をも（四方之人乎母）
あぶさはず（安天左波受）惠み給へば（愍賜者）
昔より（從古昔）無かりししるし（無利之瑞）

判く者どもを拂ひ平げられて、幾千代までもいよ〳〵絶えることがなく、治めてお出でになつた御系統とて、神樣の御意志その儘に天子樣が天下を御治め遊ばすので、多くの軍兵の家來たちを御いつくしみになつて、御調練遊ばされ、このお治め遊ばす國の諸方に居る人々をもうつちやつて終ふことなく御いつくしみになるので、これまで例のなかつた不思議な瑞兆が顯れて來たにつけての詔を、度々神樣の前に御奉告申された。腕組をした儘で治まる何事もない御代であると、天地や日月と共に幾萬年の後までも歷史には記し傳へられることであらう。さて我が天子

たびまねく 度々數多くの意。
手拱而 〔タムダキテ(代・考・略) テツクリテ(代) テウダキテ(古・新)〕 手を拱いての意。
天地 〔アメツチノ(考) アメツチ(略・古・新)〕
見賜 〔ミセタマヒ(代) ミシタマヒ(略) メシタマヒ(古・新)〕
あきらめ給ひ 心をはらし給ひの意。
酒みづく みづくは水漬くで、上機嫌で酒びたりになること。

たびまねく 多婢末禰久 申し給ひぬ 申 多麻比奴
手うだきて 手 拱 而 事無き御代と 事無御代等
天地 天 地 日月と共に 日月等登聞仁
萬づ世に 萬 世爾 記しつがむぞ 記 續牟曾
*やすみしし 八 隅知之 我が大君 吾 大皇
秋の花 秋 花 しが色々に 之我色色爾
見し給ひ 見 賜 あきらめ給ひ 明 米多麻比
酒みづき 酒見 附 榮ゆる今日の 榮流今日之
あやに貴さ 安夜爾貴左

反歌一首

秋の花 秋 時 花 種々なれど 種種爾有等

様には、秋草の花をば、その花獨得の色彩を細かに御熟覽になり、酒にお醉ひ遊ばして上機嫌でいらつしやる。今日のこの御宴會の無上に尊いことよ。

秋の草夜はいろ〳〵さま〴〵にある

色殊に 色 別 爾 見しあきらむる 見之明良牟流
今日の貴さ 今日之貴左

が、その一々について細かに御覽遊ばす今日の日の尊いことよ。

勅從四位上高麗朝臣福信遣於難波賜酒肴入唐使藤原朝臣清河等御歌一首幷短歌

この歌は、孝謙天皇がその勝寶四年に高麗福信をして遣唐使藤原清河に餞せしめられた御製である。福信は高麗人の子孫で、春宮亮・民部大輔・武藏守等に任ぜられ、延暦八年に歿した。清河は房前の四男で、勝寶四年遣唐大使として出發し、難船して、後に唐に入り、遂に彼の地で客死した人である。

大和 我が國全體をさす。
船上波 〔フナノヘハ(舊) フネノヘハ(新)〕
鎭在國曾 〔シヅムルクニゾ(考) イハヘルクニゾ(略・古・新)〕
四つの船 大使・副使・判官・主典の分乘する船、この時の副使は大伴胡麿・吉備眞備の二人であつた。

*そらみつ 虛 見都 大和の國は 山跡乃國波
水の上は 水 上波 地往く如く 地往如久
船の上は 船 上波 床に居るごと 床座如
大神の 大神乃 齋へる國ぞ 鎭在國曾
四つの船 四 船 船のへ並べ 船能倍奈良倍

わが日本の國は、水の上は丁度地上を行くと同じやうに、又船の上は丁度床に座つてゐるのと同じやうに、神々が安全に護つて下さる國である。それで汝たちは、四雙の船の舳を並べて、無事に唐の國に渡つて、早速任務を果して

返り言　復命をいふ。

豐御酒　豐は立派であることを現はす接頭語。

いはひて　祈りての意。

（　）の中　いや繼ぎ〳〵ににかかる序である。

平らけく（平安）　早渡り來て（早渡來而）　返り言（還事）　奏さむ日に（奏日爾）　相飲まむ酒そ（相飲酒曾）　この豐御酒は（斯豐御酒者）

歸國し、復命する日の來るのは斯うして待つべしである。その目出たい日に、再び汲んで相飲むべき御酒であるぞこの賜はする御酒は。

反歌一首

四つの船（四船）　早還り來と（早還來等）　白紙つけ（白香著）　朕が裳の裾に（朕裳裾爾）　いはひて待たむ（鎭而將待）

一行の四艘の船が、早く任務を果して歸つて來るやうにといつて、朕が裳の裾に白紙の幣をつけて祈つて待つてゐよう。

爲應詔儲作歌一首幷短歌

左註に「右二首大伴宿禰家持作之」とあつて、家持が詔に應ずるために兼ねて作つておいた歌である。

*あしびきの（安之比奇能）　八つ峰の上の（八峯能宇倍能）

多くの峰々に茂つてゐる樛の木ではないが、これから先つぎ〳〵に松の根のやうに絶えることが無く、奈良の都で何時々々までも、この國をお治めにならうとして、治めていらつしやる我が天子樣の尊い御意の通り御思ひ立ち遊ばされて、御酒宴を御催しなる今日の日は、澤山の御家來たちが、前栽の築山の上に赤らんでゐる橘を冠飾として挿し、着物の紐を解き廣げうちくつろいで、天子樣の萬歳をお祝ひ申し、あたりを搖がせるまでお祝ひして、上機嫌にげら〳〵とはしやいで御酒宴に興つてゐるのを見るのが尊い御事だ。

見爲今日者（ミシヤスケフハ（考・略）　メスケフノヒハ（古・新））

豐明　宮中に行はれる御宴。この時代には必ずしも後世のやうな新嘗祭の翌日の御宴とは限つてゐない。

赤る橘　赤らむ橘の意。

島山　こゝでは宮中の御苑の築山をいふ。

保伎吉等余毛之（ホキキトヨモシ（舊）　ホギイヒトヨモシ（宣）　ホザキトヨモシ（古・新））　ほざきはいはひのこと。

うず　古代人が冠の上にかざした飾である。後世は挿頭花といふ。古くは草花などを用ひたが、だん〳〵鳥の羽・金などを用ひるに至つた。

ゑら〳〵に　酒を飲んで上機嫌の有樣をいふ。

樛の木の（都我能木能）　いや繼ぎ〳〵に（伊也繼繼爾）　*松が根の（松根能）　絕ゆる事無く（絕事奈久）　*あをによし（青丹余志）　奈良の都に（奈良能京師爾）　萬づ代に（萬代爾）　國知らさむと（國所知等）　*やすみしし（安美知之）　我が大君の（吾大皇乃）　神ながら（神奈我良）　思ほしめして（於母保之賣志氐）　豐明（豐宴）　見す今日の日は（見爲今日者）　*もののふの（毛能乃布能）　八十伴の男の（八十伴雄能）　島山に（島山爾）　赤る橘（安可流橘）　うずに挿し（宇受爾指）　紐解きさけて（紐解放而）　千歳禱ぎ（千年保伎）　ほざきとよもし（保伎吉等余毛之）　ゑら〳〵に（惠良惠良爾）　仕へまつるを（仕奉乎）

見爲（ミシ（舊）／メシ（古・新））

見るが貴さ（見之貴左）

反歌一首

すめらぎの（須賣呂伎能）御代萬づ代に（御代萬代爾）

かくしこそ（如是許曾）見しあきらめめ（見爲安伎良目米）

立つ年のはに（立年之葉爾）

天子様の御治世が、今後幾久しく續くまでも、かうして御氣ばらしを遊ばすことであらう、立ち變る年毎に。

萬葉集巻二十

追痛防人悲別之心作歌一首幷短歌

この歌は、大伴家持が兵部少輔であつた時の天平勝寶七年の二月八日に、防人等が別を悲しんでゐる心を痛んで詠んだ歌である。巻五の山上憶良の好去好來歌に負ふところの多い作である。

すめろぎの（天皇乃）遠のみかどと（等保能朝廷等）

天子様の邊土の役所である筑紫のは

防人　九州の要塞を守る軍人。大寶令には諸國の軍團から三年更替に出るとある。後には東國の防人のみとなつたが、先づ難波のみ津に集り、それから太宰府の防人司に行くのが例であつた。

天皇乃（オホギミノ（舊）／スメロギノ（古・新））

おさへ　守護又は防備のこと。

目かれて　目離れての意。

まかず　まくは枕として寢る、人の手を枕として共寢すること。

知らぬ火（之良奴日）筑紫の國は（筑紫國波）

仇守る（安多麻毛流）おさへの城ぞと（於佐倍乃城曾等）

聞こしをす（聞食）四方の國には（四方國爾波）

人さはに（比等佐波爾）滿ちては有れど（美知弖波安禮杼）

鳥が鳴く（等利我奈久）東をのこは（安豆麻乎能故波）

出で向ひ（伊田牟可比）顧りみせずて（加弊里見世受弖）

勇みたる（伊佐美多流）猛き軍と（多家吉軍卒等）

ねぎ給ひ（禰疑多麻比）まけのまにまに（麻氣乃麻爾麻爾）

垂乳根の（多良知禰乃）母が目かれて（波波我目可禮弖）

若草の（若草能）妻をもまかず（都麻乎母麻可受）

新玉の（安良多麻能）月日よみつゝ（月日余美都都）

蘆が散る（安之我知流）難波の美津に（難波能美津爾）

外敵を見守り防禦するための要塞として、お治めになつてゐる日本國中には人は澤山に滿つてゐるけれども、特に東國の男子は、敵に對抗して後を顧ることをせず、勇み立つ健氣な軍人であると仰しやつて、躬らねぎらひ給ひ、任に赴かしめられるにまかせて、彼等は母の目を遠く離れ、妻にも別れて、月日を數へながら難波の御津に大船を浮べ、それに櫓をたくさんに取り付け、朝凪に水夫を呼び集め、夕の滿汐に櫓を引き撓めて、相率ゐて漕いで行く防人たちは、波の間を凌いで無事に早く彼の地に著いて、天皇の仰せられるま

大船（大船）に　真梶（まかい）しじぬき　朝凪（安佐奈藝）に　水夫（末加伊）ととのへ　夕汐（由布思保）に　梶（可知比）ひきをり　あどもひて（安騰母比豆）　漕ぎ行く君は　波の間（奈美乃間）を　いや行きさぐくみ　まさきくも（麻佐吉久母）　早く至りて　大君の（大王乃）　みことのまにま　大丈夫の（麻須良男乃）　心を持ちて　あり廻り（安里米具里）　事し終らば　つつまはず（都都麻波受）　歸り來ませと　齋瓮（伊波比倍）を　床べに据ゑて　妙（多倍）の　袖折りかへし（蘇田遠利加敞之）

つつまはず　恙なくの意。

眞梶　船の美称。

水夫ととのへ　水夫たちを整へ。

梶ひきをり　梶を操つて。

漕ぎ行く君は　漕ぎ行く君たちは。

いや行きさぐくみ　いよいよ行きさぐくみ。

さぐくみ　巡察し。

まさきくも　無事に。

大君の　大王。

みことのまにま　御言のままに。

心を持ちて　心を持つて。

事し終らば　任を終つたならば。

つつまはず　恙なく。

歸り來ませと　還つていらつしやいと。

齋瓮を　齋瓮を。

床べに据ゑて　床の邊に据ゑて。

妙の袖折りかへし　妙の袖を折り返し。

*ぬば玉の（ぬ婆多麻乃）　黒髪（久路加美之）敷きて（伎豆）　長き（奈我伎）を（表）　はしき（波之伎）妻等は（都麻良波）　待ちかも戀ひむ（麻知可母戀牟）

長き月日のこと。

はしき　非常にいとしいこと。

反歌

丈夫の（麻須良男能）　出でて行けば（伊田弖伊氣婆）　歎きけむ（奈氣伎氣牟）妻　*鳥が（等里我奈）鳴く（久）　妻別れ（都麻和可禮）　年の緒長く（等之能乎奈我久）　ゆぎ取負ひて（由伎等里於比弖）　別れを惜しみ（和可禮乎之美）　東男の（安豆麻乎等故能）　悲しく有りけむ（可奈之久安里家牟）

丈夫たる夫が靫を負うて出て行くと、其の妻はさぞ別れを惜しんで歎いたことであらう。

東國男子が妻に別れて行くにつけても、これから長い月日の間逢へないことであるから、さぞ悲しい思をしたことであらう。

陳(ブル)ニ私拙懷(ヲ)一歌一首並(ニ)短歌

この歌は、兵部少輔であつた大伴家持が、孝謙天皇の天平勝寶七年二月十三日に、難波の離宮に至つて、感懷を述べた歌である。

天皇乃 〔オホギミノ(舊) スメロギノ(古)〕

伊比都々 伊比伎都の誤か。(新)

おほきみの 天皇乃
遠き御代にも 遠保伎美與爾母
*おしてる 於之弖流
難波の國に 難波乃久爾爾
天の下 阿米能之多
しらしめしきと 之良之賣之伎等
今の代に 伊麻能乎爾
絶えずいひつつ 多要受伊比都都
掛けまくも 可氣麻久母
あやに畏し 安夜爾可之古志
かむながら 可武奈我良
わご大君の 和其大王乃
*うち靡く 宇知奈妣久
春の初めは 春初者
八千草に 夜知久佐爾
花咲き匂ひ 波奈佐伎爾保比
山見れば 夜麻美禮婆
見のともしく 見能等母之久

皇祖の天子の遠い大昔の御代にも、この難波の國で天下をお治め遊ばしたと、今の時代まで、絶えず言ひ繼ぎ言ひ繼ぎして、言葉にかけて申すも無上に畏れ多いことであるが、春の始めはそれは〳〵種々樣々に花が咲き映えあうてゐて、山を眺めると、眺めが珍らしいことだし、川を見ると、眺めがさつぱりしてゐて、見る物觸れる物みな繁榮してゐる最中だといふので、神の思召しどほりにお眺めになり、十分御覽

難波宮 孝德天皇の皇居の後の離宮で、天平勝寶七年に此處に行幸があつたらしい。

水尾びく 水路の先しるべをすること。

伎保比弖 伎保比奴の誤か(新)

をる ををるの意。

川見れば 可波美禮婆
見のさやけく 見乃佐夜氣久
物毎に 母能其等爾
榮ゆるときと 佐可由流等伎登
めし給ひ 賣之多麻比
あきらめ給ひ 安伎良米多麻比
しきませる 之伎麻世流
難波の宮は 難波宮者
きこしめす 伎已之米須
四方の國より 四方乃久爾欲里
奉る 多弓麻都流
貢のふねは 美都奇能船者
堀江より 保理江欲里
水尾(みを)びきしつつ 美乎妣伎之都都
朝凪に 安佐奈藝爾
梶ひき上り 可治比伎能保里
夕汐に 由布之保爾
棹さし下り 佐乎佐之久太理
あぢむらの 安治牟良能
騷ぎ競ぬ 佐和伎伎保比弖
濱にいでて 波麻爾伊泥弖
海原見れば 海原見禮婆
白波の 之良奈美乃
八重をるが上に 夜敝乎流我宇倍爾

なされ、領せられてゐる難波の御所では、御治めなさる四方の國々から、献上する貢物を積んで來る船は、難波の疏水から水先案内を立てながら、朝凪ぎの頃に、櫓を引いて上り、夕汐の滿つ頃に櫂さして下つたりして、あぢむらが騷ぐやうに爭ひ騷いでゐる容子だ。それで濱邊に出て海上を見たところが、白い波が幾重にもうねりうねつてゐる上に、蜑の舟がばら〳〵に浮かんでゐて、天子樣の供御に献上するのだといつて、彼方此方に、漁りをしたり、釣りをしたりしてゐることだ。かく取つても〳〵盡きない海上は、實に限りなく廣く寛かなものであるよ。

はららに
ばら〳〵に、散らばつての意である。

おぎろなし
廣大無限なこと。ここでのなしは、はしたなしなどのなしのやうに否定の意味ではない。

おしてる
普通に難波の枕詞に使はれてゐるがここでは難波の意。

蜑小舟
安麻 乎夫 禰
はららに浮きて
波良良爾 宇伎弖
大御食に
於保 美 氣 爾
仕へまつると
都加倍 麻 都 流 等
をちこちに
乎 知 許 知 爾
漁り釣りけり
伊射里 都 利 家 理
そきだくも
曾 伎 太 久 毛
おぎろ無きかも
於 藝 呂 奈 伎 可 毛
こきばくも
己 伎 婆 久 母
裕けきかも
由多 氣 伎 可 母
ここ見れば
許 己 見 禮 婆
宜し神代ゆ
宇倍之 神 代 由
初めけらしも
波自米 家 良 思 母

櫻花
櫻 花
今盛りなり
伊麻 佐可里 奈 里
難波の海
難 波 乃 海
おしてる宮に
於之 弖 流 宮 爾
きこしめすなへ
伎 許 之 賣 須 奈 倍

此の海を見ると、成る程神代（仁德天皇をさす）の大昔から、この地に宮を開かれたに違ひないことだ。

只今櫻の花は丁度眞盛りである。難波の海、そのおしてるといふ枕詞の通り光り輝いてゐる立派な御所に、世を治めなさつてゐる御繁昌の有樣につけて、

海原の
海 原 乃
ゆたけき見つつ
由多氣 伎 見 都 都
*あしがちる
安 之 我 知 流
難波に年は
奈爾波 爾 等 之 波
經ぬべく思ほゆ
倍努 倍 久 於 毛 保 由

海上が廣々とゆつたりとしてゐる容子を眺めながら、この難波で、年長く暮してゐられさうな、氣がせられることだ。

○

この歌は、倭文可良麿（シドリ）（傳記未詳）の作と左註にあつて、防人の歌である。言葉の續きなどいかがはしいけれども、東武士の心持がよく現はれ、又東人の長歌として珍らしいものである。

た廻り
たは接頭語。

多志夜
タシヤ（舊・代・古）
タチヤ（略）
多之之（新）
たしは立ち、やは助詞。

ちまり
留ること。

足柄の
阿志 加良 能
み坂た廻り
美 佐可多 麻波 理
顧みず
可閉理 美 須
あれは越え行く
阿例波 久 江 由 久
荒し男も
阿良 志 乎 母
たしや憚る
多 志 夜波 婆 可 流
不破の關
不 破 乃 世伎
越えてわは行く
久 江 弖 和 波 由 久
*むまのつめ
牟 麻 能 都 米
筑紫のさきに
都久志 能 佐 伎 爾
ちまり居て
知 麻 利 爲 弖
あれは齋はむ
阿例 波 伊波 波 牟

嶮しい足柄の峠道をぐるりと廻つて自分の國の方を振返りもしないで、わたしは越えて行き、それから又たけ〴〵しい男も立ちどまつて行きかねる嚴重な不破の關をば越えてわたしは行くのだ。今からはこの筑紫の國の崎に駐屯して居て、わたしは身を淨め謹んで祈

さけく＝ささく

麻乎須（マヲス（舊）マヲセ（新））

もろもろは　さけくとまをす
母呂母呂波　佐祁久等麻乎須

歸り來までに
可閉利久麻弖爾

爲（リテ）二防人情（ノ）一陳（ベテ）思（ヲ）作歌（レル）一首并（ニ）短歌

同じく二月十九日に、兵部少輔の大伴家持が作つた歌である。

大君の　御言畏み
大王乃　美己等可之古美

妻別れ　悲しくはあれど
都麻和可礼　可奈之久波安礼騰

丈夫の　心振り起し
丈夫乃　情布里於許之

とりよそひ　門出をすれば
等里與曾比　門出乎須礼婆

*たらちねの　母かき撫で
多良知禰乃　母可伎奈泥

*若草の　妻はとりつき
若草乃　都麻波等里都吉

平らけく　吾は齋はむ
平良氣久　和禮波伊波牟

つて居よう。占の表で見るとわたしが歸つて行くまでは、家の人々は誰も皆息災だとあらはれた。

天子様の仰せを畏れかしこんで妻と別れるのが悲しくはあるけれども、雄々しい心を奮ひ起して、旅の裝束を整へ、いよ〳〵首途をすると、母は背を撫で妻は袖にとりついて、わが身の無事を齋ひ祈つて居らうから、無事で早く還つて來いと云つて、袖で涙をおし拭ひ、咽び泣きながら別を告げるので、自分は出發する勇氣もなくなり、

まさきくて　早還り來と
好去　還來等

*ま袖もち　涙をのごひ
麻蘇泥毛知　奈美太乎能其比

言問ひすれば
言語須禮婆

出で立ちがてに　顧みし
伊泥多知加弖爾　可弊里美之

國を來離れ　山を越え過ぎ
國乎來伎例　山乎故要須疑

*難波に來ぬて　船を浮けする
難波爾伎奴弖　船乎宇氣須恵

朝凪に　舳向け漕がむと
朝奈藝爾　舳牟氣許具等

*我が居る時に　島みに立ちて
和我乎流時爾　嶋末爾多知弖

*いや遠に　里は放りぬ
伊也等保爾　里波奈例奴

*いや高に　山も越え來ぬ
伊夜多可爾　山毛古要伎奴

*蘆が散る　難波の崎よ
安之我知流　難波乃佐伎欲

*漕ぎ廻れば　大和は遠し
許藝母等保里　夜麻登波等保之

夕汐に　船は早けむ
由布之保爾　布禰波夜家牟

*朝凪に　楫引き折りて
安佐奈藝爾　可治比乎里弖

*さもらふと　人は言ふとも
佐毛良布等　比等波伊布等母

*春霞　立ちし繁けく
春霞　多知之繁家久

行きなやんで後を振り返り〳〵、だん〳〵遠く自分の故里を離れ、だん〳〵高く山を越えて來て、難波の入江に着いて、夕汐に船を浮かべ、朝凪に舳先を行手に向けて、漕ぎ出すに都合のいい日和の來るのを伺ひ待つてゐると、折りしも春霞がぼつと島のあたりを立ちこめ、その中で鶴がいかにも悲しみをそゝるやうに鳴くので、自分も遙々と家のことが思ひやられて、背に負うた征矢がゆれて、そよと鳴るほど肩をさくり上げて泣いたことだ。

田鶴がね　がねには意味はない。雁がねのがねと同じ。

負ひ征矢　背に負つた征矢のこと。征矢は戰陣に用ひる矢。

田鶴がね　悲しく鳴けば　はろばろに　家を思ひで　そよと鳴るまで　負ひ征矢の　歎きつるかも

多頭我(禰)乃　悲鳴婆　波呂波呂邇　伊弊乎於毛比弖　曾與等奈流麻弖　於比曾(箭)乃　奈氣吉都流香毛

反の歌

海原に　霞たなびき　田鶴がねの　悲しき宵は　國邊し思ほゆ

宇奈波良邇　霞多奈妣伎　多頭我禰乃　可奈之伎欲比波　久爾弊之於毛保由

家思ふと　いを寢ずをれば　田鶴がなく　蘆邊も見えず

伊弊於毛負等　伊乎禰受乎禮婆　多頭我奈久　安之弊毛美要受

廣い海の一面に霞がかゝつて、氣が滅入るやうな時、しかも鶴が悲しい聲で鳴いてゐるのを聞く夜は、故郷の方のことが頻りに偲ばれる。

家のことが偲ばれて、夜もろく〳〵寢ないでゐると、鶴が悲しい聲で鳴くが、その鶴が群れてゐる蘆邊も、春霞がこめて一向見えない。まして遠い故郷の空は、ここからは見やることも出來ないので、誠に心細く悲しい。

春の霞に

波流乃可須美爾

陳(ブル)二防人悲(ノシム)レ別之情(ヲ)一歌一首幷(ニ)短歌

この歌も、同じく二月二十三日に兵部少輔大伴家持の作つた歌である。

大君の　防人に　わが立ち來れば　母の　美　裾つみあげかきなで　父の　知　白髮の　上ゆ　たくづぬの　多久頭怒能　白(シラ)　嘆きのたばく　奈氣伎乃多婆久　涙たり　奈美太　多利

大王乃　防人爾　和我多知久禮婆　母乃　波波　美　伊(島)波(波)蘇波(蘇)波(波)能　美　母乃須蘇　都美安氣可伎奈泥　知　父乃　知知　白(シラ)　髮乃　之良比氣乃　上由　宇倍由　奈氣伎乃多婆久　多婆久　涙太利　奈美太　多利

任(安)けのまにまに　わが立ち來れば　母の　命は　白髮の　上ゆ　嘆きのたばく　涙たり

麻氣乃麻爾麻爾　和我多知久禮婆　波波　美許等波　之良比氣乃　宇倍由　奈氣伎乃多婆久　奈美太　多利

天子樣の御任命どほりに、防人になつて自分が出かけて來たその折りに、母は着物の上袴の裾をとつて泣き、又わたしの頭を撫でくだされ、父は涙をぽた〳〵と白髮の上から傳はし垂し、溜め息ついて仰せられるには、あゝたつた一人で今朝門出をする所の可愛いわが子よ。これから先年數長く逢はなかつたら、さぞ悲しいことであらう。せ

かなし　可愛いこと。悲しい意ではない。

*かこじもの　可胡自母乃　朝門出而　安佐刀渥乃　可奈之伎我子

*新玉の　安真多麻乃　年の緒長く　等之能乎奈我久

相見ずば　安比美受波　戀ひしく有るべし　古非之久安流倍之

今日だにも　今日太仁母　言問ひせむと　許等騰比勢武等

惜みつつ　乎之美都都　かなしびいませ　可奈之備伊麻世

*若草の　若草之　妻も子供も　都麻母古騰母毛

*をちこちに　乎知己知爾　さはに圍みゐ　佐波爾可久美爲

*春鳥の　春鳥乃　聲のさまよひ　己惠乃佐麻欲比

*白妙の　多倍之路乃　袖泣きぬらし　蘇泥奈伎奴良之

たづさはり　多豆佐波里　別れがてにと　和可禮加弖爾等

引き止め　比伎止米　慕ひしものを　之多比之毛能乎

唯一人して　多太比等里之氏　かなしき我が子　可奈之伎我子

年の緒長く　等之能乎奈我久　戀ひしく有るべし　古非之久安流倍之

言問ひせむと　許等騰比勢武等　かなしびいませ　可奈之備伊麻世

妻も子供も　都麻母古騰母毛　さはに圍みゐ　佐波爾可久美爲

聲のさまよひ　己惠乃佐麻欲比　袖泣きぬらし　蘇泥奈伎奴良之

別れがてにと　和可禮加弖爾等　慕ひしものを　之多比之毛能乎

めて別れの今日の日だけでも、言ひたいことを話して置かうと、わたしを大事がつて可愛がつて下さるといふと、私の妻や子供も、あちらからもこちらからも大勢わたしを圍んで坐つて、丁度春の鳥の騒ぐ様に鳴き悲しんで、白栲の着物を泣き濡し、手などに絡みついて、別れることがいやだ、とわたしを引きとめて焦れてゐたものを、それでも天子様の御命令の畏れ多さに、いよ〳〵別れて街道に出て歩き出し、岡の出鼻を廻る度毎に、幾度とも知れぬ程振返り〳〵して、段々遠く〳〵別れて來たので、思ふ胸の中は落ちつかず、焦れる胸の内は術ないので、肉身を持つ

大君の　天皇乃　*玉桙の　多麻保己乃　岡の之　乎可乃　崎い　佐伎

*道に出で立ち　美知爾出立　い廻むる毎に　伊多母等流其等爾

萬づ度　萬頭　顧みしつつ　可弊里見之都追

はろばろに　波呂波呂爾　別れし來れば　和可禮之久禮婆

思ふそら　於毛布蘇良　安くもあらず　夜須久母安良受

戀ふるそら　古布流蘇良　苦しきものを　久流之伎毛乃乎

*空蟬の　宇都世美乃　世の人なれば　與能比等奈禮婆

*たまきはる　多麻伎波流　命も知らず　伊能知母之良受

海原の　海原乃　*畏き　可之古伎　道を　美知乎

*島傳ひ　之麻豆多比　い漕ぎ渡りて　伊己藝和多利弖

ありめぐり　安利米具利　我が來るまでに　和我久流麻弖爾

みこと畏み　美許等可之古美

たこの世の人のこととて、どうなるか命の程はわからないが、海上の恐ろしい航路をば島々を傳つて渡り、さうし續けて、わたしが歸つて來るまでの間、無事で親達はいらつしやい、變る事なしに妻は待つてゐて呉れ、と住吉のわたしの親しみ奉る尊い神様に供へ物をし、お禱り申し上げて、難波の船つき場に船を浮かべて、澤山の櫓艫をさして船頭どもを勢ぞろひさせて、朝出發し、わたしは漕ぎ出して終つた、と家の人々に告げてくれ、

平らけく 多比良氣久
つつみなく 都都美奈久
墨の江の 須美乃延能
幣まつり 奴佐麻都利
難波津に 奈爾波都爾
船を浮けすゑ 船乎宇氣須惠
八十楫ぬき 夜蘇加奴伎
水夫整へて 可古登登能倍弖
朝開き 安佐婢良伎
わは漕ぎ出ぬと 和波己藝泥奴等
家に告げこそ 伊弊爾都氣己曾
親はいまさね 於夜波伊麻佐禰
妻は待たせと 都麻波麻多世等
あがすめ神に 安我須賣可未爾
祈り申して 伊能里麻宇之弖
船出はしぬと 布奈泥波之奴等

反歌

家人の 伊弊妣等乃
齋へにかあらむ 伊波倍爾可安良牟
平らけく 多比良氣久
家にゐる人たちが身を淨め謹んで祈つて居るであらうか。私は無事に今船出して終つたと、父母に申しあげてくれよなあ。

つつみなく
恙なくに同じ。

すめ神
もと〳〵皇統を申すのであるが、轉じて普通の神をもかく尊稱する。

朝開き
朝船出すること。

家
家の人々の意。

親に申さね 於夜爾麻宇佐禰
み空行く 美蘇良由久
雲も使と 久母都可比等
人は言へど 比等波伊倍等
家づとやらむ 伊弊頭刀夜良武
たづき知らずも 多豆伎之良受母
空を流れて行く雲も、使だと外の人人は云うてゐるけれど、それにしては托して家への土産をやるべき手だてがわからないことだ。

喩族歌一首 并短歌

この歌は、大伴家持が、一族たる大伴古慈悲が罪に依つて官職を免ぜられた時に、一族中から罪人を出した事を歎いて、一族を喩す意を述べたものである。古慈悲は、土佐國に流されたが、天平寶龜元年十一月に本位從四位上に復せられるやうになつた。

*久方の 比佐加多能
天の戸開き 安麻能刀比良伎
高千穂の 多可知保乃
岳に天降りし 多氣爾阿毛理之
すめろぎの 須賣呂伎能
神の御代より 可未能御代欲利
神代の遠い昔、天の八重雲を押し開いて、日向の高千穂の嶺に降り給うた天邇迹々藝尊の御時から、手に檍の弓を取り、鹿兒矢を手挿み持つて、大久

ま鹿児矢
鹿児(しか)を射る矢の意。まは接頭語。

大久米
天孫降臨の時に先導した大久米部の頭の天津久米命をいふ。

靫
後世の胡籙箙の類で、矢を盛つて背に負ふ器具である。

國まぎ
帝都とすべき國を探し求めること。

ことむけ
こちらに向かす。從はすこと。

檍原の宮
可之波良能美也波良之

大久米の
於保久米能

先に立て
佐吉爾多弖

山川を
山河乎

岩根さくみて
伊波禰左久美弖

踏みとほり
布美等保利

千早ぶる
知波夜夫流

神をことむけ
神乎許等牟氣

まつろへぬ
麻都呂倍奴

人をも和し
比等乎母夜波之

掃き清め
波伎欲米

仕へまつりて
都可倍麻都里弖

あきつしま
安吉豆之萬

大和の國の
夜萬登能久爾乃

仕へまつる
都可倍麻都流

敢火の宮に
宇禰備乃宮爾

神武天皇。
ここでは神武天皇。

太しり立てて
布刀之利多弖

弓を
由美乎

鹿児矢を
加古夜乎

手握り持たし
多爾藝利母多之

手挟みそへて
多波左美蘇倍弖

ますら猛男を
麻須良多祁乎

靫とり負せ
由伎登利於保世

米部の雄々しい勇士を先鋒として、背に靫を負はせ、山でも河でも、岩根のつき立つてゐる險しい道を蹈みしだいて通りつつ、帝都とすべき地を求めて、そこに居た荒ぶる國の神共を歸順させ、服從しない者共をも歸服させ、國中のあらゆる不都合な者を一掃し去つて、お仕へ申したわが祖先の天忍日命以來、その子孫は大和國の橿原の畝傍宮に、立派な御殿を營ましめられて、天下をお治めになつた神武天皇の後、天つ日嗣をつぎつぎに相承け相傳へ給ふ代代の天子樣に對して、曇りのない明い眞心を盡して、君のお側に仕へることを世襲の官として、特に子

すめろぎ
ここでは神武天皇。

かくさはぬ
隱さはぬで、知つて居て隱し立てすることのないこと。

すめらべ
天子の御邊りをいふ。

ことだてて
言立てての意で、聲明して。

宇美乃占能
新考はこの下に脫句ありとする。

あたらしき
惜しきことをいふ。

天の
安米能

下知らしめしける
之多ゝ良志賣之祁流

天の日嗣と
安麻能日繼等

君の御代御代
伎美能御代御代

赤き心を
安加吉許己呂乎

すめろぎの
須賣呂伎能

つぎて來る
都藝弖久流

君の御代御代
伎美能御代御代

赤き心を
安加吉許己呂乎

極めつくして
伎波米都久之弖

親祖のつかさと
於夜能都可佐等

さづけ給へる
佐豆家多麻弊流

いやつぎつぎに
伊也都藝都岐爾

語りつぎでて
可多里都藝弖氏

鑑にせむを
可我見爾世武乎

清きその名ぞ
吉伎曾乃名曾

心思ひて
己許呂於母比弖

かくさはぬ
加久佐波奴

すめらべに
須賣良弊爾

仕へ來る
都加倍久流

ことだてて
許等太弖氏

生みの子の
宇美乃古能

見る人の
美流比等乃

聞く人の
伎久比等能

あたらしき
安多良之伎

おほろかに
於煩呂加爾

知らしめしける
ゝ良志賣之祁流

天の日嗣と
安麻能日繼等

君の御代御代
伎美能御代御代

赤き心を
安加吉許己呂乎

極めつくして
伎波米都久之弖

親祖のつかさと
於夜能都可佐等

さづけ給へる
佐豆家多麻弊流

いやつぎつぎに
伊也都藝都岐爾

語りつぎでて
可多里都藝弖氏

鑑にせむを
可我見爾世武乎

清きその名ぞ
吉伎曾乃名曾

心思ひて
己許呂於母比弖

々孫々傳へて以て、見る人聞く人すべての人々が、語りも傳へ鑑とも爲すべき、あたら清い我が氏の家名である。この家名を疎かに思つて、苟くも祖先の名を絶えさすやうなことをしてはならないぞ、大伴といふ名を氏に持つてゐる、わが一門の勇士たちよ。

むな言
空言の意で、虚言をいふ。

むな言も　おやの名斷つな
牟奈許等母　於夜乃名多都奈

大伴の　氏と名に負へる
大伴乃　宇治等名爾於蔵流

ますら男の伴
麻須良乎能等母

*敷島の　大和の國に
之奇志麻乃　夜麻等久爾

明らけき　名に負ふ伴の男
安伎良氣伎　名爾於布等毛能乎

心つとめよ
己許呂都刀米与

我が日本の國に於いて、祖先以來清い立派な名を保つて來たわが大伴一門の者たちよ、きつと忠勤を勵まねばならないぞ。

劍太刀　いよよ磨ぐべし
都流藝多知　伊與餘刀具倍之

古へゆ　さやけく負ひて
伊爾之敝由　佐夜氣久於比豆

來にしその名ぞ
伎爾之曾乃名曾

神代の遠い昔から清い立派な名として、持つて來たわが大伴氏の家名を、ます〳〵磨いてその光彩を天下に發揚しなければならぬ。

——終り——

附錄　短歌旋頭歌佳調

卷一

額田王歌

にぎた津に船乘せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

天皇遊二獵蒲生野一時額田王作歌

あかねさす紫野行きしめ野ゆき野守は見ずや君が袖振る

皇太子答御歌

紫のにほへる妹をにくくあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも

天皇幸二于吉野宮一時御製歌

よき人のよしとよく見てよしと云ひし吉野よく見よよき人よくみつ

藤原宮御宇天皇代天皇御製歌

春過ぎて夏來るらし白妙の衣乾したり天の香具山

當麻眞人麻呂妻作歌

わがせこはいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

×

阿騎の野にやどる旅人うちなびき寐もぬらめやも古へ思ふに

眞草刈る荒野にはあれどもみぢ葉の過ぎにし君が形見とぞ來し

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

日並知の皇子の命の馬なめて御獵立たしし時は來むかふ

從二明日香宮一遷二居藤原宮一之後志貴皇子御作歌

たわやめの袖吹きかへすあすか風都を遠みいたづら

に吹く

×

藤原の大宮仕へあれつがむ處女がともはともしきろかも

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸二于紀伊國一時歌

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつしぬばな巨勢の春野を

二年壬寅太上天皇幸二參河國一時歌

引馬野ににほふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに

舍人娘子從駕作歌

大夫のさつ矢たばさみ立ち向ひ射る的形は見るにさやけし

山上臣憶良在二大唐一時憶二本郷一作歌

いざ子ども早くやまとへ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ

慶雲三年丙午幸二于難波宮一時志貴皇子御作歌

葦邊行く鴨の羽がひに霜ふりて寒きゆふべは大和し思ほゆ

和銅三年庚戌春三月從二藤原宮一遷二于寧樂宮一時

御輿停二長屋原一迴望二古郷一御作歌

飛鳥の明日香の里を置きていなば君があたりは見えずかもあらむ

和銅五年壬子夏四月遣二長田王子于伊勢齋宮一時

山邊御井作歌

山邊の御井を見がてり神風の伊勢處女ども相見つるかも

×

うらさぶる心さまねしひさかたのあめのしぐれの流らふ見れば

わたの底沖つ白浪立田山いつか越えなむ妹があたり見む

卷二

磐姫皇后思二天皇一御作歌四首

君がゆき長くなりぬ山たづの迎へか行かむ待ちにか待たむ

かくばかり戀ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを

ありつつも君をば待たむ打靡くわが黒髮に霜の置くまでに

秋の田の穗の上に霧ふ朝霞いづへのかたにわが戀やまむ

內大臣藤原卿娉二鏡女王一時鏡女王贈二內大臣一歌一首

玉櫛笥おほふをやすみあけて行かば君が名はあれどわが名し惜しも

內大臣藤原卿娶二采女安見兒一時作歌一首

われはもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり

天皇賜二藤原夫人一御歌一首

我里に大雪ふれり大原のふりにし郷にふらまくは後

藤原夫人奉レ和歌一首

我が岡のおかみにいひて降らしめし雪のくだけしそこに散りけむ

大津皇子竊下二於伊勢神宮一上來時大伯皇子御作歌

わが背子を大和へやるとさ夜更けてあかとき露に吾が立ち濡れし

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越えなむ

大津皇子贈二石川郎女一御歌一首

足引の山の雫に妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに

石川郎女奉レ和歌一首

あを待つと君が濡れけむあしびきの山の雫にならましものを

但馬皇女在二高市皇子宮一時竊接二穗積皇子一事既形而後御作歌一首

人言をしげみこちたみ己が世に未だわからぬ朝川わたる

舍人皇子御歌一首

丈夫や片戀せむと嘆けども醜のますらを猶戀ひにけり

三方沙彌娶二園臣生羽之女一未レ經二幾時一臥レ病作歌三首

たけばぬれたかねば長き妹が髪このごろ見ぬにかかげつらむか(三方沙彌)

人皆は今は長しとたけといへど君が見し髪亂れたりとも(元娘子)

橘のかげふむ道のやちまたにものをぞ思ふ妹にあはずて(三方沙彌)

柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與二人麿一相別歌一首

な思ひそと君はいへどもあはむ時いつと知りてかあが戀ひざらむ

有間皇子自傷結二松枝一歌二首

磐代の濱松が枝を引きむすびまさきくあらば又かへり見む

家にあれば笥にもるいひを草枕旅にしあれば椎の葉にもる

天皇聖躬不豫之時大后奉御歌一首

天の原ふりさけみれば大君のみいのちは長く天たらしたり

一書曰近江天皇聖體不豫御病急時太后奉獻御歌一首

青旗のこはたの上を通ふとは目に見ゆれどただにあはぬかも

天皇崩之時太上天皇御製歌

北山にたなびく雲のあを雲の星離り行き月も離りて

大津皇子薨之後大來皇女從二伊勢齋宮一上レ京之時御歌二首

神風の伊勢の國にもあらましを何しか來けむ君もあらなくに

見まくほりわがする君もあらなくに何しか來けむ馬疲るるに

移二葬大津皇子屍於葛城二上山一之時大來皇女哀傷御作歌二首

うつそみの人なる吾や明日よりは二上山をいもせとわが見む

磯の上に生ふる馬酔木(あしび)を手折らめど見すべき君がありといはなくに

皇子尊宮舍人等慟傷作歌十二首

高光るわが日の皇子の萬代に國知さまし島の宮はも

よそに見し眞弓の岡も君ませばとこつ御門ととのゐするかも

天地と共にをへむと思ひつつ仕へまつりし心たがひぬ

朝日照る佐田の岡邊に群れゐつつ吾が泣く涙やむ時もなし

みたたしし島を見る時にはたづみ流るる涙とめぞかねつる

橘の島の宮には飽かねかも佐田の岡邊にとのゐして行く

とくら立て飼ひし雁の子巢立ちなば眞弓の岡に飛びかへり來ね

み立たしし島の荒磯(ありそ)を今日見れば生ひざりし草おひにけるかも

東の瀧の御門にさもらへど昨日も今日も召すこともなし

水傳ふ磯の浦回(み)の岩躑躅むく咲く道をまた見なむかも

朝日照る島の御門におほほしく人音もせねばまうら悲しも

朝日照る佐田の岡邊に鳴く鳥の夜鳴きかはらふこの年頃を

柿本朝臣人麿在二石見國一臨レ死時自傷作歌一首

鴨山の磐根しまけるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ

巻三

天皇御二遊雷岳一之時柿本朝臣人麿作歌一首

大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも

天皇賜二志斐嫗一御歌一首

否と云へど強ふる志斐のが頃語この語聞かずて吾戀ひにけり

志斐嫗奉レ和歌一首

否といへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは申せ強語(しひごと)とのる

長忌寸意吉麿應レ詔歌一首

大宮のうちまで聞ゆ網引(あびき)すと網子(あこ)ととのふる海人の呼聲

弓削皇子遊二吉野一時御歌一首

瀧の上の三船の山にゐる雲の常にあらむとわが思はなくに

柿本朝臣人麻呂歌一首

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ

志貴皇子御歌一首

むささびはこぬれもとむと足引の山のさつをにあひにけるかも

高市連黒人羈旅歌五首

旅にして物戀ひしきに山下の赤のそほ船沖に漕ぐ見ゆ

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道にわかれかねつる

櫻田へ鶴(たづ)鳴き渡るあゆち潟潮干にけらし鶴(たづ)鳴きわたる

四極(しはつ)山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無(たななし)小舟(をぶね)

磯の崎漕ぎたみ行けば近江の湖(みぞ)八十の湊に鶴さはに鳴く

春日藏首老歌一首

燒津(やきつ)邊にわが行きしかば駿河なる阿倍の市道(いちぢ)にあひし兒等かも

幸二志賀一時石上卿作歌一首

ここにして家やもいづく白雲のたなびく山を越えて來にけり

角兒麿歌

清江(すみのえ)の岸の松原とほつ神我が大君のいでましどころ

田口益人大夫任二上野國司一時至二駿河淨見埼一作歌二首

いほ原の清見が崎の三保の浦のゆたけき見つつもの思もなし

晝見れど飽かぬ田子の浦大君のみことかしこみ夜見つるかも

中納言安倍廣庭卿歌一首

子等が家道(ぢ)ややま遠きをぬばたまの夜渡る月に競ひあへむかも

柿本朝臣人麿下二筑紫國一時海路作歌一首

大君の遠のみかどとあり通ふ島門(しまと)を見れば神代し思ほゆ

門部王詠二東市之樹一作歌一首

ひむがしの市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ戀ひにけり

波多朝臣少足歌一首

さざれ波磯こせぢなる能登瀬川音のさやけさたぎつ瀬ごとに

或娘子等贈二裏乾鰒戯請一通觀僧之咒願一時通觀作歌一首

わたつみの沖に持ゆきて放つともうれむぞこれがよみがへりなむ

太宰少貳小野老朝臣歌一首

青丹よし寧樂(なら)の都は咲く花のにはふが如く今盛りなり

沙彌滿誓詠レ綿歌一首

しらぬひ筑紫の綿は身につけて未だは着ねどあたたけく見ゆ

山上臣憶良罷レ宴歌一首

憶良らは今はまからむ子泣くらむその彼の母も吾(あ)を待つらむぞ

太宰帥大伴卿讃レ酒歌十三首

しるしなき物を思はずは一杯(つき)の濁れる酒を飲むべくあらし

酒の名を聖とおほせし古への大き聖の言のよろしさ

古への七の賢(さか)しき人たちも欲(ほ)りせしものは酒にしあらし

賢(さか)しみと物いふよりは酒飲みて醉ひなきするしまさりたるらし

言はむすべせむすべ知らに極まりて貴きものは酒にしあらし

なかなかに人とあらずは酒壺になりてしがも酒に染みなむ

あなみにくさかしらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む

價なき寶といふとも一杯(ひとつき)の濁れる酒に豈まさらめや

夜光る玉といふとも酒飲みて心をやるに豈しかめやも

世の中の遊びの道に樂しきは醉ひなきするにあるべかるらし

この世にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にも吾はなりなむ

うまるればつひにも死ぬるものにあればこの世なる間は樂しくをあらな

もだをりてさかしらするは酒飲みてゑひ泣するにまさほ及かずけり

沙彌滿誓歌一首

世の中を何に譬へむあさびらき漕ぎにし船の跡なきごとし

山部宿禰赤人歌一首

武庫の浦を漕ぎたむ小舟粟島をそがひに見つつ乏しき小舟

笠朝臣金村塩津山作歌一首

丈夫(ますらを)の弓末(ゆすゑ)振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐがね

石上大夫歌一首

大船に眞梶しじぬき大君のみことかしこみ磯みするかも

和歌一首

もののふの臣(おみ)のをとこは大君のまけのまにまに聞くとふものぞ

湯原王芳野作歌一首

よしぬなる夏みの川よどに鴨ぞなくなる山かげにして

湯原王宴席歌一首

青山の峯の白雲朝にけに常に見れどもめづらしわぎみ

筑紫娘子贈二行旅一歌一首

家思ふと心進むな風まもりよくしていませ荒きその路

金明軍歌一首

標ゆひてわが定めてし住吉の濱の小松は後もわが松

笠郎女贈二大伴宿禰家持一歌一首

みちのくの眞野のかや原遠けども面影にして見ゆとふものを

娘子報二佐伯宿禰赤麻呂一贈歌一首

ちはやぶる神の社しなかりせば春日の野べに粟まかましを

河内王葬二豐前國鏡山一之時手持女王作歌

石戸わる手力もがもたよわき女にしあれはすべの知らなく

豐國の鏡の山の石戸たてこもりにけらし待てど來まさぬ

天平二年十二月太宰帥大伴卿向レ京上レ道之時作歌

わぎも子が見しともの浦のむろの木はとこ世にあれど見し人ぞなき

妹と來し敏馬の埼をかへるさにひとりし見れば涙ぐましも

還二入故郷家一卽作歌

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

吾妹子が植ゑし梅の木見る毎に心むせつつ涙し流る

妹として二人つくりし吾がしまは木高く繁くなりにけるかも

十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲二傷亡妾一作歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむを如何にか獨り長き夜を寢む

悲緒未レ息更作歌

かくのみにありけるものを妹も吾も千歳の如く頼みたりけり

佐保山にたなびく霞見るごとに妹を思出泣かぬ日はなし

昔こそよそにも見しかわぎも子がおくつきと思へばはしき佐保山

十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿禰家持作歌一首

あしびきの山さへひかり咲く花の散りぬる如き吾が大君かも

巻四

額田王思二近江天皇一作歌

君待つとわが戀ひをればわがやどのすだれ動かし秋の風吹く

柿本朝臣人麻呂歌三首

三熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも

いにしへにありけむ人もわが如か妹に戀ひつついねがてにけむ

今のみのわざにはあらずいにしへの人ぞまさりて音にさへ泣きし

碁檀越住二伊勢國一時留妻作歌一首

神風の伊勢の濱荻折りふせて旅寢やすらむあらき濱邊に

柿本朝臣人麻呂歌二首

をとめらが袖ふる山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき吾は

夏野行く牡鹿の角のつかの間も妹が心を忘れて思へや

安倍女郎歌二首

今更に何をか思はむうちなびき心は君によりにしものを

わがせこはものな思ひそ事しあらば火にも水にも吾なけなくに

阿倍女郎歌一首

わがせこがけせる衣の針目おちず入りにけらしなわが心さへ

大納言兼大將大伴卿歌一首

神樹にも手は觸るちふをうつたへに人妻といへばふれぬものかも

藤原宇合大夫遷レ任上レ京時常陸娘子贈歌一首

庭に立ち麻を苅りほししきしぬぶ東女(あづまをみな)を忘れたまふな

大伴坂上郎女和歌

佐保川のさざれ踏み渡りぬば玉の黒駒の來る夜は年にもあらぬか

千鳥なく佐保の河瀬のさざれ浪やむ時もなしあが戀ふらくは

來むといふも來ぬ時あるを來じといふを來むとは待たじ來じといふものを

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任餞二于筑前國蘆城驛家一歌

天地の神も助けよ草枕たびゆく君が家にいたるまで

大伴宿奈麿宿禰歌一首

うちひさす宮に行く兒をまかなしみ留むれば苦しやればすべなし

太宰帥大伴卿贈二大貳丹比縣守卿遷一任民部卿一歌一首

藤原宇合大夫遷レ任上レ京時常陸娘子贈歌一首

庭に立ち麻を苅りほししきしぬぶ東女(あづまをみな)を忘れたまふな

大伴坂上郎女和歌

佐保川のさざれ踏み渡りぬば玉の黒駒の來る夜は年にもあらぬか

千鳥なく佐保の河瀬のさざれ浪やむ時もなしあが戀ふらくは

來むといふも來ぬ時あるを來じといふを來むとは待たじ來じといふものを

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任餞二于筑前國蘆城驛家一歌

天地の神も助けよ草枕たびゆく君が家にいたるまで

大伴宿奈麿宿禰歌一首

きつる

八百日(やほか)行く濱の眞砂もわが戀に豈まさらじか沖つ島守

夕されば物思ひまさる見し人の言問ふ姿面影にして

伊勢の海の磯もとどろによする浪かしこき人に戀ひわたるかも

思ふにし死にするものにあらませば千度ぞわれは死にかへらまし

劍太刀身にとりそふと夢に見つ何のしるしぞも君に逢はむため

天地の神しことわりなくばこそわがもふ君にあはず死にせめ

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづく如し

大伴宿禰家持和歌二首

今更に妹にあはめやと思へかもここだ我胸おほほしからむ

なか〳〵にもだもあらましを何すとか相見そめけむ遂げざらなくに

湯原王贈二娘子一歌一首

目には見て手には取らえぬ月のうちの桂のごとき妹をいかにせむ

大伴坂上郎女歌五首

ひさかたの天の露霜おきにけり家なる人も待ち戀ひぬらむ

玉守に玉はさづけてかつがつも枕と吾はいざふたりねむ

ものいひのかしこき國ぞくれなゐの色にないでそおもひ死ぬとも

今は吾は死なむよわが背生けりともわれによるべしといふと言はなくに

青山を横ぎる雲のいちじろくわれと笑(ゑ)まして人に知らゆな

廣河女王歌二首

戀草を力車に七車積みて戀ふらくわが心から

戀は今はあらじと吾は思へるをいづくの戀ぞ攫(つか)みかかれる

河内百枝娘子贈二大伴宿禰家持一歌

ぬば玉のその夜の月夜けふまでにわれは忘れず間なくし思へば

豐前國娘子大宅女歌一首

夕やみは道たづたづし月待ちていませ吾が背子その間にも見む

安都扉娘子歌一首

み空行く月の光にただ一目相見し人の夢(いめ)にし見ゆる

丹波大女郎子歌二首

かも鳥のあそぶこの池に木の葉散りて浮べる心吾が思はなくに

うまざけを三輪のはふりがいはふ杉手觸れし罪か君にあひがたき

大伴宿禰家持贈二娘子一歌一首

千鳥鳴く佐保の川門(かはと)の清き瀬を馬うち渡しいつか通はむ

大伴宿禰家持贈二坂上家大孃一歌一首

人もなき國もあらぬか吾妹子とたづさひ行きてたぐひて居らむ

大伴坂上大孃贈二大伴宿禰家持一歌一首

わが名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立てば惜しみこそ泣け

又家持和二坂上大孃一歌一首

月夜には門に出で立ち夕占(ゆふけ)問ひ足卜(あうら)をぞせし行かまくを欲り

在二久邇京一思下留二寧樂宅一坂上大孃上大伴宿禰家持作歌一首

ひとへ山へなれるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ

巻五

梅花歌(大伴旅人の作?山上憶良の作?)

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ來るかも

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつつ遊びくらさな

梅の花咲きて散りなばさらく花つぎて咲くべくなりにてあらずや

霞立つ永き春日をかざせれどいや懐しき梅の花かも

わがさかりいたくくだちぬ雲に飛び藥はむとも又をちめやも

梅の花夢にかたらくみやびたる花と吾思(あれも)ふ酒にうかべこそ

遊二於松浦河一序(旅人の作?憶良の作?)

あさりする海(あま)人の子供と人はいへど見るに知らえぬうまびとの子と

答詩曰

玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき

詠二領巾麾嶺一歌一首(旅人の作?憶良の作?)

とほつ人松浦佐用媛(らさよひめ)つまごひに領巾振りしより負へる山の名

聊二布私懐一歌一首(憶良作)

あまざかるひなに五年すまひつつ都の手ぶり忘らえにけり

巻六

大伴坂上郎女與下姪家持従二佐保一還中歸西宅上歌一首

わが背子が着(け)る衣うすし佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで

大伴坂上郎女宴二親族一歌一首

かくしつつ遊び飲みこそ草木すら春は咲きつつ秋はちりぬる

大伴坂上郎女月歌二首

ぬば玉の夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ

山の端のささらえ男天の原とわたる光見らくしよしも

市原王宴禱二父安貴王一歌一首

春草は後はうつろふ巖(いはほ)なすときはにいませ貴きわ君

大伴宿禰家持初月歌一首

ふりさけて三日月見れば一目見し人の眉引思ほゆるかも

六年甲戌海犬養宿禰岡麿應レ詔歌一首

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば

春三月幸二于難波宮一之時歌一首

丈夫は御獵に、たし少女等は赤裳すそ引く清き濱びを

按作付主益人歌一首

思ほえず來ませる君を佐保川のかはづ聞かせずかへしつるかも

市原王悲二獨子一歌一首

言問はぬ木すら妹と兄(せ)ありとふをただ獨子にあるが苦しさ

冬十一月左大臣葛城王等賜二姓橘氏一元時御製歌一首

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉(とこは)の樹

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知れらば知らずともよし

十六年甲申春正月十一日登二活道岡一集二一株松下一飲歌一首

一つ松幾代か經ぬる吹く風の聲の澄めるは年深みかも

傷二惜寧樂京荒墟一作歌

世の中を常なきものと今ぞ知るならの京師の移ろふ

見れば

巻七

詠レ天　（人麿歌集に出づ）

天の海に雲の浪立ち月の船星の林にこぎ隱る見ゆ

詠レ月

常は曾(かつ)て思はぬものをこの月の過ぎかくれまく惜しき宵かも

明日の夕照らむ月夜は片寄りに今宵によりて夜長からなむ

ぬば玉の夜わたる月をおもしろみ吾が居る袖に露ぞ置きにける

水底(みなそこ)の玉さへさやに見ゆべくも照る月夜かも夜の更け行けば

妹があたりわが袖振らむ木の間より出で來る月に雲なたなびき

靫(ゆき)かくるとものを廣き大伴に國榮えむと月は照るら

し

詠レ雲　（人麿歌集に出づ）

あしびきの山河の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲たちわたる

×

大海に島もあらなくに海原のたゆたふ浪に立てる白雲

（作者未詳）

詠レ山

いにしへの事は知らぬをわが見ても久しくなりぬ天の香久山

×

大君の御笠の山の帶にせる細谷川の音のさやけさ

さひのくま檜隈(ひのくま)川の瀬をはやみ君が手取らばことよせむかも

詠レ蘿

みよしぬの青根が峯のこけむしろ誰か織りけむ經緯(たてぬき)なしに

思二故郷一

清き瀬に千鳥妻呼び山のまに霞立つらむ神南備の里

詠二和琴一

琴取れば嘆先立つ蓋しくも琴の下樋に妻やこもれる

山背作

宇治川を船渡せをと呼ばへども聞えざるらし機の音もせず

攝津作

しなが鳥猪名野を來れば有間山夕霞立ちぬ宿はなくして

難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ

羈旅作

家さかり旅にしあれば秋風の寒きゆふべに雁鳴きわたる

夕なぎにあさりする鶴潮滿てば沖浪高みおのが妻呼ぶ

今日もかも沖つ玉藻は白浪の八重をるが上に亂れてあらむ

ささなみの連庫山に雲ゐれば雨ぞ降るちふかへり來わがせ

夏麻引く海上潟のおきつ洲に鳥はすだけど君は音もせず

若狹なる三方の海の濱清みい行きかへらひ見れど飽かぬかも

夫の山にただに向へる妹の山ことゆるせやも打橋わたす

磯の上に爪木折り燒き汝がためと吾がかづき來し沖つ白玉

沖つ波邊つ藻まきもち寄せ來とも君にまされる玉寄せめやも

小夜更けて夜中の方におほほしく呼びし舟人はてにけむかも

風早の三穗の浦廻を漕ぐ舟の船人さわぐ浪立つらしも

あまざらひひかた吹くらしみづぐきのをかの水門にあさなみの

波立ちわたる

をとめらが織る機のへを眞櫛もてかかげたく島波間より見ゆ

波高しいかに梶取水鳥の浮寢やすべきなほや漕ぐべき

問答

佐保川に鳴くなる千鳥何しかも川原をしぬびいや川上る

人こそはおほにもいはめ我がここだしぬぶ川原をしめ結ふなゆめ

臨時

道の邊の草深百合の花ゑみに笑みしかがらに妻といふべしや

あかときと夜烏鳴けどこの山上の木末が上は未だ靜けし

卷向の山邊とよみてゆく水のみなわのごとし世の人我は

旋頭歌

君がため手力疲れ織りたる衣を春さらばいかなる色に摺りてばよけむ

春日すら田に立ち疲る君はかなしも若草の妻なき君が田に立ち疲る

水門の葦のうら葉を誰か手折りしわが背子が袖ふる見むと吾ぞ手折りし

海の底沖つ玉藻のなのりその花妹と吾とここにしありとなのりその花

この岡に草刈るわらはしかな刈りそねありつつも君が來まさむ御秣にせむ

あられ降り遠つあふみの吾跡川楊苅れどもまたも生ふちふあど川楊

春日なる御笠の山に月の船出づみやびをの飲む盃に影に見えつつ

寄二日本琴一

膝にふす玉の小琴の事なくば甚だここだあれ戀ひめ

やも

寄レ玉

わたの底しづく白玉かぜ吹きて海は荒るともとらずばやまじ

寄レ木

天雲のたなびく山のこもりたる吾が下心木の葉知るらむ

寄レ草

冬ごもり春の大野を燒く人は燒きたらねかも吾が心やく

月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも

寄レ雷

天雲に近くひかりてなるかみの見ればかしこし見ねば悲しも

×

さきはひのいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が聲を聞く

卷八

志貴皇子懽御歌一首

石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも

駿河采女歌一首

沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも

尾張連歌一首

うち靡く春來るらし山の間の遠き木末の咲き行く見れば

山部赤人歌三首

春の野にすみれ摘みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜ねにける

わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れれば

あすよりは若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつつ

厚見王歌一首

かはづ鳴く甘南備川にかげ見えて今や咲くらむ山吹の花

大伴宿彌家持鶯歌一首

うちきらし雪は降つゝしかすがに吾家の園に鶯鳴くも

高田女王歌一首

山吹の咲きたる野邊のつぼすみれこの春の雨に盛りなりけり

笠女郎贈二大伴家持一歌一首

水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくも思ほゆるかも

藤原朝臣廣嗣櫻花贈二娘子一歌一首

この花の一瓣のうちに百種の言ぞこもれるおほろかにすな

紀女郎贈二大伴宿彌家持一歌

わけが爲吾が手もすまに春の野にぬける茅花ぞめしてこえませ

大伴家持晩蟬歌一首

こもりのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば來鳴く茅蜩

大伴書持歌一首

わが宿に月おし照れりほととぎすこころあらば今宵來鳴きとよもせ

大伴家持霍公鳥歌一首

夏山の木末のしげにほととぎす鳴きとよむなる聲の遙けさ

大伴坂上郎女歌一首

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ戀は苦しきものを

崗本天皇御製歌一首

夕されば小倉の山に鳴く鹿の今宵は鳴かずいねにけ

らしも

穗積皇子御歌一首

今朝のあさけ雁が音聞きつ春日山もみぢにけらし我が心痛し

山上臣憶良詠二秋野花一二首

秋の野に咲きたる花をおよび折りかき數ふれば七種の花

萩が花尾花葛花撫子の花女郎花又藤袴朝顔の花

太宰帥大伴卿歌一首

わが岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも

湯原王蟋蟀歌一首

夕づく夜心もしぬに白露の置くこの庭に蟋蟀鳴くも

安貴王歌一首

秋立ちて幾日もあらねばこの寢ぬるあさけの風は袂寒しも

忌部首黒麿歌一首

秋田苅る假庵も未だ壞たねば雁が音寒し霜もおきぬがに

日置長枝娘子歌一首

秋づけば尾花が上に置く露の消ぬべくも吾は思ほゆるかも

藤原朝臣八束歌一首

春日野にしぐれ降る見ゆ明日よりは黄葉かざさむ高圓の山

橘朝臣奈良麿結二集宴一歌

もみぢ葉を散らす時雨に濡れて來て君が黄葉をかざしつるかも

大伴宿彌家持秋歌二首

秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けりさ牡鹿の朝たつ野邊の秋萩に玉と見るまで置ける白露

大伴田村大嬢與二坂上大嬢一歌一首

わが宿の秋の萩咲く夕影に今も見てしが妹が姿を

若櫻部朝臣君足雪歌一首

天霧らし雪も降らぬかいちじろくこの楸柴に降らまくを見む

紀少鹿女郎歌一首

ひさかたの月夜を清み梅の　心に咲きてわが思へる君

巻九

崗本宮御宇天皇幸　紀伊國一時歌二首

妹がためわれ玉拾ふ沖邊なる玉よせ持ち來沖つ白浪朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりや君が山道越ゆらむ

後人歌

あさもよし紀へゆく君がまつち山こゆらむ今日ぞ雨なふりそね

宇治河作歌一首

巨椋の入江とよむなりいめ人の伏見が田井に雁渡る

らし

献二弓削皇子一歌一首

さ夜中と夜は更けぬらし雁がねのきこゆる空に月わたる見ゆ

幸二芳野離宮一時歌一首

落ちたぎち流るる水の岩に觸りよどめる淀に月の影見ゆ

槐本歌一首

さざなみの比良山風の海吹けば釣りする海人の袖かへる見ゆ

石河大夫遷レ任上レ京時播磨娘子贈歌一首

君なくばなど身よそはむくしげなるつげの小櫛も取らむとも思はず

巻十

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

子らが手を巻向山に春されば木の葉しぬぎて霞たなびく
かぎろひの夕さりくればさつびとの弓月が嶽に霞たなびく
子らが名にかけのよろしき朝妻のかた山岸に霞たなびく

詠レ鳥

梅の花咲ける岡邊に家居ればともしくもあらず鶯の聲
春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも
冬ごもり春さり來らし足引の山にも野にも鶯鳴くも

詠レ雪

君がため山田の澤に芹ぐつむと雪消の水に裳のすそ濡れぬ
梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の羽白妙にあわ雪ぞ降る

詠レ霞

きのふこそ年ははてしか春霞春日の山にはや立ちにけり

詠レ柳

淺綠染め懸けたりと見るまでに春の柳は萠えにけるかも
朝なさな吾が見る柳うぐひすの來ゐて鳴くべき森に早なれ

詠レ花

能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも
春雨にあらそひかねてわが宿のさくらの花は咲きそめにけり
櫻ばな時はすぎねど見る人の戀のさかりと今し散るらむ
いつしかもこの夜のあけむ鶯の木づたひ散らす梅の花見む

詠レ月

春されば木のくれ多み夕月夜おぼつかなしも山かげにして

詠レ煙

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ摘みて煮らしも

野遊

ももしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてここに集へる

×

春山の霧にまどへる鶯もわれにまさりて物思はめめ
霞たつ春の永き日戀ひ暮し夜の深け行きて妹にあへるかも

寄レ霞

戀ひつつも今日は暮しつ霞たつ明日の春日を如何に暮さむ

寄レ雨

春雨に衣はいたく通らめや七日しふらば七夜來じとや

我こそはにくくもあらめわがやどの花橘を見には來じとや

詠レ鳥

ほととぎす鳴く聲聞くや卯の花の咲き散る岡に葛引く少女
ほととぎす今朝のあさけに鳴きつるは君聞きけむか朝寢かねけむ
この夜らのおぼつかなきにほととぎす鳴くなる聲の音のはるけさ
五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かぬかも

七夕

久方の天つしるしとみなし川隔てておきし神代しうらめし
天の川みこもり草の秋風になびくを見れば時は來ぬらし
秋風の吹きただよはす白雲はたなばたつめの天つひ

れかも
足玉も手玉もゆらに織るはたを君が御衣に縫ひあへむかも
天の川河内八十ありいづくにか君が御船を吾が待ち居らむ

詠レ花

このゆふべ秋風吹きぬ白露にあらそふ萩の明日咲かむ見む
秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に
我が宿の萩のうれ長し秋風の吹きなむ時に咲かむと思ひて
秋萩の戀も盡きねばさを鹿の聲いつぎいつぎ戀こそまされ
人皆は萩を秋といふよしわれは尾花がうれを秋とはいはむ

詠レ鴈

秋風に大和へ越ゆるかりがねはいや遠ざかる雲がくりつつ

詠二蟋蟀一

かげ草の生ひたる宿の夕影に鳴くこほろぎは聞けどあかぬかも
庭草に村雨ふりてこほろぎの鳴く聲聞けば秋づきにけり

詠レ河

夕さらずかはづ鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくしよしも

詠レ月

思はぬにしぐれの雨は降りたれど天雲はれて月夜さやけし
白露を玉になしたるなが月の在明の月夜見れど飽かぬかも
長月のしぐれの雨の山ぎりのいぶせき吾がむね誰を見ばやまむ

たぞかれと我をな問ひそなが月の露にぬれつつ君待つ吾を

寄レ月

君に戀ひしなえうらぶれわが居れば秋風吹きて月傾きぬ
祝部等がいはふ社のもみぢ葉も標繩越えて散るとふものを
巻向の檜原もいまだ雲ゐねば小松がうれゆ沫雪ながる
あしびきの山道も知らず白檀の枝もとををに雪の降れれば

詠二黄葉一

矢田の野の淺茅色づく有乳山峰の沫雪寒く降るらし

×

雨ふればたぎつ山川岩にふり君がくだかむこころはもたじ

寄レ霜

はなはだも夜深けてな行き道の邊のゆ笹がうへに霜のふる夜を

寄レ雪

わがせこが言うつくしみ出でて行かば裳ひきしるけむ雪なふりそね
あま小舟泊瀬の山に降る雪のけながく戀し君が音ぞする

巻十一

旋頭歌

新室の壁草苅りにいまし給はね草のごとよりあふ少女は君がまにまに
新室を踏みしづむ子が手玉鳴らすも玉のごと照らせる君を内へと申せ
長谷のゆ槻がもとにあがかくせる妻あかねさし照れる月夜に人見てむかも
丈夫の思ひみだれてかくせるその妻天地に通り照る

ともあらはれめやも
玉垂の小簾のすげきに入り通ひ來ねたらちねの母が
問はさば風とまをさむ

×

たらちねの母が手はなれかくばかりすべなき事は未
だせなくに
いつはしも戀ひぬ時とはあらねども夕片まけて戀は
すべなし
吾ゆのちうまれむ人はあが如く戀ひする道にあひこ
すなゆめ
うちひさす宮道を人は滿ちて行けどわが思ふ君はた
だ一人のみ
巖すら行きとほるべきますらをも戀とふことは後悔
いにけり
誰ぞ此わが宿に來よぶたらちねの母にころばえ物思
ふあれを
ますらをは友のさわぎに慰さむる心もあらむを吾ぞ

苦しき
百世しも千代しも生きてあらめやも我がもふ妹をお
きてなげかむ
行けど行けど逢はぬ妹ゆゑひさかたの天の露霜に濡
れにけるかも

×

天地といふ名の絶えてあらばこそ汝と吾と逢ふこと
やまめ
月見れば國は同じぞ山へだてうつくし妹がへなりた
るかも
ありそ越えほかゆく浪のほかごころ吾は思はじ戀ひ
て死ぬとも
大船の香取の海にいかりおろしいかなる人か物思は
ざらむ
大土も採れば盡くれど世の中に盡きせぬものは戀に
しありけり
ぬば玉の黒髪山の山菅に小雨ふりしきしくしく思ほ

ゆ
逢ひ見ては面かくさるるものからにつぎて見まくの
ほしき君かも
朝寢髪われは梳らじうつくしき君が手枕觸りてしも
のを
あぢきなく何のたはこと今更にわらはごとする老人
にして

×

劍太刀もろ刃の利きに足ふみて死にも死なむ君に
よりてば
梓弓引きみ弛べみ來ずば來ず來ばぞそをなど來ずば
來ばそを
ともし火のかげにかがよふうつせみの妹がゐまひし
面影に見ゆ
小はり田の坂田の橋のくづれなば桁より行かむな戀
ひそわぎも
かにかくにものは思はず飛驒人のうつ墨繩のただ一

道に
難波人葦火たく屋のすしてあれど己が妻こそ常めづ
らしき
馬の音のとどともすれば松蔭に出でてぞ見つるけだ
し君かも
爭へば神もにくまずよしゑやしよそふる君がにくか
らなくに
窓越しに月おし照りて足引のあらし吹く夜は君をし
ぞ思ふ
浪間より見ゆる小島の濱久木久しくなりぬ君に逢は
ずして
伊勢の海人の朝な夕なにかづくとふ鰒の貝の片思ひ
にして
あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながき長夜をひと
りかも寢む
ちはやふる神の齋垣もこえぬべし今はわが名の惜し
けくともなし

あしびきの山鳥の尾の一峰(ひとを)こそ一目見し兒に戀ふべきものか

ものゝふの八十宇治川の早き瀬に立ちえぬ戀も吾はするかも

牛窓の浪の鹽さゐ島よみみよせてし君にあはずかもあらむ

波の間ゆ見ゆる小島の濱ひさぎ久しくなりぬ君にあはずして

みさごゐる渚に居る船の夕潮を待つらむよりは吾こそまされ

巻十二

（人麿歌集に出づ）

新墾(にひばり)の今つくる道さやかにも聞きにけるかも妹が上のことを

×

人妻に言ふは誰がことさ衣のこの紐解けといふは誰がこと

天地に少し至らぬますらをと思ひし吾や雄心(をごころ)もなき

うつせみのうつしごろも吾は無し妹を逢ひ見ずて年の經ぬれば

うつせみの常の言葉と思へどもつぎてし聞けば心まどひぬ

人の見てこと咎めせぬ夢に吾(あれ)今宵いたらむ宿さすなゆめ

玉かつま逢はむと言ふは誰なるかあへる時さへ面かくしする

うつつにか妹が來ませる夢にかもわれかまどへる戀のしげきに

綠兒のためこそ乳母(おも)は求むとふ乳飲めや君がおも求むらむ

悔しくも老いにけるかも我がせこが求むる乳母(おも)に行かましものを

×

年の經ば見つつしぬべと妹がいひし衣の縫目見れば

かなしも

まそ鏡ただめに君を見てばこそ命にむかふ吾が戀やまめ

たらちねの母が飼ふ蠶の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて

ひさかたの天つみ空に照れる日の失せなむ日こそ吾が戀やまめ

朝なさな草の上白くおく露の消(け)なば共にといひし君はも

妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くなまたかへり見む

馬柵(うまし)越しに來はむ駒ののらゆれどなほし戀ふらくしぬびかねつも

さひのくま檜隈川(ひのくまがは)に馬(こま)とめて馬に水かへわれよそに見む

思はぬを思ふといはばまとり住む雲梯(うなで)の森の神し知らさむ

紫は灰さすものぞ海石榴市(つばいち)のやその衢(ちまた)にあへる子や誰

×

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど道行く人を誰と知りてか

×

み雪ふる越の大山行き過ぎていづれの日にかわが里を見む

いでわが駒早く行きこそまつち山待つらむ妹を行きてはや見む

×

草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも

春日なる三笠の山にゐる雲を出で見るごとに君をしぞ思ふ

巻十四

東歌

筑波嶺のにひぐはまよのきぬはあれど君がみけしし
あやに着ほしも
筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき子ろが布(にぬ)
ほさるかも

相聞

駿河の海おしべに生ふる濱つづらいましをたのみ母
にたがひぬ
鎌倉のみこしの崎の岩くゑの君がくゆべき心は持た
じ
足がりのとひの河内に出づる湯のよにもたよらに子
ろがいはなくに
多摩川にさらすてづくりさらさらになにぞこの子の
ここだかなしき
こひしけば袖を振らむを武藏野のうけらが花の色に
づなゆめ
にほどりの葛飾早稲(かつしかわせ)をにへすともそのかなしきを外
に立てめやも

足(あ)の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やまず通
はむ
足がりのとひのかふちにいづる湯の世にもたよらに
子ろが言はなくに
筑波嶺のをてもこのもにもりべすゑ母は守れども魂
ぞあひにける
信濃路はいまのはり道かりばねに足ふましむなくつ
はけわがせ
信濃なる千曲の川のさざれしも君しふみてば玉と拾
はむ
伊香保嶺に神な鳴りそねわがへには故はなけれども
子らによりてぞ
かみつけぬ伊香保の嶺ろにふろ雪の行き過ぎがてぬ
いもが家のあたり
みちのくのあだたら眞弓はじきおきてせらしめきな
ばつらはかめかも

相聞

つむが野に鈴が音きこゆかむしだの殿のなかちしと
がりすらしも
この川に朝菜洗ふ子汝(なれ)も我(あれ)もよちをぞ持てるいで子
たばりね
おもしろき野をばな燒きそ古草に新草まじり生ひば
おふるがに
稻つけばかがるわが手をこよひかも殿のわく子がと
りてなげかむ
誰ぞこの屋の戸おそぶるにふなみにわがせをやりて
いはふこの戸を
柳こそ伐れば生えすれ世の人の戀に死なむをいかに
せよとぞ
新室のこどきに至ればはたすすき穗に出し君が見え
ぬこの頃
あがおもの忘れむしだは國はぶり嶺に立つ雲を見つ
つしぬばせ
みそらゆく雲にもがもな今日ゆきて妹にことどひ明
日歸りこむ
烏とふおほをそ鳥のまさでにも來まさぬ君をころ來
とぞ鳴く
水鳥の立たむよそひに妹のらにもの言はず來にて思
ひかねつも
沼二つかよは鳥が巢あがこころ二ゆくなもとな思は
りそね

防人歌

葦の葉に夕霧立ちて鴨が音のさむきゆふべし汝(な)をば
しぬばむ
おの妻を人のさとに置きおほほしく見つつぞ來ぬる
この道のあひだ

巻十五

天平八年丙子夏六月遣二使新羅國一之時使人等各悲レ別贈答及海路之上慟レ情陳レ思作歌並當レ所誦詠之
古歌

武庫の浦の入江の渚鳥(すどり)はぐくもる君をはなれて戀に死ぬべし
君が行く海邊の宿に霧立たばあがたち歎くいまと知りませ
秋さらばあひ見むものを何しかも霧に立つべく歎きしまさむ
大船をあるみに出しいます君つつむことなくはやかへりませ
まさきくと妹がいははば沖つ波千重に立つともさはりあらめやも
わが故におもひな痩せそ秋風の吹かむその月あはむもの故
あさびらき漕ぎ出(で)て來れば武庫の浦の潮干の潟にたづが聲すも
海原を八十島がくり來ぬれども奈良の都は忘れかねつも
月よみの光を清み神島(かみしま)の磯回(いそみ)の浦ゆ船出すわれは

安藝國長門島舶泊磯邊作歌一首
山川の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも
從二長門浦一舶出之夜仰二觀月光一作歌三首
月よみの光を清み夕なぎにかこの聲呼び浦み漕ぐかも
山のはに月傾けばいざりするあまのともし火沖になづさふ
われのみや夜船は漕ぐと思へれば沖べのかたに樅のおとすなり
過二大島鳴門一而經二再宿(フタヨ)一之後追作歌一首
これやこの名におふ鳴門のうづしほに玉藻かるとふ海人少女ども(田邊秋庭作)
佐婆海中忽遭二逆風漲浪一○漂流經レ宿而後幸得二順風一到二着豐前國下毛郡分間浦一於レ是迫怛艱難一悽惆作歌二首
海原の沖邊にともしいざる火はあかしてともせ大和島見む

ぬば玉の夜渡る月ははやも出でぬかも海原の八十島のうへゆ妹があたり見む
七夕仰二觀天漢一各陳レ所レ思作歌
秋萩に匂へるわが裳ぬれぬとも君がみ船の綱しとりてば
海邊望レ月作歌三首
妹を思ひいのねらえぬにあかときの朝霧ごもりかりがねぞ啼く
ゆふされば秋風さむしわぎもこが解き洗ひごろも行きてはや着む
わが旅は久しくあらしこのあが着る妹が衣のあかつく見れば
到二筑前國志麻郡之韓亭一舶泊經二三日一於レ時夜月之光皎皎流照奄對二此華一旅情悽噎陳二心緒一聊以裁歌
唐どまり能許(のこ)の浦浪立たぬ日はあれども家にこひぬ日はなし
引津亭舶泊之夜作歌一首(大判官作)
沖つ波たかくたつ日にあへりきと都の人は聞きてけむかも
天飛ぶや雁を使に得てしがも奈良の都にことつげやらむ
肥前國松浦郡狛島亭舶泊之夜遙望二海浪一慟二旅心一作歌
足引の山飛び越ゆるかりがねは都に行かば妹に逢ひて來ぬ
竹敷(たかしき)の玉藻なびかし漕ぎでなむ君が御船をいつとか待たむ
中臣朝臣宅守與二狹野茅上娘子一贈答歌
君が行く道のながてを繰りたたね燒きほろぼさむ天の火もがも
この頃は戀ひつつもあらむたまくしげ明けてをちよりすべなかるべし

塵泥の數にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ

かしこみと告らずありしをみ越路のたむけに立ちて妹が名告りつ

わぎも子が形見のころもなかりせば何物もてか命つがまし

天地の神なきものにあらばこそ我が思ふ妹に逢はず死にせめ

あはむ日をその日と知らずとこやみにいづれの日まであれ戀ひ居らむ

命あらば逢ふこともあらむわが故にはたな思ひそ命だにへば

ひと國は住みあしとぞいふすむやけく早かへりませ戀ひ死なぬとに

天地のそこひのうらにあが如く君に戀ふらむ人はさねあらじ

あはむ日の形見にせよとたわやめの思ひ亂れて縫へる衣ぞ

さす竹の大宮人は今もかも人なぶりのみ好みたるらむ

たましひはあした夕べにたまふれどあが胸いたし戀のしげきに

歸りける人來れるといひしかばほとほとしきに君かと思ひて

わが背子が歸り來まさむ時のため命殘さむ忘れ給ふな

心なき鳥にぞありけるほととぎす物思ふときに鳴くべきものか

卷十六

（前采女風流娘子作）

安積山かげさへ見ゆる山の井の淺き心をあが思はなくに

穗積親王御歌一首

家にありし櫃に鏁さし藏めてし戀の奴のつかみかかりて

×

かるうすはたぶせのもとにわがせ子はにふぶにふみて立ちませり見ゆ

長忌寸意吉麻呂歌一首

さしなべに湯わかせ子ども櫟津の檜橋より來む狐にあむさむ

詠二玉掃鎌天木香棗一歌

玉ははきかりて鎌麻むろの木となつめがもとをかき掃かむため

献二新田部親王一歌一首

勝間田の池は吾知る蓮なししかいふ君が鬚なきごとし

謗二佞人一歌一首

奈良山の兒手柏のふたおもにかにもかくにもねぢけ人のとも

池田朝臣嗤二大神朝臣奥守一歌一首

寺寺の女餓鬼まをさく大神の男餓鬼たばりて其の子うまはむ

大神朝臣奥守報嗤歌一首

佛造るまそほ足らずば水たまる池田のあそが鼻の上を掘れ

戯嗤二僧歌一首

法師らが髪の杭抗馬つなぎいたくな引きそ法師泣かまし

法師報歌一首

檀越やしかもな言ひそさとをさらがえつきはたらば汝もなかまし

×

いさなとり海や死にする山や死にする死ねこそ海は潮干て山は枯れすれ

嗤二唉痩人一歌二首

石麻に吾もの申す夏痩によしといふ物ぞむなぎとり

めせ
やすやすも生きてはあらむをはたやはた鱒を捕ると
川に流るな

高宮王詠二數種物一歌一首

婆羅門の作れる小田を食む烏まなぶた腫れて幡幢に
居り

×

この頃の我が戀力記し集め功に申さば五位の冠
この頃の我が戀力たばらずば京づかさに出でて訴へ
む

筑前國志賀白水郎歌五首

大君の遣さなくにさかしらに行きし荒雄ら沖に袖振
る
荒雄らを來むか來じかと飯盛りて門に出で立ち待て
ど來まさず
荒雄らは妻子のなりをば思はずろ年の八歳を待てど
來まさず

沖つ鳥鴨といふ船の歸り來ば也良の埼守早く告げこ
そ
大船に小船ひきそへかづくとも志賀の荒雄にかづき
逢はめやも
わが門の榎の實守りはむ百千鳥千鳥は來れど君ぞ來
まさぬ

越中國歌三首

澁谷の二上山に鷲ぞ子産とふ指羽にも君がみために
鷲ぞ子むとふ彌彦の己神さび青雲のたゝく日すら小
雨そぼ降る
彌彦の神のふもとに今日らもか鹿の伏すらむ皮のき
ぬ著て角つけながら
人だまのをさなる君がただひとりあへりし雨夜はひ
さしく思ほゆ

卷十七

荒津の海しほひしほみち時はあれどいづれの時かあ

が戀ひざらむ
みそのふの百木のうめのちる花の天に飛びあがり雪
とふりけむ

十六年四月五日獨居二平城故宅一作歌一首

かきつばた衣に摺りつけ益荒男のきそひ狩する月は
きにけり

左大臣橘宿禰應レ詔歌一首

ふる雪の白髪までに大君につかへまつれば貴くもあ
るか

紀朝臣清人應レ詔歌一首

天の下すでにおほひて降る雪の光を見れば貴くもあ
るか

大伴宿禰家持應レ詔歌一首

大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽か
ぬかも

平群氏女郎贈二越中守大伴宿禰家持一歌三首

なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならばすべ

なかるべし
萬代と心はとけてわがせこが抓みし手見つつしのび
かねつも
松の花花かずにしもわがせこが思へらなくにもとな
咲きつつ

八月七日夜集二于守大伴宿禰家持館一宴歌

女郎花咲きたる野邊を行きめぐり君を思ひ出たもと
ほり來ぬ
けさのあさけ秋風寒し遠つ人雁が來鳴かむ時近みか
も
馬並めていざうち行かな澁谷の清き磯廻に寄する浪
見に

守大伴宿禰家持贈二掾大伴宿禰池主一悲歌二首

春の花今は盛りに匂ふらむ折りてかざさむ手力もが
も
春の花のうつろふまでにあひ見ねば月日よみつつ妹
待つらむぞ

新河郡渡二延槻河一時作歌一首

立山の雪とくらしも延槻(はひつき)の河の渡瀬(わたりせ)あぶみつかすも

巻十八

太上皇御二在於難波宮一之時歌三首

左大臣橘宿禰歌一首

堀江には玉敷かましを大君の御舟漕がむとかねて知りせば

河内女王歌一首

たちばなの下照る庭に殿立ててさかみづきいますわが大君かも

粟田女王歌一首

月待ちて家には行かむわがさせるあから橘かげに見えつつ

射水郡驛館之屋柱題著歌一首

朝びらき入江こぐなる楫の音のつばらつばらに吾家し思ほゆ

×

油火の光に見ゆるわがかづらさゆりの花のゑまはしきかも

賀二雨落一歌一首

わがほりし雨は降りきぬかくしあらばことあげせずとも年は榮えむ

越前國掾大伴宿禰池主來贈戲歌

針嚢とりあげ前に置きかへさへばおのともおのや裏もつぎたり

巻十九

天平勝寶二年三月一日之暮眺二矚春苑桃李花一作歌二首

春の苑(その)くれなゐにほふ桃の花下照る道に出で立つ少女

わが園の李(すもも)の花が庭に散るはだれの未だ殘りたるかも

二日攀二柳黛一思二京師一歌一首

春の日にはれる柳を取り持ちて見れば都の大路思ほゆ

攀二折堅香子草花一歌一首

もののふの八十の少女が汲みまがふ寺井のうへのかたかごの花

夜裏聞二千鳥喧一歌一首

夜ぐだちにねざめて居れば川瀬とめ心もしぬに鳴く千鳥かも

聞二曉鳴雉一歌一首

あしびきの八峯(やつを)の雉(きざし)鳴きとよむあさけの霞見れば悲しも

遙聞二泝レ江船人唱一歌一首

朝床(あさどこ)に聞けば遙けし射水川朝漕ぎしつつ歌ふ船人

十二日遊二覽布勢水海一船泊二於多祜灣一望二見藤花一述レ懷作歌

藤浪の蔭なる海の底清みしづく石をも玉とぞ吾見る

見レ攀二折保寶葉一歌一首

わがせこが捧げて持たるほほがしは恰も似るか青ききぬがさ

太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉二天皇一歌一首

天雲をほろに蹈みあたし鳴る神も今日にまさりてかしこけめやも

春日祭レ神之日藤原太后御作一首卽賜二入唐大使藤原朝臣清河一

大船に眞楫しじぬきこの吾子(あこ)を唐國へやるいはへ神たち

×

君がゆきもし久ならば梅柳たれと共にか吾がかづらかむ

阿倍朝臣老人遣レ唐時奉レ母悲レ別歌一首

天雲のそきへの極み吾が思(も)へる君に別れむ日近くなりぬ

以二七月十七日一遷二任少納言一仍作二悲レ別之歌一

贈二貽朝集使掾久米朝臣廣繩之館一二首

岩勢野に秋萩しぬぎ馬並めて初鷹狩(はつとがり)だにせずや別れむ

壬申年之亂平定以後歌二首

大君は神にしませば赤駒のはらばふ田ゐを都となしつ

大君は神にしませば水鳥のすだくみぬまを都となしつ

閏三月於二衙門一督大伴古慈悲宿禰家一餞二之入唐副使同胡麻宿禰等一歌一首　（多治比眞人作）

唐國に行きたらはして歸り來むますらたけをに御酒たてまつる

×

松かげの清き濱邊に玉敷かば君來ませむか清き濱邊に

×

天地に足(た)らはし照りてわが大君しきませばかもたぬしき小里

二十五日新嘗會肆宴應レ詔歌四首

天地と相榮えむと大宮をつかへまつれば貴くうれしき

天にはも五百つ綱はふ萬代に國しらさむと五百つ綱はふ

天地と久しきまでに萬代に仕へまつらむ黒酒(くろき)白酒(しろき)を

島山に照れる橘うずに挿し仕へまつらなまへつきみたち

五年正月四日於二治部少輔石上朝臣宅嗣家一宴歌一首

新しき年のはじめに思ふどち い群れて居ればうれしくもあるか

二十三日依レ興作歌二首　（大伴家持作）

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも

わが宿のいささ村竹吹く風の音のかそけきこのゆふべかも

二十五日作歌一首　（大伴家持作）

うらうらに照れる春日に雲雀あがり心悲しもひとりし思へば

巻二十

七夕歌一首　（大伴家持作）

秋風になびく川邊(かはべ)のにこぐさのにこよかにしも思ほゆるかも

×

（大伴家持作）

宮人の袖つけごろも秋萩ににほひよろしき高圓の宮

たかまとの宮の裾廻の野つかさに今盛けるらむ女郎花はも

天平勝寶七歲乙未二月相替遣二筑紫諸國一防人等歌

わが妻はいたく戀ひらし飲む水にかごさへ見えてよに忘られず

時どきの花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲きでこずけむ

父母も花にもがもや草まくら旅は行くともささごて行かむ

わが妻も繪にかきとらむいつまもが旅ゆく吾は見つつしぬばむ

おほ君のみことかしこみ磯にふりうのはら渡る父母を置きて

八十國は難波につどひ船かざりあがせむ日ろを見も人もがも

×

とりが鳴くあづま男(をのこ)の妻わかれ悲しくありけむ年の緒ながみ

水鳥のたちのいそぎに父母にものはずけにて今ぞくやしき

家風は日に日に吹けどわぎも子が家言もちてくる人もなし

まけ柱ほめて造れる殿のごといませ母刀自おめかは

りせず
父母がかしらかき撫でさくあれていひし言葉ぞ忘れかねつる
百隈の道は來にしをまたさらに八十島すぎてわかれか行かむ
道のべの荊のうれにはほ豆のからまる君をはかれか行かむ
わが母の袖もち撫でてわがからに泣きし心を忘らえぬかも
蘆垣のくまどに立ちてわぎもこが袖もしほほに泣きしぞもはゆ
難波津に御船おろすゑ八十楫ぬき今は漕ぎぬと妹に告げこそ
あられふり鹿島の神を祈りつつすめらみくさに吾は來にしを
今日よりはかへりみなくておほ君の醜の御楯と出で立つ吾は

天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫のしまを指していく吾は
松のけのなみたる見ればいは人の吾をみおくると立たりしもころ
難波門を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく
あかときのかはたれ時に島かげを漕ぎにし船のたづき知らずも
行こさきに浪な音ゑらひしるべには子をら妻をら置きてらも來ぬ
旅とへど眞旅になりぬ家の妹が着せしころもに垢づきにけり
おほ君のみことにされば父母を齋瓮と置きてまゐで來にしを

×

からごろも裾にとりつき泣く子らを置きてぞ來ぬや母なしにして
津の國の海の渚に船艤たしでも時にあもが目もがもみわたせばむかつをのへの花匂ひ照りて立てるはしき
あか駒を山野にはがしとりかにて多摩の横山かしゆかやらむ
家ろには葦火たけども住みよけを筑紫にいたりて戀ふしけ思はむ
草まくら旅の丸寢の紐絶えばあが手とつけろこれの針持し
防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るがともしさ物思ひもせず

八月十三日在二内南安殿一肆宴歌二首

少女等が玉裳裾ひくこの庭に秋風吹きて花は散りつつ
あき風の吹きこき敷けるはなの庭清き月夜に見れど飽かぬかも

臥レ病悲二無常一欲レ修レ道作歌二首

うつせみは數なき身なり山川のさやけき見つつ道をたづねな
わたる日のかげにさほひて尋ねてな清きその道又もあはむため

×

咲く花はうつろふ時あり足引の山菅の根し長くはありけり

天平寶字元年十一月十八日於二内裏一肆宴歌二首

天地を照らす日月の極みなくあるべきものを何をか思はむ
いざ子どもたはわざなせそ天地のかためし國ぞ大和島根は
大き海のみなぞこ深く思ひつつ裳引きならしし菅原の里

依レ興各思二高圓離宮處一作歌

高圓の野のうへの宮は荒れにけり立たしし君の御代遠そけば

七月五日於二治部少輔大原今城眞人宅一餞二因幡守大伴寢禰家持一宴歌一首

秋風のすゑ吹きなびく萩の花ともにかざさず相か別れむ

×

水鳥の鴨の羽の色の青馬を今日見る人はかぎりなしといふ

三年春正月一日於二因幡國廳一賜二饗國郡司等一之宴歌一首

新しき年のはじめのはつ春のけふ降る雪のいやしけよごと

枕詞略解

（あ）

あかねさす。紫・照る・日・晝などに冠する。茜を注すことから、茜色を呈する意に轉じて冠辭となつた。茜は茜草科に屬する上昇草本でその根を粉にして暗赤色の染料をとる。

あかぼしの。明くにかかる。明星（あかぼし）は金星で、曉に輝くからいふのであるが、同音を繰返す音調が實に好い感を與へる。

あきつしま。大和に冠する。秋津島はもと大和國葛城の室の地で、孝安天皇の皇城の地となつて以來有名になつて、遂にかく用ひられるに至つたのである。

あさもよし。紀・黄などに冠する。あさは綠色の淺い色といふ意味から起るといふ説もあるが、恐らく紀伊國から麻裳の名産を出すからいふのであらう。青丹よし奈良・玉藻よし讃岐も同類である。

あしがちる。難波に冠する。難波は葦が多い地であるから、葦の花が散る難波とかかるのだといふ。

あしたづの。たづ〳〵しに冠する。たづ（田鶴）といふ音から、葦田鶴のたづ〳〵しと音調よく續けたのである。

あしびきの。山・峯に冠する。語源は二三説あるが、山の足（裾）が曳いてゐるところからいふのだともいふ。

枕詞略解

あちさはふ。目・夜にかかる。味鴨が澤山群れて徑行くといふ意味で、群（む）れを約めたために目にかかり、又この鳥は夜晝の別ちなく群れわたるから夜にもかける。

あぢのすむ。すにかかる。あぢがぢつとしてゐる州といひかけるのである。

あづさゆみ。引く・張る・高・本・末などにかかる。昔の弓は梓の木で造つたので、それ〴〵にその連想から起る。

あまづたふ。日にかかる、大空の路を傳つて行くといふ意から起る。

あまつみづ。仰ぎて待つにかかる。天つ水は雨のことである。

あまとぶや。輕にかかる。天飛ぶ雁といひつづけたので、雁と輕は類似音である。

あめしるや。日にかかる、知るは治める意で、天を治める日の意から來たのである。

あらたへの。藤に冠する。藤の繊維で織つた布は繊目が荒いから、荒妙の藤といひかけたのである。

あらたまの。年・月・日・夜・春に冠する。荒玉の砥（と）といひかけたのだといふ説の外に猶數説ある。

あをによし。奈良に冠する。昔奈良山から繪具の青丹（あをに）を産したので、その産物にかけて使はれたのである。玉藻よし讃岐・麻裳よし紀なども同類である。外にも説がある。

（い）

いさなとり。海・濱・灘などにかかる。いさなは鯨の古語で、鯨を捕る海とつゞけたのである。猶、いすなどり、磯菜採り、誘魚捕りなどの意であるともいふ。

いそのかみ。布留・振る・古などにかゝる。石の上は大和國山邊郡にあつて、その隣りに布留といふ地があつた。後に布留が石の上の内になつたので、石の上布留といひつゞけたのである。

いなのめの。明くにかゝるが後世は直ちに天明の意にもいふ。寢寐の目の覺めて開くといふ意から起る。

いぬじもの。直に伏すにかかる、犬は道に臥したりするから、犬の如くとかかるのだといふ。

いはばしの。間・側近・近江にかかる。石橋とは川の淺瀬に置き並べた飛石のことで、その間隔の遠近に依つて渡るに便不便があるから起る。

いはばしる。瀧・垂水・近江などにかかる。石の上を水が走り流れることから瀧にかかる。

いめたてて。跡見にかかる。射部（獵人）を澤山立てて射とめさせるといふ意味から起る。

いめびとの。伏見に冠する。射部人（狩の射手のこと）は叢や木蔭に伏しかくれて射るから伏見と言ひ起す。

（う）

うぐひすの。春にかかる。鶯の鳴く春と卒直に云ひかけたのであらう。

うちなびく。髪・草・春などにかかる。髪草などが打靡いてゐるから、その枕詞に使つたが、後には草木がなよ〳〵と打靡く春といふ意味で春にかけた。

うちびさす。宮・都にかかる。美日刺す宮といひつゞけたのだと冠辭考にはいふ。

うつせみの。身・命・人・世・妹・常・八十などにかかる。現しき身といふ意味から起る。

うつゆふの。隱りにかかる。うつゆふは野蘭の蘰で、中に蛹が隱つてゐるからかく使ふ。

うづらなく。古りにし里・古しにかかる。鶉は荒野に栖むから荒廢して古くなつたところにかける。

うづらなす。這ひにかかる。鶉のやうに野を這ひ廻るといふ意味からいふ。

うまざけ。神奈備・三輪にかかる。美酒を釀むから神奈備にかけ、美酒をかもす道具のみわ（甕瓦）から三輪にかけたのである。

うみをなす。長良の宮にかゝる。績みたる麻のやうに長い長柄とかけたのである。

（お）

おきつなみ。しきにかかる、沖の方から來る波が幾重にも折れ重つて寄せるから、物事の繁き意のしきにかけたのである。

おきつもの。かくる・名張にかかる。沖の底の藻は隱れて見えないから隱れにかけ、又古く隱るをなばると言つたから地名の名張（伊賀に在る）にもかけたのである。

おくつゆの。消・消ゆにかかる。草葉におく露が消え失せるからいふ。

おしてる。難波にかかる。大和越などの山上から難波の海を遠望した時に、難波一體の海面が押し渡して白く照つて見えたところから、その實景で枕詞にしたのである。

おほぐちの。眞神にかかる。狼を眞神といふことから、狼の口の大きな眞神といつたのである。

おほともの。三津・たけしにかかる。難波の大伴に三津と云ふ地があつたから、大伴といふ廣い地名を冠したのである。

おほとりの。羽にかかる。大きな鳥の羽といひかけたのである。

おほふねの。渡り・たのむ・たゆたふ・ゆくらくになどにかかる。海上などを渡つて行くに大船に乘つてゐれば安全であるから、わたり・たのむなどにかかる。

（か）

かがみなす。見る・み津・愛でなどにかゝる。なすはのごとくの意。鏡のやうにに見る意から起る。

かきかぞふ。ふた（二）にかゝる。物を數へるに一つ二つと數へ始めて行くことから起る。

かきつばた。にほへるにかかる。燕子花は花がにほやかなものであるところから艷麗なものを形容したのである。

かしのみの。獨にかかる。橿の實は苞の中にたゞ一個しか入つてゐないから起る。

かみかぜの。伊勢にかかる。語原は外にも説があるが、神風の吹き起る伊勢と見るべきであらうか。

かもじもの。浮くにかかる。鴨の如く浮くとつゞけたのである。じものは如くの意。

からごろも　着・たつ・裾・袖・紐などすべて衣に關するものにかゝる。又着馴らす意から奈良とかかることもある。

（き）

きもむかふ。心にかかる。肝は内臟の總名で、向ふは内臟が相對つて蟠つてゐるさまをいつたのである。古人は心の働きは肝から起ると信じてゐたものである。

（く）

くさまくら。旅にかかる。昔は旅に出ると野宿をするに草を引き集めて枕としたから草枕する旅とつゞけたのである。

くもゐなす。遠く・いざよひにかかる。雲のかかる遠い處の意味で遠きにかゝり、雲のやうにたゆたふ意味でいざよひにかかる。

（こ）

ことさけを。おしたる小野にかかる。琴は押し、酒は垂れるものであるからかく用ひられる。猶異説がある。

こときへぐ。百濟・唐にかかる。百濟人や支那人の言葉は喋しいばかりでわけが分らなかつたから起る。

ことひうしの。三宅にかかる。昔諸國から牡牛（こというし）を貢ぎ寮（みやけ）で飼つたからみやけにかけていふ。

こもりくの。初瀬にかかる。大和の初瀬の地は四方の山に取りかこまれてゐたところからこもりくの（隱り國）の初瀬の國と言ひつゞけたのだといふ。

こらがてを。巻向山にかかる。可愛い女の子等（こら）の手を枕と巻いて寝るといふ意味から起る。

ころもでの。手長・ひだ・なきなどにかかる。衣手は袖の意で、袖の聯想から起るものである。

（さ）

さかどりの。朝にかかる。朝早く山坂を飛び越えて行く群鳥を坂鳥といひ、それから朝にかかる。

さくらばな。榮ゆにかかる。咲き亂れてゐる櫻花を容貌の奇麗な少女にたとへる。

さざなみの。滋賀にかかる。さゞなみは琵琶の西岸大津市の北に隣接する地名で、相隣つてゐるからさゞなみの滋賀といひつゞけるのである。

さすたけの。君・大宮・舍人などにかゝる。芽ざし出た竹が榮えて行く意から起つた語。

さすやなぎ。根張るにかかる。柳を濕地にさすとよく根を張るところから起る。さしやなぎとも訓ずる。

さにづらふ。わが大君・いも・きみ・少女などにかかる。さは接頭語には丹。づらふは著いて居るの意。愛らしい紅顏の形容から起る。

さねかづら。逢ふにかかる。さなかづらともいふ。蔓草の一種で、長くはつて枝や幹に粘液が多い草である。

さゆりばな。後の意の古語ゆりにかゝる。ゆりと言ふ同音の語を重ねたのみである。

（し）

しきしまの。大和にかかる。大和の國にある敷島は、崇神天皇以來の都の地として有名であるところから、敷島のちる大和といふ意味で遂に枕詞になつたのである。

しきたへの。袖・衣・袂・床・家などにかかる。しきたへは織目の細い布であるが、遂に枕詞となつたのである。

ししくしろ。よみ・うましにかかる。釧には澤山鈴をつけたが、その繁くついてゐる程貴い人であつたところから、賞める意味で遂に枕詞になつたのである。語義については異説が多い。

しながどり。率・猪名野にかかる。息長鳥（しながどり）の義で鳰のこと。鳰は常に雌雄睦じく居並んでゐるから起る。

しなざかる。越にかかる。しなは坂、さかるは離るの意。坂を幾つも隔て離れてゐる意から起る。

しなてる。片足羽川にかかる。しなやかな狀をいふ語で、人の肩は自由に屈伸するからかたにかけたのである。

しぬのめの。しぬぶにかかる。篠竹の群といふ意で、同音の語を重ねて偲ぶにかけたのである。

しらがつく。木綿にかかる。白髪のやうなといふ意味から眞白い木綿にかけたのである。

しらくもの。龍田にかかる。白雲の立つ龍田と云ひ起したのである。

しらつゆの。消にかかる。白露ははかなく消えるからかう言つたのである。

しらとりの。鷺・鳥羽（地名）にかかる。鷺の白いところから起る。

しらぬひ。筑紫にかかる。肥・筑の海に光る海光（夜光蟲の光）を原因知らずとしていひかけたのである。

しろたへの。衣にかかる。白妙は楮の皮の繊維で織つた白い布で、上代ではそれが普通に衣に作られたから起つたのである。

（す）

すがのねの。思ひ亂れ・永き春日などにかかる。山菅の根が方々へ長く張りひろがるから起る語である。

すぎむらの。思ひすぐにかかる。思ひをへだてて同音の語を重ね用ひたのである。

（そ）

そらかぞふ。大津にかかる。おほよそに數へるといふ意からおほつにかけたのである。

そらにみつ。大和にかかる。大和の國は四邊山を以て圍まれ、扉を立てたやうに山山が空に滿つてゐるから起る。

（た）

たかてらす。日にかかる。高照らすは天照らすに同じく、天を照らす意から起る。

たくづぬの。しろ・しらにかかる。栲綱の意で、色の白いところから起る。

たくなはの。長きにかかる。栲繩の長いといふところから長きと呼び起したのである。

たたなづく。青垣山・にぎはだにかかる。山が重り合つてうづくまる樣から青垣山とつゞけ、軟かな肌が身に接するといふ意味からにぎはだにかかる。

たまかぎる。磐垣淵・ほのかなどにかかる。玉は水中から出るので淵にかけたのだらうともいふ。說が多い。

たまかづら。絕ゆ・長き・かけ・影にかかる。かづらは長く這ふ蔓草であるから起る。玉は美稱。

たまきはる。內・命・代などにかかる。魂極（たまきは）るの意で、人が生れてから死ぬまでの內といふことから起る。

たまくしげ。ふた・あく・おほふ・み・奥などにかかる。玉櫛笥の蓋・實などいふことから起つて來る。

たまくしろ。手に巻き・まきねしにかかる。玉釧（たまくしろ）は古代に於いて臂に飾りとしてつけたものであるからかく言ふ。

たまだすき。かけ・うねびにかかる。玉は美稱で、襷はかけるものだからかけにかかり、頭にかけることをうなぐといふから畝火にかかる。

たまだれ。緒にかかる。玉簾は玉を緒にぬき通して垂れるものであるから起る。

たまづさの。使・言ふ・言だに告げずなどにかかる。昔は玉梓の木に手紙を挿んで往來したから起る。後には直ちに手紙をいふやうになつたのだ。

たまぼこの。道・使・妹などにかかる。玉は美稱、鉾の刀（み）と言ふことから、同音を重ねたのである。異說もある。

たまもなす。より寢し妹・浮ぶにかかる。珠藻が波のまに〳〵寄つて來るやうに寄りそつて來て寢たといふ意から起る。

たまもよし。讃岐にかかる。讃岐の國からよい玉藻を產するので起つた。よしは助辭である。

たらちねの、母にかかる。後には直ちに母をさす。たらちは足はし育てる意。ねは親しみをあらはす言葉。

（ち）

ちちのみの。父にかかる。ちちのみは公孫樹の實で、同音をかさねていひ起したのである。

ちはやぶる。荒ぶる神・神・社・人などにかかる。ちは威力の猛々しい意であり、はやは迅速の意を示し、ぶるは荒ぶ宮ぶなどの接尾語と同じ活用形である。

（つ）

つがのきの。つぎ〳〵にかかる。樫（つか）の木の音の聯想から起る言葉である。

つぬさはふ。岩にかかる。さは接頭語。つぬはつたで、つた這ふ岩といひつゞけたのだといふ。

つまごもる。屋上山にかかる。妻と共にこもる屋といひつゞけたのである。

つゆじもの。置くにかかる。露霜の如くおくといひつゞけたのである。

つるぎたち。身にそふ・腰にとりはきにかかる。劍刀は身に佩くものであるから起る。

（と）

ときぎぬの。思ひ亂るにかかる。衣を解くときれ〴〵に亂れるものであるからいひかけたのである。

ところづら。尋ね行くにかかる。山の芋に似た野老（ところづら）葛は、冬でも葉が青々として居て、それを尋ねて行つて芋をほるからいひつゞけたのである。

とぶたづの。たづ〳〵し（たど〳〵しに同じ）にかかる。飛ぶ田鶴の音と同音を重ねたものである。

とぶとりの。飛鳥にかかる。古義には飛鳥の足輕（アシカルガアスカとなる）といひつづけたのだといふ。外にも說が多い。

とほつびと。待つ・門にかかる。旅に出てゐる遠つ人を家族の人が待つといふ意味からつひに固定して枕詞になつたのである。

とりがなく。東にかかる。古義には「雞が鳴いてゐる、わが夫（つま）起きよ。」といつて、妻（つま）が夫を起す意味からいひかけたのだといふ。外にも說が多い。

とりじもの。浮くにかかる。鳥のやうに水面に浮くといふ意味からひかけたのである。

（な）

なくこなす。したふ・ことだにととはす・ゆきとりさぐりなどにかかる。泣く兒が母を慕ふやうにといふ意から起る。

なつくさの。しなゆにかかる。夏の陽に當る草が萎（しな）え伏してゐる狀からいひ起したのである。

なつそひく。海上にかかる。ひいた夏麻（なつそ）を績（う）むといふ意から、うの音のある海上をいひ起したのである。

なまよみの。甲斐にかかる。生弓（なまゆみ）の轉訛で、生木の弓はかへるといふ意から起るといふ。外にも說が多い。

なよたけの。とをよる（たわやる）にかかる。女竹がとををとしなえるところからとををにかける。

なるかみの。音にかかる。鳴神（雷）の音といひつゞけたのである。

（に）

にはたづみ。流る・行くにかかる。俄か雨に庭上を流れて行く水をにはたづみといふから起る。

にほどりの。かづく・かつしか・おきなが・ふたりならびねなどにかかる。鳰は巧みに水中にかづくから起り、又水面に浮び出るまで息が

長く續くから息長ともつゞけ、雌雄相率ゐて並び歩く意からふたりならびゐも起す。

（ぬ）

ぬえとりの。うらなく・のどよひ・片戀などにかかる。鳥の一種たる鵺鳥の鳴き聲が、非常に物悲しく、又人を戀ふる樣にも聞えるからいひつゞけるのである。ぬえこどりともいふ。

ぬばたまの。里・夜・夕・閨・月・夢などにかかる。射干の實であるぬばたまの色が極めて黒いところから起る。

（は）

はしだての。倉・熊來にかかる。高い倉には梯を立てて登るから倉にいひかけ、梯などの横に渡す木をくま木といふから**熊來**とつゞける。

はたすゝき。ほにいづ・しのなどにかかる。薄が旗のやうにゆらぐのが目立つて見えるところから起る。

はなかつみ。かつてにかかる。花の咲いたかつみ（眞菰）のことで、同じ音を重ねていひかけたのである。

ははそばの。母にかかる。ははそは櫪の一種たる柞で、同音を重ねて母の枕詞にしたのである。

はふくずの。いや遠長く・たゆ・わかるなどにかかる。葛の蔓が這ひ延びてゐるところからいや遠長にかけ這ひ別れるので別るといひかけ、蔓が切れるところから絶えにかかる。

はふつたの。別るにかかる。這ふ蔓草が彼方此方にのび分れるといふ意からいひかけたのである。

春花の。たふと・移ふらにかかる。春の櫻の花がいかにも貴く感ぜられ、又移ろふさまが哀に感ぜられるから起る。

はるのひの。うらがなしにかかる。春の日がうららかに照るのをうら悲しのうらに言ひかけたのである。

はるびを。春日（地名）にかかる。春の日の霞む意でかすがに言ひかけたのである。

ひさかたの。あめ・みやこにかかる。天が悠久にして堅牢なものであるといふ上代の思想から起つた。

ひのもとの。大和にかかる。日本といふ國名は外國と交通するやうになつて、孝徳天皇の朝から始まつてゐる。その國名を重ね用ひたのである。

（ふ）

ふぢごろも。間遠・なるにかかる。藤の衣は織目が荒いから間遠にかけ、人民が勞働などに着てよれ〳〵になるからなるにかかる。

藤浪の。まつはるにかかる。藤の蔓がよくものにからまるところからいひかけたのである。

ふゆごもり。春にかかる。凡べての生物は冬の間は籠つてゐて春になると張り出るからいひかけたのである。

ふるゆきの。消・いちじろし・しろかみ・行きなどにかかる。その色と音調とから起つて來る。

（ま）

まきさく。檜にかかる。眞木を裂き割つて立派な檜材をつくるといふことからいひつゞける。

まくずはふ。春日の山・野にかかる。春日山は葛が多く這つてゐたのであらうといふ。

まくらづく。つま（夫・妻）にかかる。枕をつけて寢るつまといひかけたのであらう。

まそかゞみ。み・てる・きよし・ふた・面影・床などにかかる。鏡を見るといふ意からみ・みるにかけ、その他の語にも轉じて使はれるのである。

（み）

みけむかふ。き・あはぢ・あぢ・みななどにかかる。御食（みけ）に對ふ酒（き）といふ意味できにかけ、粟路・味などもその意から轉じて來る。

みさごゐる。洲・磯・荒磯にかかる。みさごがとまつて魚をねらふ・いそ・ありそとかけたのである。

みづぐきの。岡にかかる。筑前の遠賀郡に水莖の岡といふ岡があつて、それから廣く岡にかかるやうになつた。

みなのわた。か黒しにかかる。蜷（みな）の腸は黒いからか黒しといひかけたのである。

みはかしを。劍にかかる。み佩かしのつるぎをといひかけたのである。

（む）

むらぎもの。心にかかる。肝は内臟の總名で、群肝の意だといふ。古人は心の働きは皆肝から起るものと信じてゐたらしい。きも向ふも同じ。

むらさきの。匂ふ・子・名高などにかかる。紫の色のはでなところから匂ふと起し、その濃いことからこを起し、特に貴い色として名高につゞける。

（も）

もちづきの。たらはし・たれり・たたはしにかかる。望月の圓い形から滿ち足らふ形容に用ひたのである。

もちどりの。かからはしにかかる。鵐にかかつた鳥の樣子から物事に拘泥して離れないことにいふ。

もみぢばの。過ぎにしにかかる。紅葉が散るやうに過ぎ去つて終ふといふ意から起る。

ももしきの。大宮にかかる。百の石城（いしき）といふ意味から大宮にかかる。後には直ちに大宮をさす。

ももたらず。八十・五十・山田・いかなどにかかる。百に足りないといふ意味から起るのである。

（や）

やくもさす。出雲にかかる。出づる雲のいづもをいふに八雲さすをもつてしたのである。

やすみしし。君にかかる。古義には安み知らずといふ意で、らを省きそれを歌ひ切つてししといつたのであるといふ。説が多い。

（ゆ）

ゆくとりの。あらそふにかかる。大空を飛んで行く鳥が、われ先にと先を争ふさまから起る。

ゆくみづの。かへらぬにかかる。流れ行く水の歸らぬさまから歸らぬにかかる。

ゆふづつの。かゆきかくゆきにかかる。金星（明の明星・宵の明星）が夕は西朝は東と居所を移すことから聯想したものである。

ゆふばなの。さかゆにかかる。木綿即ち楮の皮の繊維で織つた純白の布で造つた花の意から榮ゆと起したのである。

（わ）

若草の。妻・若・あゆひなどにかかる。うひ〳〵しく愛らしい妻女を若草で形容したのである。

わぎもごに。あふち・あはぢ・あふみなどにかかる。吾妹兒に逢ふといふ音調から起る。

わたのそこ。沖にかかる。海の底の沖といひ起したのである。

（ゐ）

ゐまちづき。明石にかかる。眞暗な宵から居待月が上るに從つて殊更に明くなるから起る。

ゐるくもの。たちてゐてもにかかる。山にかかつてゐる雲の起る様からいつたのである。

ゐるたづの。ともしききみはにかかる。洲に降り立つてゐる田鶴の姿を珍らしがつてかくいひかけたのであらう。

（を）

をとめらに。あう・逢坂山にかかる。處女らに媾會する意から起る。

をみなへし。さき・咲野・咲澤などにかかる。女郎花が咲くといふことからさきといひ起したのである。

— 終り —

長歌作者別索引

あ

安貴王
遠妻の(1)……一三

い

軍王
霞立つ(1)……七
石上乙麿
父君に(6)……一九七
石上乙麿の妻
いそのかみ(6)……一九六
大君の(6)……一九六

お

置始東人
やすみしし(2)……五五
大伴池主
大君の(17)……三八八
藤浪は(17)……三九九
朝日さし(17)……四〇四
青丹よし(17)……四一〇
大伴坂上郎女
久方の(3)……三九一
たくづぬの(3)……三九四
おしてる(4)……三九七
常世にと(4)……四〇三
おほなもち(6)……四〇七
わたづみの(19)……四一三
大伴旅人
み吉野の(3)……四一八
大伴三中
天雲の(3)……四二二
大伴家持
我宿に(3)……四二九
大君の(18)……四三一
すめらぎの(18)……四三四
天照らす(18)……四三七
あしびきの(18)……四四〇
新玉の(18)……四四三
天地の(19)……四四五
ちちのみ(19)……四四八
時毎に(19)……四五四
時鳥(19)……四五五
我が背子と(19)……四五八
春過ぎて(19)……四六〇

蜻蛉は(19)……四六四
思ふどち(18)……四六五
天ざかる(19)……四六七
桃の花(19)……四六九
此處にして(19)……四七一
古へに(19)……四七四
天地の(19)……四七六
あきつ島(19)……四八六
あしびきの(19)……四九〇
すめらぎの(20)……四九二
おほきみの(20)……四九六
大君の(20)……五〇〇
大君の(20)……五〇三
久方の(20)……五〇七

か

柿本人麿
たまだすき(1)……一一
やすみしし(1)……一四
やすみしし(1)……一六
やすみしし(1)……一七
やすみしし(1)……一九
やすみしし(1)……二一
石見の海(2)……二六
つぬさはふ(2)……二八
石見の海(2)……三一
天地の(2)……三八
とぶとりの(2)……四二
飛鳥の(2)……四八
かけまくも(2)……五七
天飛ぶや(2)……六〇
秋山の(2)……六三
たまもよし(2)……六六
やすみしし(3)……七一
やすみしし(3)……七六
三諸の(9)……二四五
柿本人麿歌集の歌
葦原の(13)……二九八
笠金村
越の海の(3)……八七
大君の(4)……一一三
三香の原(4)……一二六
たきのうへの(6)……一六二
足曳の(6)……一六八
おしてる(6)……一七三
名寸隅の(6)……一七八
たまだすき(8)……二一六
笠金村歌集の歌
梓弓(2)……一九
人となる(9)……二四九
うつせみの(9)……二五一
鴨君足人
天降りつく(3)……七三
天降りつく(3)……七五
輕太子
こもりくの(13)……三〇四
久米廣縄
谷近く(19)……四七二
車持氏娘子
さにづらふ(16)……三六六
車持千年
うまごり(6)……一六五
いさなとり(6)……一七七

け

遣新羅使人集
すめらぎの(15)……三五五
遣唐使人某の母
秋はぎを(9)……二五三

こ

孝謙天皇
そらみつ(19)……四八九
古歌集の歌
ますらをの(9)……二七〇
乞食者
いとなせの君(16)……三七二
おしてるや(16)……

さ

防人倭文可良麿
足柄の(20)……四九九
齋明天皇
神代より(4)……一一七

し

聖武天皇
をす國の(6)……一九三
舒明天皇
大和には(1)……二
竹取翁
みどりごの(16)……三六〇
高橋朝臣
白妙の(3)……一一四
高橋蟲麿
白雲の(6)……一九〇
高橋蟲麿歌集の歌
しながどり(9)……
春の日の(9)……
しなてる(9)……
白くもの(9)……
白くもの(9)……
島山を(9)……
ころもでの(9)……
うぐひすの(9)……
草枕(9)……
わしのすむ(9)……
ことひうしの(9)……
鳥がなく(9)……
葦の屋の(9)……
丹比笠麿
たわやめの(4)……
丹比國人
鳥がなく(3)……九二
夕されば(15)……三四九
田邊福麿
やすみしし(6)……一九九
現つかみ(6)……二〇三
我大君(6)……二〇五
田邊福麿歌集の歌
白玉の(9)……五四
小垣内の(9)……二五六
古へに(9)……二五八
父母が(9)……二六〇
田邊蟲麿歌集の歌
三香の原(6)……二〇八
やすみしし(6)……二一〇
やちほこの(6)……二一三

ち

持統天皇
やすみしし(2)……三六
飛鳥の(2)……三七

て

天智天皇

香具山は(1)……一五
天智天皇の皇后
いさなとり(2)……三四
天智天皇の官女
うつせみし(2)……三三
天武天皇
み吉野の(1)……一〇

に

丹生女王
なゆたけの(3)……九五
女官
飯はめど(16)……三六八

ぬ

額田王
冬ごもり(1)……六
味酒(1)……九
やすみしし(2)……三五

ふ

藤原北卿
久かたの(9)……二四六
葛井老
天地と(15)……三五七

ま

間人老
やすみしし(1)……三

み

三方沙彌
大殿の(19)……四八二

む

六鯖
わだづみの……一四二

や

山上憶良
大君の(5)……一三
父母を(5)……一四
瓜はめば(5)……一四
世の中の(5)……一四
掛けまくは(5)……一四
うちびさす(5)……一四
風まじり(5)……一四八
神代より(5)……一五二
たまきはる(5)……一五六
世の人の(5)……一五九
ひこぼしは(8)……二一〇
山部赤人
天地の(3)……七九
すめろぎの(3)……八三
三諸の(3)……八五
春日を(3)……八八
古に(3)……一〇〇
やすみしし(6)……一六七
やすみしし(6)……一七〇
やすみしし(6)……一七二
天地の(6)……一七七
やすみしし(6)……一八〇
あぢさはふ(6)……一八二
みけむかふ(6)……一八五
やすみしし(6)……一九四
山前王
つぬさはふ(3)……九八

ゆ

雄略天皇
籠もよ(1)……一

よ

詠人知らず
やすみしし(1)……一九
すめろぎの(1)……二四
なまよみの(3)……八〇
わたづみは(3)……九三
眞葛はふ(6)……一八六
おしてる(8)……二一四
處女らが(8)……二二五
天地の(10)……二七一
冬ごもり(13)……二七五
三諸は(13)……二七六
天ぎらひ(13)……二七六
天雲の(13)……二七八
葦原の(13)……二七九
幣まつり(13)……二八一
斧取りて(13)……二八二
やすみしし(13)……二八三
空みつ(13)……二八五
青丹よし(13)……二八五
近江の海(13)……二八七
大君の(13)……二八八
ももづたふ(13)……二九一
處女らが……二九一
天橋も(13)……二九二
沼名川の(13)……二九三
敷島の(13)……二九四
秋津島(13)……二九五
古ゆ(13)……二九六
たゞに來ず(13)……二九六
新玉の(13)……二九八
小治田の(13)……二九九
春されば(13)……三〇一
三諸の(13)……三〇二
さし燒かむ(13)……三〇三
打ち延へて(13)……三〇五
わが背兒は(13)……三〇七
すがのねの(13)……三〇八
みはかしを(13)……三一一
み吉野の(13)……三一二
み吉野の(13)……三一三
内日さつ(13)……三一五
こもりくの(13)……三一七
おしてる(13)……三一九
神風の(13)……三二二
紀の國の(13)……三二四
里人の(13)……三二六
物思はず(13)……三二七
こもりくの(13)……三二八
つぎねふ(13)……三二九
紀の國の(13)……三三一
玉梓の(13)……三三二
しなてる(13)……三三四
かけまくも(13)……三三五
敷島の(13)……三三九
ももしぬの(13)……三四一
こもりくの(13)……三四一
こもりくの(13)……三四三
高山と(13)……三四三
大君の(13)……三四四
この月は(13)……三四六
見さくれば(13)……三四八
朝されば(15)……三五一
はしだての(16)……三七〇
はしだての(16)……三七〇
かしまねの(16)……三七〇
天地の(19)……四八三
空みつ(19)……四八四